253
734

0041455000

0041455-000

253-734

③

皇道教育論

尼子止・著

モナス

昭和9

AHB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

파3U 61

皇道教育論

尼子止著

東京 モナス 刊行

昭和九年

253-734

253-7

はしがき

昭和維新、非常時日本の聲は、全日本をあげての緊張裡に置かれてゐる。何がかゝる情勢に現下の日本を立たしめたか。それは國際的には、日本の國際的進出・發展のあまりにも目覺ましく、國際場裡はひとり白人のみの舞臺と思はれたところへ、東洋の孤島日本が、文字通りの躍進また躍進、國際勢力の最高峰を摩するに至つたことと、滿洲事變を契機としての國際聯盟脱退といふ重大問題は、歐米人をして恐日症に罹らしめ、それがかなりの高度と速度を以つて彼等の胸に蔓延し、國際的に孤立日本たらしめんとする。加ふるに一九三五・六年の國際的、軍備的最大難關を控へてゐることは、非常時日本の外部的要素である。一方國内的方面に就いて見るに、社會思想に於て極めて憂慮すべきものがある。曰くマルキシズムの横行である。彼等はプロレタリアートの世界的團結を空想し、勞働者に祖國なしとて、國家を否定し

て、國際的生活を夢見つゝ、社會の變革から國體にまで及ばんとする。實に危險千萬の言動を敢てし、多感なる青年、單純なる勞働者、新奇の理想に走る青年學徒をこの傘下に收めんとするに至つたことは、我が國家意識及國體觀念の麻痺によるものと言はざるを得ない。又政黨は政黨あるを知つて、ともすれば國家國民を忘るゝが如き行動に出でなんとする。我が國は一時官僚の害毒に懲り、再び政黨の弊害續出といふ憂ふべき狀態にまでおしつめられて來たのである。更に財界を見るに彼等は自己あるを知つて他あるを知らず個人あるを知つて國家あるを忘れ、ともすれば賣國的行爲にも出でかねまじき有樣にある。これが現實日本の姿である。而かも、農山漁村及中小商工業者の窮狀に至つては、これを默視するに忍びざるものがある。極めて多難に直面してゐるのが現在日本の國內的及對外的情勢である。

かくの如き危機にある日本、一步誤らば如何なる事態を惹起するやもはかりがたき日本、これが指針こそ、幾多の難關突破の鍵であり、光明である。

これ最近頓に皇道維新が叫はれ、日本精神の高調せられる所以である。皇道の宣揚といひ、日本精神の發揚といひ、共に我が皇室を守護しまつりて國家を泰山の安きに置かんとするものである。國體觀念を明徹にし、國家意識を高調すること以外に我が國內外の諸案件を突破し征服する方案はないのである。現下の世界各國には國際主義を唱へながら、その爲すところは徹底せる國家主義にあらざる國何處にありや。而かも彼等はプラグマチカルな國家主義を奉じて行動しつゝあるではないか。然るに我が國の皇道中心日本精神に依據するものは單なる排他的ではない。各國の國是と矛盾撞着するものではない。國家統制の原理を皇道に置き、此の見解に於て社會思想を是正し、政治を革正し、經濟生活をはじめ庶民生活を規正せんとするものである。中外に施して悖らざる天下の大道である。

余が雜然たる教育思想及教育事實の統制原理として玆に皇道教育を高調力說する所以のものは、以上の國內外の狀勢を根本的に匡救せんとする微意に

外ならない。幸に本書が教育改善及國民思想の遷善にとつて、何らかのよすがたり得ば著者の欣幸とするところである。

本書成るにあたり、大場喜嘉治君、岡田怡川君が資料の蒐集等に多大の援助を與へられしことを附記して、兩君に感謝の意を表するものである。

昭和九年九月一日

關東大震災記念日に

著者識

目次

前篇 皇道教育論……一―一四四
一、緒論……一
二、皇道の意義……三
三、皇道教育とは何ぞ……九
四、皇道教育の提唱……一一
五、皇道教育と教育者の人格……一二
六、皇道教育の目的……一五
七、皇道教育の方法……一七
八、皇道と非常時教育の諸問題……四四
九、皇道と思想善導……七八
一〇、皇道と家庭教育……一〇四
一一、皇道と學校教育……一一〇

一二、皇道と社會教育……一二五
一三、皇道と軍隊教育……一二九
一四、皇道と宗教々育……一三五
一五、皇道と政教一致……一三三
一六、結　論……一四二
後篇　日本精神論……一五四—二四八
一、日本精神の目覺め……一四五
二、日本精神とは何ぞや……一四八
三、國史を彩る日本精神……一六二
四、國體と日本精神……二一八
五、文化と日本精神……二二七
六、政治と日本精神……二三四
七、教育と日本精神……二三九
八、世界の動向と日本の使命……二四三

皇道教育論

尼子止述

前篇　皇道教育論

緒言

吉人の生命に觸れる幾多の問題！　それは止むに止まれぬ至情と必死の覺悟とを以て解決せねばならない。皇道政治を如何にして徹底せしむべきかの問題、非常時局に於ける國策樹立と其の實現問題、資本主義的經濟機構の改廢問題政黨政派の革新問題、財閥及び特權階級の覺醒問題、軟弱追隨より自主强硬への外交問題、混亂の狀態にある國民思想の統制問題、農山漁村及び小商工業者の救濟問題、失業者及び細民の救護問題、物價調節の問題、現代に於ける模倣的乃至慣習的教育を如何に革新すべきかの問題等々枚擧に遑なきまでであるが、それ等は何れも喫緊事で些の猶豫を許さぬ問題である。而も問題は更に問題を生み、愈々複雜多岐に亘つて歸一する所を知らず、人皆五里霧中に彷徨しつゝあるの嫌ひがある。加之社會そのものゝ缺陷は個人個人の魂を犯して頽敗的氣分を醸成し、將來有爲の青年學生

までが殆ど自暴自棄の狀態に陷り、過激思想に趨るか、否らざれば骨と魂とを拔かれたやうなグニャグニャ者となつて了ひ、君國の爲に、或は世界文化發展の爲に貢獻することは愚か、却つて之を破壞せんとするの傾向が極めて濃厚である。隨つて社會や國家や人類生活の將來は如何に變轉するか、若し此の儘押し通して行つたならば結局人類の破滅を招くの外はないのである。

惟ふに世界の凡ゆる問題は畢竟人と人との問題である。人と人との問題を煎じ詰めると人心の問題となり人格の問題となる。一般に人の心が道德性によつて導かれ、常に普遍的人格的に働くことになれば社會も國家も全人類もより善く進展する筈であるが、國民相互の間に於ても、各國民族間に於ても、そこに融合調和が出來ず、虎視耽々たる狀態にあると云ふことは、凡ての人々が物慾に捕はれ、利己主義に陷り、人心が極端に腐敗した結果である。かくの如き傾向にある人心を改めるには教育の革新に俟たねばならぬ。

今日の政治家も實業家も教育に對して注意を向け始めたのは事實であるが、概して教育に對する尊重の念に乏しく案外教育に關して無理解なのは甚だ遺憾である。眞に教育そのものゝ本質を凝視し、且之を把握するときは教育程有意義有價値なものは他にあり得ないといふことを認識するであらう。

教育は國家發展の基礎であり、文化創造の指南車であり、人類意識の本質を呼び覺すものであり、人格陶冶の機關であり、非常時局の解決への要請であり、全人類に對して生活原理を附與するものであり、進んで止まぬ創造性を發揮するものであり、此の世は教育に依つてのみ救はれるといつても敢て過言ではない。教育の眞義は自己教育である。

自己の智德を研かないでは、自我人格の修養を積まないでは自己を救ふことは出來ない。自己一身さへ救ふことの出來ない者に人の世を救ふことは出來ない。

若し夫れ人類の凡てが自我本質としての人格を研き、之を遺憾なく此の世に具現することに努めたならば、茲に穢土の此界は淨土と化し、文字通り共存共榮の實を擧げることが出來、そこに文化の花咲き匂ふ樂園が展開されることは明かである。

二　皇道の意義

皇道といふ語は、その源を支那に發する。支那に於ける文選の西都賦に「博レ我以ニ皇道一、弘レ我以ニ漢京一」と見えて居り、又李華著作卽壁記にも「潤ニ色乎大猷一、發ニ明乎皇道一」と出てゐる。何れも皇は宏大の意で、皇道は卽ち大道であり、仁義の道である。壁記に於ける皇道は大猷の對句として使用したものであり、大猷は皇猷とも帝猷とも云つて「大きなはかりごと」を意味する。そこで皇猷といひ大猷といひ皇道といひ皆同意語であるといふことが出來る。

是れは支那に於ける皇道の大意であるが、我が國では多少その異義を異にする。無論我が國に於ても、昔は支那と同じく大道の意に解したやうであるが、併し乍ら我が國では、初めから抽象的でなく具象的に之をスベラギノミチと云つて我が皇祖並に御歷代の天皇の天下を御統治遊ばされる道といつてゐる。換言すれば、皇道とは我が國體を基調として立てた我が國固有の道卽ち神道であり、神ながらの道であり、君臣一體神人合一の天地の公道である。

我が國に於ける皇道の出典は菅原道眞の類聚國史第百七十一卷災異部六の地異の條に收錄する嵯峨天皇の天長五年八月甲子右大臣從二位兼行皇太子傳藤原緒嗣等の奏狀に「臣聞。陰陽平分帝德脩以休若。天地何心。皇道虧以震鼓。神理レ違、冥府契合者」と見えてゐるのが恐らく今日遺存してゐる記錄の中に於て最も古いものではなからうか。こゝに所謂皇道とは天皇の道を謂つてゐるのは固より論を要せぬところである。

次に後一條天皇の詔には「節儉者、上德富レ國之表議也。損益者、前賢安レ民之治要也。蓋是皇道之彝訓」と見えてゐるが之も亦天皇の道と同一義であると拜察する。降つて德川時代に於ては皇道の語を神道と同義語に用ゐられることゝなつてゐる。例へば白川神道の經典たる伯家部類に收めてゐる櫻町天皇の天文三年十一月十九日大嘗會御供神の祝詞の中に「神璽增レ光氏神威增益志、神道興隆仁。皇道榮昌仁志天云々」とあるのは卽ち是である。

要するに出典の上から皇道を考察すると、皇道とは大道であり、仁義の道であり、神道であり、スベラギノミチであり、天祖の神德其のまゝの淸く潔く明るく且つ正しき誠の道である。斯道は實に我が歷代天皇の統治大權の根本原理であるばかりでなく、我が民族宗敎並に國民道德の根源を爲すものであるといふことが出來る。

皇道とは天地の公道であり、惟神の道であり、國家統治の根本原理であり、生々化育の法則であり、古今を通じて誤ることなく、東西に施して悖ることなき首尾一貫の道德意識をいふのである。此の皇道の國日本は德治主義を以て政治の根本義とし、血統を以て君位相傳の原理として居る國である。國家構成の三大要素（主權、人民、國土）中最も重要なのは獨立主權である。此の主權が其の實を具備する爲には是非共絕對性と規範性とがなければならぬ。其の

爲には血統を以て君位相傳の原則とせねばならない。是れ主權が不動にして且つ神聖不可侵のものでなければならない所以である。民を導くに德を以てすることなく、權を以てする時は免れて恥なきことゝなるから、儒敎に於ても王道を尊び覇道を斥けて居る。我が國政治の根本義が皇道主義であり、德治主義であることは遠く神代の昔からの麗はしい傳統である。

此の麗はしい德治主義と血統主義との下に授受せられる天津日嗣に對して天壤無窮といふことが期待せられるのは固より當然の歸結である。

以上は神勅の中に明示された所であり、又代々の天皇の詔勅に於ても皇道精神の內容を拜承することが出來る。殊に神武天皇の詔勅中にある「八紘を掩ひて宇と爲す」の語は直截簡明に皇道の眞義を言ひ表はされたものと拜察する。八紘は天ケ下であり、世界であり、宇は家である。隨つて八紘を掩ひて宇と爲す」とは世界を一統べにして仁政を施し、全人類をして一家團欒の樂を享受せしめようとの意に外ならない。

此の「宇と爲す」とは如何にも意味深長なもので、飽く迄一視同仁の慈眼を見開いて人種や民族の差別を撤し、總べてを家族的に取扱ひ、各々をして生の本義を完うせしめ、其の志を遂けしめようとし給ふ御惠み深い眞情が無限に湧出するのを感得し、唯々感泣せざるを得ないのである。

明治天皇の敎育に關する勅語は、日本國民の遵守すべき道德の大綱であるばかりでなく、世界人類の則るべき道德敎であり、皇道の眞義を披瀝されたものである。

今上陛下が昭和八年三月二十七日御煥發になりました詔書の中にも「國際平和ノ確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス」と仰せられ、「更に愈々信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ」と宣ひ、最後に「普ク人類ノ福祉ニ貢獻センコトヲ期セヨ」と仰せられたのは、全く皇道の廣い〳〵精神を宣明せられたもので、我が國民が齊しく感激する所であり、諸外國人と雖も其の眞意を了得したならば悉く感泣せねばならぬ所である。

我が皇道の精神ほど、根本的な、而も包括的な、廣く、深く、清く、優しく、麗はしく、且つ雄々しい精神は世界にない。それはバイブル以上であり、經典以上である。世界三聖の敎も其の中に包含せられ、世界の哲學者や倫理學者も我が皇道の前では議論が出來ない。何故なら我が皇道の精神は世界の凡ゆる主義思想の上に立ち、之を指導し統一し、人類意識の本質を呼び覺して總べてに神人合一、人格至上の信念を與へ、全人類をして一人の例外もなく、各々其の目的を達成せしめ、理想を實現せしめようとする廣大無邊、至純至美、至高至大の精神だからである。

我々日本國民の特質は神勅に生き、詔勅に活き、皇道の精神に生くる所に存する。皇道の精神を取り去れば日本國民としての精神生命は雲散霧消するのである。皇道の精神は我々の中心生命であり、日常生活の指導原理である。隨つて皇道の精神なしには生きて行かれぬのだ！

皇道精神の痲痺した國民は國民としての資格がない。況んや政治家たり敎育家たるの資格に於てをやだ！皇道の精神を失つた者は最早魂を抜かれた空蟬の殼だ！魂を抜かれた者が如何に高位高官に昇つても、それは恰も骸骨が舞踏をしてゐるやうなものである。

我々は宏大無邊な普遍妥當的な意義を有する皇道精神に生きる者なるが故に之を世界に弘通せねばならない。皇道を世界に布くのは皇道に依つて世界人類を覺醒せしめ、之に依つて各國の日常に於ける云爲行動を規定せしめ、又之に依つて眞に人間としての生活を意義あらしめんが爲である。略言すれば是は世界總動員の叫びである。然らば我々は何故皇道を世界に布くべく全人類に向つて動員令を下さねばならないか。それは最近國際聯盟の無力さ加減が暴露され、我が國をして脱退するの止むなきに至らしめしのみならず、世界の狀勢は愈々危殆に瀕し人類の生治は益々窮迫することゝなり、人類を驅りて奈落の底深く陷れて了ふことゝなるからである。今日の行き詰れる全人類生活の根本的救濟はどうしても皇道の精神を以てするより外に道が無いからである。而も今日の利慾に眩惑せる人間！心身惰氣を帶ぶるの人間！豺狼飽くなき人間、良心の痲痺した人間！頽廢氣分の戀愛病患者等を濟度するには、どうしても生溫い方法では行かぬ。隨つて我々は皇道の精神を天下に呼號するばかりでなく、徹頭徹尾皇道の精神を實行し又實行せしめねばならぬ。全人類をして悉く之を實行せしめるには實行せしめる丈の背後の力がなければならぬ。即ち我が皇道の國から世界列國に働きかけ、凡てに信奉せしめる丈けの實力がなければならぬ。世界をリードするには我が九千萬の同胞が皇道精神に目覺め之を中心生命として協心戮力、直往邁進すればそれで澤山であり。世界の革命史に依つて概算すれば世界十九億の人類を統制するには約六百萬の人間が眞に一致團結して掛れば慥に出來る割合となるのである。

全一體としての精神生命！祖國愛乃至人類愛に燃ゆる所の皇道精神を有する我々日本人はムッソリーニでも、ヒツ

トラーでも、マグドーナルドでも、ルーズヴエルトでも、我が腹の中に泳がせて居るのである。無論我々の意識は全宇宙を抱擁して居るのであるが、一至同仁の慈眼を見開いて總べてを生かして行く所に皇道精神の特質が存するのである。

さうした廣大にして而も情意濃かな皇道精神を持つて居る我々日本人の中から、眞に世界的英雄が生れねばならないのであるが、何故かそれに該當する者が現出しない。現下は國家空前の非常時であり、大英雄の出現を待望せられてゐるにかゝはらず、却々出現しさうにない。そこにはまだ非常時が全國民の心肝骨髓にまで徹する程甚だしいものが無いからでもあらうが、又一面島國根性と一騎打と、狹量と、物質化と、官尊民卑の事大思想と、極端な利己主義と、黨派的感情と、對立的氣分と、野心と、政權慾と、嫉妬と、陷擠と、自惚と、衒氣と、虛榮心と、歐米崇拜と、舶來品過重と、卑屈と、陋劣と、控え目と、沈默と、お世辭と、追隨と、灰色と、手蔓と、情實と、微溫的と、妥協と、僞善と、賄賂と、買收と、官僚風と、不明と、淪落と、金權萬能と、外來思想の無批判的輸入と、民族的精神の忘却と、持續力の不足と、努力精進の缺乏等が禍ひして居るのである。

斯うした國民性の缺陷と、社會の陋習と、思想の混亂と、教育の不徹底等が英雄の出現を妨げて居り、皇道精神の行く手を遮斷して居るのである。

隨つて眞に皇道の精神を發揮する所の新英雄たり、大政治家たり、大教育家たり、大宗教家たり、大國民たらんと欲せば須らく皇道の精神を把握し、斷乎たる決心と鞏固なる意志と、堅忍持久力とを以て、凡ゆる障碍を排除して

地に突進し斃れて後止むの覺悟が無ければならない。

三　皇道教育とは何ぞや

皇道教育とは皇道本位の人格教育である。皇道人格の完成を目的とする教育である。皇道人格とは皇道の精神を自我の中心生命とする人格であり、自我全生活の指導原理を皇道の精神に置く價値主體を云ふのである。

人格教育に就いてはリンデやブツデやフエルスターなども荐りに之を唱導した所でありそこには理論の見るべきものがあるけれども、其の人格の內容とする所(リンデは人格の特質を熱誠能感、個性顯明、生動獨創、操守堅固とす)が餘りに抽象的な嫌ひがあつて如何なる人間を養へばよいか之を具象的に現はすことが困難であつた。又假令彼れの要求するやうな特質を持つ人格を養成したところで、其は日本人でもなく英國人米國人でもなく、把捉することの出來ぬ空漠たる人で、歷史的背景を持つたそして大地に足を踏み締めてゐる生きた人間ではあり得ない嫌ひがある。

然るに皇道人格其のまゝ特殊的具象的方面と共通普遍的方面とを抱擁するのである。皇道人格は三千年來君民一體の共同生活に依つて養はれた歷史的背景を有つ人格であるから、一面特殊的であり具體的であるが、皇道人格の先驗的規範的方面から言ふと宏大無邊なものであり、共通普遍的であるといふことが出來る。

皇道人格の完成！是れこそ我が國教育の永遠に亙る目的であらねばならない。皇道人格の陶冶を拔きにした我が國

の教育は無意味である。皇道人格の養成を措いて他に我が國の教育はあり得ない。然るに我が國の教育者は徒に外來の教育思想を尊重し之を適用することにのみ是れ努め、我が皇道の精神に基づく教育を建設することを忘れてゐた。日出でゝ三竿！尙も睡眠を貪りつゝ自我に目覺めないで、只管他の追隨者たり其の奴隷的地位に甘んじつゝ模倣教育を事としてゐた。言ひ換へれば我に、より以上の尊き教育的源泉があるに拘はらず、それを汲み上げることを知らずして、他の冷え凍つて固くなつたやうな、熱もなければ情もなく且つ生命もない所の抽象的な教育思想を無批判的に取り入れて得意になつてゐたのである。それ故我が國にはこれまで殆ど生きた教育は行はれてゐなかつた。借用教育輸入教育、飜譯教育のどこに生きた所があるか？

無論それも我が教育の參考に資するとか其の內容を豐富にする爲だとか、或は一種のヒントを得んが爲には役立つ所があるがそれは飽くまで自己を主とし、己れの生命を啓培する一種の糧となるもので、決して他の追隨者たらんが爲ではない。我が皇道の教育に役立たしめんが爲に取り入れるに過ぎないのである。

是まで我々は歐米の人文主義の教育や、勤勞主義の教育や社會的教育や文化教育等々に魅せられ惑はされるたが、今や我々は我が皇道の教育へ目覺めねばならぬ時が來た。皇道本位人格至上の教育を標榜して起たねばならぬことゝなつた。

皇道本位の教育は唯我が國にのみ適用せらるべき偏狹な教育のやうに聞えるけれども、決してさうではない。それは前項にも述べたやうに皇道の意義が世界的である以上、世界の隅々までも之を適用して然るべきものである。啻に

皇道教育が人類の教育に適用されるとか、當て篏まるとか云ふことのみに止まらず、皇道卽ち天地の公道を規範として世界の教育を改造すべきである。否らざれば全人類は救はれない。

四、皇道教育の提唱

我が國の教育はこれまで歐米の取次教育受賣教育に過ぎなかつた。或はペスタロッチだの、フレーベルだの、ヘルバルトだのゝ教育を其の儘模倣したり、或はペルゲマンや、ナトルプや、ライやリンデや、シュプランガー等の學說を受け容れることに急にして、自己獨特の教育を編み出すことや創造することが出來なかつた。卽ち我が國民性に根ざした教育、我が皇道の精神に則る教育を打建てようとはしなかつた。かくの如くして、如何でか眞の日本國民を養成することが出來やうか、無論歐米教育の長を取り短を捨て、之を我が國の教育の參考に資するは素より必要であり結構であるが、我を捨てゝ彼に趨るといふことは全然避けねばならない。單なる歐米への模倣教育は我が國民を驅りて歐米化せしめ、我が國をして結局歐米の延長たらしめることゝなるのだ！今日まで我が國民の最大多數者が歐米崇拜熱に浮かされたり、洋行歸りを過重したり、舶來品を尊んだり、追隨外交に甘んじたりするの奴輩が續出したのは歐米直輸入教育の然らしめた所以である。

併しながら皇道の精神に目覺めた我々日本國民は、最早歐米人の臀馬に乘つたり、其の糟粕を嘗めたりして滿足す

べきではない。自分が彼等の有つ物質文明に比してより尊い、より優れた精神文化を有つてゐることに目覺めた以上教育も亦我が建國の精神に基づき新に建設し直さねばならぬことに氣付くのは蓋し當然の歸結である。我が國の教育者は先づ皇道の眞義を會得し陶冶的精神に滿ちた人格者でなければならぬ。教育者が眞に皇道の精神を明確に把握せる人格の持主であるならば、其の人格を通じて時々刻々陶冶活動の上に發揮されて行き、勢ひ被教育者の魂の中に皇道の精神が根强く植付けられることゝなるのである。

然るに現時に於ける我が國の教育者に果してどれ程皇道の精神に目覺め、それを具現してゐる人があらうか、日本精神を中心とする教育を施せとか、日本教育學を打ち建てよとか叫ぶ人があり、又數種の之に關する著述もあるが、未だ科學的に纏つた著述がないばかりか、大多數の教育者は殆ど學理的根據を有せず、指導原理を所有しないで徒に常套主義に其の日を繰り返して居り、歐米の受賣教育を施してゐるに過ぎないのである。かゝる態度は、教育者に意氣衝天の慨なく、努力精進の研究心が缺乏して居る爲でもあるが、第一皇道の精神に徹せないからである。苟くも皇道の精神を明かにし、之を中心として眞劍に努力したならば、自ら其の進路も開けて來、教育の大革新も大發展も之を期することが出來るに違ひない。

我が國の教育者は泰平に馴れて徒に惰眠を貪つて居る所はなかつたか？尤も昭和六年九月滿洲事變突發以來教育者も其の覺醒を促がされ、多少自己乃至自國の教育に關して凝視し反省し始めた所もあるが如何にせん未だ純乎たる我國の教育指導原理がない爲に其の歸着點を見出すことが出來ず、思ひ切つて歐米の模倣教育から新興日本の生きた皇

道教育へと復歸することが出來ないで中途半把な所に迂路ついて居る狀態ではないか。斯うした我が國教育者の迷ひを去つて確乎不動の信念を養ひ、以て眞に日本國民たるの資格を與ふる所の教育を施さしめんが爲には如何しても先づ皇道教育學を打建てねばならない。固より皇道教育學を樹立するに於ては我が國の實際教育者が袖手傍觀徒に學者の研究を待つて居るようでは駄目だ！苟くも我が皇國の教育者たる者は初等教育者たると大學教授たるとを論ぜず、皇道の精神を明かにし而も此の精神を中心として人格の陶冶を目指し一歩一歩其の人格を練成するには如何にせねばならぬかを考察し、日々の指導訓練を誤らぬやうにせねばならない。さうした自己の信念と研究とに基づいて一面に於ては規範的に他方に於ては經驗的に、所謂理論と實際とを包括する所の皇道眞義に則る具象卽普遍的の大教育學を創造する底の覺悟を有たねばならない。

五　皇道精神と教育者の人格

教育は國家發展の基礎であり、教育者は教育進展の原動力である。されば教育者の人格如何、努力如何は直接國家の起伏消長に至大の關係を有つと云ふことが出來る。故に我が國の教育者は皇道を自我の中心生命とする人格者でなければならぬ。從來人格は意識の統一とか、價値創造の主體とか云はれて居たが、何を以て意識を統一するか、如何なる價値を創造するかと云ふことが、先決問題であらねばならぬ。それに對して我々は言下に皇道に依つて意識を統

一し、皇道に則つて無限の價値を創造すると答へることが出來る。無論價値は之を目的價値と手段價値とに別けることが出來る。或は普遍的價値と特殊的價値とに別けたり、又價値主體と派生價値とに分けたり、更に細別することも出來るのであるが、之を總合統括すれば皇道といふ本質的價値の一に歸するのである。

人には必ず自己に君臨する何者かゞなければならぬ。動もすれば自由奔放、我儘勝手に流れんとする傾向を檢束し支配する或者がなければならぬ。人間生活には何かそこに則るべき規範がなければならぬ。オート・ツー・ビー乃至ゾルレンが人間の本質である。是が無ければ人間と他の動物、及び人間と自然物との本質的差異はない。此の規範乃至當爲を領有するが故に人間生活に特色があり、進歩があり、發展があるのだ！然らば何を以て自己を規定するか、何に則つて云爲行動するか、それは自我の內面に輝く天地の公道であり、我が皇道の精神であり、人間本質としての良心の聲であり、道德意識である。玆に天地の公道と云ひ、皇道の精神と云ひ、良心の聲と云ひ、道德意識といふのは決して別個の存在ではない卽ち天地の公道乃至皇道の精神は自我の中心生命なるが故に取りも直さずそれが良心であり、道德意識である。隨つて自我の本質と皇道の精神とは切るべからず斷つ可らざるの關係にあるばかりでなく、同一物に名づけた別名とも云ふべく、隨つて皇道の精神を離れて我なく、我を離れて皇道の精神なしといふことが出來る。我が國の教育者は少くともそこまで體達せねばならない。教育者自身皇道の權化となつて國民の敎養に專念せねばならない。

教育者の人格が教育の徹底と其の進展上に至大の關係を有つといふことは今更云ふまでもない。殊に皇道の精神に生きる大國民的人格者を養成せんとするに當つては自ら皇道精神の把握者であるばかりでなく、其の皇道的人格を陶冶活動上に遺憾なく披瀝し顯現せねばならない。常に皇道精神を以て自我を統制せる人格者は、日常生活の全體が皇道に一致するから自己の周圍に對して、目より耳より凡ゆる機會を通じて皇道精神を扶植するが故に其の感化影響たるや實に甚大なものがある。

「世の教育者たる須らく玆に思ひを致し、絕えず自ら省みつゝ皇道の精神に則り、身を以て範を示しつゝ指導薰陶の任を完うするやうにせねばならない。

六　皇道教育の目的

我々は純化された民族意識に立脚して生きた教育學を建設せねばならぬことゝなつた。苟くも玆に教育學を樹立せんと欲せば先づ其の目的を明かにせねばならない。然らば皇道教育の目的とする所は何か？それは云ふまでもなく皇道を中心とする人格を完成するにある。卽ち皇道人格の陶冶を以て教育の目的とするのである。

近來「教育は人にある」とか「教育は人格と人格との接觸である」とか、「教育者の人格改造が現下の急務である」とか、「被教育者の人格を尊重せよ」とか云つて、教育上に於ける人格問題が喧しく論ぜられるやうになつたが、其の人格は如何なる人格であるかを究明せない限り、教育の目的とはなり得ない。單に偉大な人格とか、高尙優雅な人格

とか云つたところで空漠として捕捉することが出來ない。隨つて日本國民の有つ人格はどうしても皇道精神を中心生命とし、それに依つて日常の生活を統制し、國家の進展を圖り、人類文化に貢獻する所の人格でなければならぬ。

皇道を本位として自我生活の一切を統制し指導し創造するの人格卽ち皇道に生き皇道に終始し皇道の權化となり皇道を全生活の規範として誤ることなき人格の陶冶！是れこそ我が國教育の目的であらねばならない。唯單に各自の有つ天分を發揮せしめるとか、人間諸性能の調和的發達を圖るとか知情意の圓滿な發達を遂げしめるとか道德的品性を陶冶するとか云ふことを教育の目的としたところで、或は偏狹に失したり、空漠に流れたり或は抽象に陷つたりして具象普汎的な教育の目的たり得ない。更に人格的教育學や、文化教育學等に於て人格の內容若しくば文化の意識なるものを究明して目的を打建て、方法上の論理を決定する所には吾人も亦賛意を惜む者ではないが、併し乍ら民族意識とか歷史的背景とかを拔きにし共通普遍の人間を教育の對象としてゐるから矢張り抽象的教育の譏りを免れない。無論そこには教育上の眞理を道破した點も出すことが出來、從來に於ける諸種の學說を打つて一丸とした所もあるが、さりとて日本の教育にも其の儘之を適用すべきであるとの理由にはならない。日本人には日本人獨特の生命があり、本質があるから、それを本として諸種の思想なり學說なりを取捨選擇すべきである。それでこそ抽象的な學說が生きて來るのだ！日本精神の中に熔かし込んで始めてリンデの人格的教育說も、シュプランガアの文化教育說も生命あるものとなるのだ！

今日まで我が國の教育者は教育そのものを眞面目に凝視することを忘り、教育の目的も方法も自ら編み出すことなく、唯模倣の一筋道を辿つて來たのであつた。我の目的、我の理想並に之を達成するの原理は我自身の先驗的所有でなければならぬ。目的や理想及び方法上の原理まで他から借りたものであれば、どこに我の存在理由があるか。

目的が確立したならば之を達成するの方法は幾らでも自らの魂を働かせて無限に創造することが出來るではないか。我の獨立といふのは自ら目的を定め自ら之を貫徹する所に在る。自ら目的を樹立することもなく、又之を貫徹するの意志なき者は獨立的存在といふことは出來ない。我々は從來の模倣教育・拜外教育を投げ捨て、皇道本位の人格陶冶を目的とする教育を樹立し、之を實現することに依り、內、國運の發展を圖り、外、人類の福祉と世界文化の進展の爲に貢獻するところがなければならない。

七　皇道教育の方法

（一）

皇道教育のの方法！それには全然教育者の態度から改めてかゝらねばならない。嚴肅！熱誠！眞摯！努力！創造！至誠！獻身的態度！是れである。皇道教育法は教育者自身に於て之を創造せねばならない。苟くも皇道教育の目的が何でかあるといふことを的確に把握することを得て、はじめてそれに到達するの手段が構ぜられるのである。目的達成理想實現の具體案は教育者自身の腦裡に秘められてある。それを機に臨み、變に應じて引き出せばよいのだ！教育

者自身に表現法の創造力がある。その創造力を働かせることによつて、實行方法は無限に湧いて出る。

現代日本の教育者の大多數は未だにそこに目覺めることなく、徒に歐米に於ける教育法の輸入と適用とのみに沒頭しプロジエクト法とか、ドルトンプランとか、ウインネツカシステムとか、ゲーリーシステムとかプラトウン、プランとか擔ぎ回して彼是論じてゐるが、現代日本の子弟を如何に取扱ふとか、どういふ方針の下に如何に導くかと云つたやうな自己の信念から遊る生きた教育法を想定して之に依據しようとはせず、全然、外來の借り物を以て間に合せようとしてゐるのである。尤もそれが研究心の乏しいそして無氣力な日本の教育者に取つて選ばれた氣樂な方法であらう。此の方法に依ると自ら工夫することも創造することもなく、全く生みの苦しみを實感しないで、唯模倣にのみ終始するのであるから、安樂は卽ち安樂であらうが、そこには冷え凍つて固くなつた教育の化石があるのみで、生きた教育の何物をも認めることが出來ず、又自ら生きた教育者たることも出來ないのである。日本の教育者にして眞に自我そのものを凝視し、自己が日本の教育を背負つて立つてゐるものであり、日本を起す者は我であると云ふことに目覺めたならば、如何でか教育上の根本的な目的から、方法上の末節に至るまで彼等に盲從するの愚を演じよう？宜しく、心氣一轉歐米の精粕を嘗めるの愚を止めて、目的と云はず、方法と云はず、日本教育の全機構に亘る新建設新創造に向つて眞劍に奮鬪努力するところがなければならぬ。

（二）

教育活動はその方途として教授と訓練による。教授とは被教育者をして理論の方面より入つて教育の目的を達成せ

しめんとするの方法である、知識技能の教養を主とし、其の收得をして容易迅速且つ有効ならしめんとするのものである。訓練とは實行の方面より入つて教育の目的を達成せしめんとするの方法であつて、主として情意の陶冶を云ふのである。是等の方法も教育者に於て相當攻究を要し、實地的修練を積むことは必要であるが、唯方法の末に趨りて根幹を忘れ、被教育者の全人格の陶冶を忽緒に附するが如きことあらば、折角の方法も却つて人の子を害ふことゝなるから、教育の本質から割り出した適切有効な教育法に依據せねばならない。眞に教育の本質がどんなものであるかを會得したならば、之が達成の手段は臨機應變無限に創造せられるものである。彼の練成された教育者の精神力乃至修養を積んだ教育者の人格力はその言語の中にも動作の上にも時々刻々表現されるものである。態度嚴正にして熱誠溢れた教育者の獻身的努力は、被教育者をして自ら襟を正さしめ且つ感奮興起せしめずには置かない。換言すれば鬼神をも感動せしめる底の教育者の至誠——情熱の火花——は被教育者の頭腦に乘り移つて其の向學心を呼び覺し、全人格に向つて感化影響を及ぼすと共に、彼等の內心奧底にある創造力を活現せしめ、彼等自身の力を以てどこ〳〵までも進んで止まぬ人たらしめることが出來るのである。

彼の教授法は須らく拙なるべしとか、無技巧の技巧とか云ふのは、熱誠込めた教育者の態度なり言行なりが別に方法の末節に拘泥せずともより以上の効果を收め得ることを言ひ現はしたものに外ならない。何事も眞劍にやつて見ると共の間に新な方法が生れて來る。無論眞面目を缺いだ仕事には何等創造の之に伴ふことがないばかりでなく、そこには興味も沸かず、倦怠を生じて遂に失敗に歸するのであるが、一心不亂に精神力を集中してやる間には新な自己が

發見され、「我は一種の天才なり」との感を深からしめ、愈々努力の効を積みその天分を發揮するに至るのである。そこにはペスタロッチ以上、ヘルバルト、ヴイルマン、モイマン、シュプランガー以上の自己を發見することが出來前人未發の新教育法を案出想定することが出來るのである。それに係らず徒に歐米教育家の跡をのみ追ひ、其の糟粕のみを嘗めて自我の研究と信念とに基づく生きた新學習指導法なり、新訓練法なりを編み出すことが出來ないのは實に慨嘆の至りである。

（三）

皇道教育の方法はヘルバルトトの五段教授法やヴイルマンの三段法に依るのではない。僅に五十分の教授時を間分割して初めが豫備の段で次が提示の段だと云つた風に行つて出來るものではない。凡ゆる教育法は皇道の精神を中心とする生きた教育者の人格から臨機應變當意卽妙的に無限に創造されるのである。

無限の創造！それは我々の念願で尊い生き方である。我々の生命は無限に創造することを以て其の本質とする。然るに、我々はどうして何時までも人眞似をし模倣生活にのみ甘んじてゐたのだらう。歐米の輸入教育にのみ憂き身を窶してゐたのだらう。今こそ我々は我と我が身に振り返ることに依つて其の無限の自己創造といふことに目覺めねばならぬことゝなつて來た。殊に教育は一種の創造である、目的は既に定まつてゐるから、日々の創造は所謂表現法の創造である。「私はどうしたらよいでせうか」此の種の質問が何等の自覺も經驗もない未成熟の子供であるなら、之を教へ導いてやるのが適當であり、其の執るべき方法までも指示してやるもよからう。併し此の場合に於てさへ開發法や產婆法で被教育者の心性を引出してやる方法を構ずることも亦必要である。一から十まで教へ込むとか、或は「如何に爲すべき乎」を一々指示するのは親切に似て實は不親切である。何故ならそれは兒童の自己發展、自己創造の芽生えを摘み取つてしまふことゝなり、其の依賴心を增長せしめることゝなるからである。

從來我が國の教育は依賴心を極度に增長せしめるの教育であつた。何事も嚙んで含めるやうに說明して聞かせ、目的から方法まで一々教へてやるから、生徒の方では殆ど考へることも工夫努力することも入らず、唯先生の教を後生大事に記憶さへして置けば良成績で及第も卒業も出來たのであつた。それで折角學校を卒業して世の中に出ても豫て思考力も工夫力も創造力も統制力も自ら生きんとする鞏固な意志も養はれて居ないから、人に便つて生きる外、自ら生きるの道を知らない者となつて了つた。

自ら生きるの力を養はれて居ない人間は實に哀れなものだ！何か新しい問題でも起つて來ると一々有識者や先輩に尋ねて見ねば分らぬし、人が或る提案をしても根ほり葉ほり說明を求めぬと理解が出來ぬし、どこまでも他の追隨者とならねば生きて行かれぬやうに出來てゐるのだから仕方がないではないか、それは恰も寄生蟲や寄生木のやうなものだから獨自の領域に向つて生命の發展創造につとめるところがないからある。

此の依賴心を除くには、子供の時から自分の事はすべて自分でやるやうに仕向け、彼等自身の根本動力を養つて置くことである。彼等をして其の本心に目覺めさせ、其の魂を錬ることである。然らば其の魂！本心！根本動力とは果して何か？それは日本魂であり日本精神であり、惟神道であり、皇道の觀念である。これこそ我が皇國民の則るべき

規範であり、指導原理である。此の規範意識乃至指導原理に從つて云爲行動する時、依賴心は何時の間にか姿を隱して、嚴肅な自己の姿を認め、そこに國民としての眞實な自我を自由に表現することが出來る。それ故知情意の圓滿に融合調和した日本魂乃至皇道精神といふ、我が皇國民として力强く生き得る所の根本動力を養つて置けば一々零細な事項に至るまで指示しないでも、彼等自身表現法を工夫し創造することが出來るのである。

以上の如く教育者自身に於て先づ皇道の精神に目覺め之を原據として教育の方法を講じ被教育者をして眞に日本人として自ら生きるの根本動力を養ふことは必要缺く可らざることであり、是れが爲めには從來の教育に對して根本的な改造を必要とする。從來の教育法は教授法でも訓練法でも具象的な目標がなかつた。教授法は知識を授くるの方法で訓練法は情意を練るの方法であるとせられてゐるがさてどんな知識を研くのか、又どういふ情意を練るのかハッキリした目標がなかつた。唯知識を豐富ならしめるとか、生きた知識を與へるとか、或は自發的に知識を獲得せしめるとか云つた所で知識そのものが何に依つて支配され統一さるべきかを究めない限り、如何に種々雜多な知識を山程收得しても又假令それが諸種の分科々學として組織立てられたものとしても知識そのものが却つて自己を誤ることゝもなるのである。今日は知識が進んだといふことだけは事實であるが果して人格が高尙になつたとか、道德が進んで來たとか云ふことが出來るか、寧ろ知識を惡用して惡事を働く人間がより多くなつてゐるではないか。否知識の多い者程巧妙な手段で所謂法律の網の目を潛りつゝ不善を働く者が比較的多くなつたと言ひ得るのは事實である。知識の多い人は罪作りをしても言を左右に託じて言ひ逃れをする。口先の技巧を以て世人を瞞着して行く。そんな風に現代人

の智慧は何處までも惡用されて行つて底止する所を知らぬ狀態である。是れ知識についての道義的統一が缺けてゐるからだ！自己の知識が道義的に統一されて居らねば知識が自己を災ひすることゝなり社會國家を誤ることゝもなる、故に我々は自己の領有する知識を皇道精神に依つて統制せねばならない。自己の持つ知識は皇道中心の知識でなければならない。學習の指導に於ても皇道の精神に依據して施されねばならない。統制なき知識は危險性を帶び災ひの種を蒔くことがあるから、自我の本質即ち皇道の眞義に依つて統制するやう常に意を用ひ之が指導の任に當らねばならぬ。

次に情意を練る場合に於ても同樣唯麗はしい感情の持主を作るとか、意志の鞏固な人を養ふといつただけでは、根本に觸れてゐない。單に麗はしい感情とか强固な意志とか、言つてもどんな意味で麗はしいのか、又どんな方面に對しての强固な意志なのかそれが決定しない限りその人が人格的に優れてゐるかどうか解らない。そこで情意の陶冶に於ても亦皇道の精神に依つて導かれねばならない。即ち其の感情たるや皇道の精神に一致するの言行に對しては愉悅を感じ、之に相反する所の云爲行動に對しては不快を感ずる所の感情であらねばならぬし、其の意志たるや皇道の精神を發揮する所の鞏固な意志でなければならぬ。

（四）

皇道教育の方法とは如何にして皇道を中心に一全體としての人格を練磨教養すべきかを考究し決定するにある。皇道中心の人格！それは忠君愛國の至情に滿ちた國民的人格であり、皇國民たる所以の資格である。此の皇國民たるの

資格を得せしめる爲に運らす諸種の手段が、皇道教育の方法となるのである。皇道教育の方法は一にして足らずと雖も其の第一に來るものは皇道精神の陶冶である。

皇道精神とは我が國民の領有すべき根本觀念であり信仰精神である。信仰精神を養ふことは個々の知識の働きや、別々の感情意志の力で出來るものではない。少くともそれは全我的活動でなければならぬ。苟くも教育者にして皇道精神の陶冶を圖らんと欲せば、思ひを凝らし、情を込め、全我を働かせ自ら皇道の權化となり、信仰に燃え、教へ子の頭腦に乘り移り、魂のドン底に喰ひ込んで彼等を其の根底から築き上げるやうにせねばならない。全身全我を込めての教育！魂と魂と抱合するの教育！至誠献身の信仰教育！進んで止まぬ生命の教育は、區々たる知識の切賣りや、講義の遣りつ放しで出來るものではない。教育を一種の商賣視するの人間、只管增俸と昇進とを圖る教育者の良くする所ではない。そこには至純至美なる奉仕的犧牲的精神に燃ゆる眞劍な教育者を要する——

皇道教育は其の眞劍な人間！死を見ること歸するが如き人間！斃れて後止むの覺悟を有する人間！死線を超ゆるの人間！皇道を世界に布くの人間！大義を宇内に顯揚するの人間を作る教育であるから、眼前の小利に目の眩むるやうな肉感情慾の奴隷となるやうな、權勢慾や、名譽慾に驅られるやうな、偏に立身出世のみを夢みるやうな、隣人を蹂み躙つて自己一身の榮達をのみ希ふやうな、醜い現代人を根本的に造り換へようとするのである。今日まで誤つた教育を受けた現代人に向つて一齊に「廻れ右」を行ひ、一旦その出發點まで後戻りをさせて新に出直させるのが皇道の教育である。而して皇道教育の對象とする所は啻に學生や生徒や兒童や幼兒のみならず、上は貴族や大臣や特權階級や政黨や財閥から、大衆に至るまで一人も餘さぬのである、苟くも我が帝國臣民たる以上貴賤貧富、老幼男女の別なく一齊に皇道本位の教育を徹底的普遍的に施さうとするのが皇道教育の本旨である。既に皇道教育の對象が國民全體であり、皇道精神の陶冶が信仰に基づく全我的陶冶である以上、單なる學校教育や、教授訓練の方法のみで間に合ふものではない、家庭教育、學校教育、社會教育の全教育を通じ、更に各人各個に於ける皇道中心の自己教育、自己訓練乃至自己表現に依つてのみ皇道教育の普及徹底が期せられるのである。

併し乍ら強ち皇道精神の陶冶を教授訓練の二つに大別して行ふことが出來ぬと云ふ譯でも無い。要は教育者自身の魂であり、精神力である。教育者の人格が確立して居り、其の熱誠と其の鞏固な意力とに依り、飽くまで皇道精神を教育上に徹底せしめねば止まぬといふ意氣込みで掛つたならば決して不可能ではない。

（五）

皇道精神の陶冶は之を皇道の知的陶冶と、其の情意訓練とに別つことが出來る。皇道の知的陶冶とは神話神勅を會得するとか、神武天皇以下御歷代の詔勅を講究するとか、惟神道乃至建國の精神を了得するとか、我が國體觀念及び國民精神を明かにするとか、國民性並に國民道德に通曉するとか、廣く天地の公道や人類意識の本質を把握することなどに依つて皇道の眞義を了得せしめることであり、又之に依つて爾餘一切の知識を統制せしめることである。

皇道の情意訓練とは、國家皇室に對する國民の至情及び君國に對して忠節を盡さんとする鞏固な意志を養ひ、以て皇威の宣揚に努め更に進んで全人類の平和と福祉とに貢献することに依り、我が皇道の精神を飽く迄世界的に發揮せ

しめようとするものである。

然るに皇道精神の陶冶を皇道知識の陶冶と皇道情意の訓練とに區別し而も別々に其の陶冶法を講じて行くと其の範圍が限定され、隨つてそれは我が國のみに當嵌まるだけで他には適用することが出來ぬものゝやうに考へる人があるかも知れないが、決してそんなものではない。皇道の精神は前にも論じたやうに世界的であり大宇宙を抱擁するものである。無論それは天意に契合し神意に隨順するものであり、君民一體の共同生活の所產であり、我が國民の中心生命である、我が皇國民の則るべき未來永劫に亙る規範であるばかりでなく古今を貫き東西を一丸とするもので、所謂人類共通普遍の妥當性を有する天地の公道であり人倫の大道である。隨つて天下何人と雖も遵ひ守るべき人類全體の指導原理である。斯うした宏大無邊な精神を熔鑄陶冶しようとするのであるから從來に於けるが如き學科課程表に依り或る一教科目內に其の精神を織り込まうとか、或は之に關聯する各教科の教授中に此の精神を加味せしめようと云つたやうな生溫いことでは決して間に合ふものではない。又新に一科目を增設して見た所で、決して徹底的な皇道精神が養はれるものでもない此の皇道の大精神を發現せしめんとするの大任を學校に於ける教科目中、其の一科目若しくば數科目に背負はせようとするのは無理な註文である。然らばどうして皇道精神の陶冶を行ふべきであるか。それには先づ教育者自身に於て造次顚沛の間と雖も皇道の精神を離れず之に依つて常に我が精神を打固め、家庭に於ても教壇上に於ても凡ゆる時と所とを通じて皇道精神の發揮に努めることである。かくしてこそ言行は一致し、身を以て範を示すことが出來、皇道卽我、我卽皇道の境地に立つて學習の指導に將た情意の訓練に當ることが出來る。此の精

神を會得せしめ、之に依つて其の全人格を陶冶せしめんが爲には固より一、二學科の到底如何ともすることが出來ないのであるから、凡ゆる學科を通じて此の大精神を練磨するやうにせねばならない。

是に對して世上或は異議を挿む者があるかも知れない。それは倫理や、歷史や公民や國漢や教育や哲學等の精神的方面の學科であるならば皇道の精神と關係を有つとか有たせるとか云ふことも出來やうけれども、自然科學は之をどうするか、即ち物理や化學や博物學等皇道の精神と直接關係を有たない學科の教授をどうするか、是等の自然科學を以てどうして皇道の精神に働きかけることが出來るか、又皇道の精神に依つて自然科學を如何にして導くことが出來るかと抗議を申込む人があるかも知れない。自然科學は自然科學として一定の領域を有するものであるから、皇道の精神は何等之に對して拘束を加へないばかりでなく、皇道精神それ自身が眞理の探究者であり、其の把持者である。卽ち皇道の精神は一切の眞理を包括し統制するものである。けれども自然科學者が唯物主義に陷るとか、精神科學特に規範科學に向つて挑戰するとか云ふやうな偏狹な立場に立つ時は之に對して反省を促すとか其の蒙を啓くとか云ふやうな態度に出る。卽ち皇道の精神は總合的普遍的大眞理に向つて飽くまで眞劍な態度でかゝつて行くのである。今日の自然科學は自然科學それ自身としては餘程進んで來た所があるけれども、それが精神科學と如何に交涉關聯するか、或は科學と宗教とは如何に相契合するか或は凡ゆる文化の基礎は何であるか、或は人間は如何にあらねばならぬかと云つたやうな根本問題に觸れて居らず、更に又各種の學問を融合調和して一人格に納めるとか、或は凡ゆる學問を打つて一丸とし之を以て一大人格を構成するとか、或は一全體としての大精神大生命を把握するといふやうな所

まで進んでゐない。即ち各種の科學は、科學といふ狹い殼の中に閉ぢ籠つて各々相對立して居り、その間の聯關統一が出來てゐない。斯くては科學が人間の眞生命を促進する所以とはならないのである。

然るに皇道の精神は規範科學と云はず、說明科學と云はず一切の學問を先驗的に統括し、歸一してそこに總合的大眞理を包藏するのである。それ故凡ゆる學問の發展は普遍妥當性を有する皇道精神の內省に由る自己發見に外ならない。そこに人間の眞生命が無限に創造されて行く理由が嚴存するのだ！斯の如く皇道の精神は一切の科學哲學を包藏するのみならず、政治道德藝術宗敎等の凡ゆる文化をも抱擁し、而も人間の行く手を照し、眞善美聖の理想鄕乃至人間最高の價値世界へと導いて行く。隨つて從來に於けるが如き敎授法や訓練法のみに依つて取扱はるべきものではない。それは唯至誠に燃ゆる偉大な人格に依る眞劍な人格陶冶に依つてのみ其の可能性が見出されるのである。

（六）

次に皇道精神に基づく學校の設備は之をどうするか、校舍を洋式にするといふことも考へものであるが、建物の如き物的形式は止むを得ないとしても其の內容をどうするか、御眞影を奉戴安置して四大祝日を始めとし、每朝禮拜せしめるの法は現人神にまします天皇陛下を尊崇せしめる上から云つても、敬神崇祖の念を養ふ上から云つても、極めて重要であり且つ意義あることであるが、それは高等專門學校以上大學に至るまで善く行はれてゐるかどうか？凡そ敎育は斯くあらねばならぬといふ規範の上に立つてゐるのであるから、之を行ふに於ては飽くまで徹底的でなければならない。現今各種大學に於て國家の四大祝日に儀式を行つてゐる學校は果して幾干あるか、國家の祝典も行はずして總長たり學長たり學生たるの本分を盡しつゝありと云はれるか、是で高等敎育並に大學敎育の趣旨が立つであらうか、敎育程度の高き程國家の恩惠により多く浴してゐるのであるから、國冢の吉凶共に自我人格と直接交涉することゝなり國家と自我とは相離るべきものでないと云ふことを意識する筈であるが、邪道に陷つてゐる今日の敎育を受けた學生は却つて盲目になつたのか自我と國家との關係さへ忘れ果てゝ了つてゐる。而もその點に於ては學校當路者も亦同樣ではないか。苟くも國恩に浴して敎育を受けつゝある學生、及び國恩に依り一定の俸給を受けつゝある學校當路者は少くも國家の四大節に於て必ず式を行ひ、式に參列して共に與に心の底から國家の隆昌を祝福せねばならないのであるが、どうして儀式を行はないのか、斯くては却つて高等敎育並に大學敎育が皇道の精神を裏切り、國家皇室を災ひするやうなことゝなりはしないか。故に初等學校から大學に至るまで、御眞影奉戴の趣旨を徹底せしめるため文部當局並に學校當路者に於て、より積極的な方法を構ぜねばならない。

次に學校備付の圖書は之をどういふ風にするか、皇室國家に關するものは之を第一位に置き全職員は云ふに及ばず全生徒に之を閱讀せしめねばならない。特に敎科書並に參考書中修身・公民・國語・歷史等及び之に關聯するものは、無論皇道を中心として編纂せらるべきものである。日本の敎育學・敎授法並に訓練法の如きは皇道敎育の目的及び其の實現方法を指示すべきであり、我が國の歷史や倫理學史及び敎育史の如きは悉く皇道精神の發達並びに其の發揚とを中心として編述すべきである。今日はどうも敎育者の中心がグラ附いてゐて、政黨敎育家、受賣敎育家、赤化敎育家及び粘液質的敎育者等——玆に粘液質的敎育者とは右と左とも、湯とも粥とも分ちぬ日和見敎育者で、書物も讀ま

ず、思索もせず、工夫創造等は思ひも寄らず、研究努力となると跣足で逃出すといつたやうな、其の癖、酒を飲むことゝ女をからかふことゝは忘れず、殆ど慣習の奴隷となつて機械のやうに教壇に立つ所の教育者を云ふのである。――を出すが如きは、從來に於ける師範教育の不徹底や教員檢定試驗の不備や、社會思想の影響等もあるであらうが、教科書並に參考書等に統制がなく皇道の精神に徹してゐないからである。

そこで學校附設の圖書館及圖書室――一般圖書館も同樣――に於ては國家皇室に關する圖書、歷史的人物傳、國民道德、民族文化並びに公民に關する圖書を中心として備付け、皇道精神、國體觀念を中心に各自の全人格を熔鑄陶冶することに資せねばならない。

（七）

國民道德に關する知識及び政治的・經濟的・社會的識見の練磨教養は今日特に其の必要を痛感する。然るに修身科教授時間數は小學校に於て一週二時間、中等學校以上に於ては概ね一時間となつてゐるが、それでは餘りに僅少に失する嫌ひはないか――尤も中等學校では高學年に公民科を置いて之を一週二時間づゝ授けることゝなつてゐるが――人間として此の世に生を完うする爲にはどうしても人倫道德に依らねばならない。凡ゆる思想感情を統制し生活を指導するものは人倫道德である。それに校長なり修身科受持の教員なりが一週一、二時間位では諸學科の統一がつかず自我の全生命を支配する最重要な學科の教授時數としては餘りに僅少で又餘りに不親切ではないかと思ふ。或は今までの習慣上中等學校以上に於て修身教授時間を毎週二時間以上とすることには反對する人があるかも知れないが生徒の道德意識を練成する上に於てはどうしても時間數を增し修身科擔任教師を選定して其の實績を擧げるやうにせねばならない。而して其の內一時間は生徒より教師への道德に關する質問時間にするとか、或は教師より生徒への發問若しくば生徒自身の反省時間とするもよい。彼等はどうも倫理的考察乃至批評眼がなく隨つて自己の執るべき態度等に疑惑を生ずること等が尠くない。彼等の良心並に道德意識を呼び覺す爲には、どうしてももつと道德問題社會問題等を討究し、練磨するの機會を多くする必要がある。彼等の多くは緊張氣分を失ひ眞劍味を缺いてゐる。友達が訪ねて來ても下らぬ馬鹿話に時を移すことが多く、眞面目な道德問題等を考へようとはしない。新聞を見るにしても論說等には面を背け新奇な記事や社會の淪落狀態の記事に興味を持つ、書物を購ふにしても嚴肅なものを捨てゝ自己の肉感をそゝるやうなものゝ選擇する。さうした墮落傾向を打破する爲には、どうしても人倫道德を耳にし口にし考察し批判し實行するの機會を、より多くするやうにせねばならぬ。今日は家庭教育に於ても學校教育に於ても將た社會教育に於ても其の點に缺くる所があり、社會的一般的の狀勢に順應せんとし、客觀的方面にのみ關心して自己の信念、自己の規範に生きようとはしない。だから其の規範意識乃至道德意識を高めるため皇道教育に徹せよと叫ぶのである。それには學校に於ける教科目中其の最高位を占めてゐる修身科の教授時間及び道德的思索考究の時間を多くするのみならず、其の大任を果す所の教育者を選定すべしと云ふのである。

更に政治的經濟的並に社會的識見を練磨教養し以て立憲自治の國民たらしめるには之をどうすればよいか？中等學校の高學年に於ては公民科を置いて此の方面を擔當せしめて居るのであるが、初等教育や高等教育には之をどうする

か、又眞に立憲目治の民たらしめんが爲には唯公民科といふ一科目を置いて之に關する知識を與へただけで足るものでない。其の知識を基として實地的訓練を行ふ必要がある。それには學校を一の社會、國家乃至全世界の縮圖とし、教育者指導の下に自治團體的實踐の場所たらしめ、以て法治的にも、經濟的にも、道德的にも、學究的にも、思想的にも、國防的にも、國際的にも、生きた試練を行ひ、之を統制するに我が皇道の精神を以てし、常に其の全人格の陶冶に力を致さねばならない。

（八）

皇道精神の陶冶は學校教育のみに依つて完成されるものではない。家庭教育に於ても社會教育に於ても、之を中心として指導薫陶するでなければその完全を期することは出來ない。折角學校に於て苦心努力しつゝ皇道本位の教育を施しても、若し家庭や社會に於て之を破壞するの傾向がありとすれば其の効果を減殺するばかりでなく、皇道精神の裏切者さへも現出せしめることゝなる。それ故父兄と云はず、神官僧侶と云はず官公吏といはず、苟くも指導者の位置に立つ者は皇道精神に依據して云爲行動し、常に子弟や一般社會の人々に對して範を垂るゝ所がなければならぬ。上層階級の人々や指導者の任にある人の責任は極めて重い。それは上の爲す所下之より甚だしきものありで國家社會の樞要な地位にある人々の道德的薄弱や私行等が極端に社會の人々を驅りて腐敗墮落のドン底に擠すことゝなるからである。

皇道の精神そのものゝ陶冶は先づ國民自身をして自我に目覺めさせることである。自我の純眞な魂をみつめて其の姿をありのまゝに描寫せしめることである。純な魂の持主としての子供と慾得の渦中！罪汚れに滿ちた濁流の中に投ずるといふことは、父兄としても教育者としても實に耐え切れないことである。出來ることなら天眞自然の純な魂を曲めることなく汚すことなく、すく〳〵と生ひ立たせたい、神のみ姿そのまゝに表現せしめたいと云ふのが其の止むに止まれぬ至情であらねばならぬ。而して其の濁りに染まぬ純粹な魂そのものが我が大和民族固有の魂であり、皇道精神の芽生えである。我が日本民族の中心生命として享有する「まこと」「まごゝろ」は取りも直さず惟神道若しくは皇道精神の眞髓であると同時に宇宙の本體であり、人類意識の本質である。それは天理そのもの神意それ自體を簡潔率直に云ひ現はした語であり、眞人生活の原義であつて、それ以上分析することの出來ぬものである。それは實に日本民族更生の第一歩であり、其の道程であり歸着點であるばかりでなく、全人類覺醒の根本道念であり其の則るべき大道であらねばならぬ。

現代人の最大缺陷は生活原理並に指導精神を把握して居らぬことである。それは現代人自身の罪でもあらうが、そこには又教育そのものゝ缺陷があり、指導者そのものゝ責任を問ふべき餘地がある。唯あることをあるとする自然科學的方法に準據する教育が尊い人間を作らんとするの資格を缺如することは云ふまでもなく、單に世渡り術と出世の道のみを教へんとする名利中心の現實教育も亦人間を墮落せしめるのみで、眞の人間陶冶にならないことは今更論ずるまでもない。眞の教育は何處までも「あるべき」の教育であり、規範的陶冶でなければならない。人間は須らく斯く〳〵あらねばならぬといふ理想信念があり、それが强く働いて始めて眞の向上があり進歩がある。此の斯くあらね

ばならぬと云ふ意識は先驗我の働きである。先驗我が經驗我を導き理想我が現實我を導いて統一的な生活が出來、絶えざる人生の苦闘を續けつゝも向上の一路を辿ることが出來るのである。

皇道教育は斯うした先驗意識即理想我を養はんが爲に行ふものである。人類に共通普遍的な規範意識を養つて自己乃至世界をリードせしめんとするものである。で、これは學問以上の學問である。學問の支配者、眞理の把持者を作るのである。此の大精神を養ふことは單に學校に於ける受實教育の良くする所ではない。それは人間一生を通じての人間それ自體の大工作であり、普遍的大事業である。此の大事業に參加し得る人は全我活動をなし得る人であり、慾得の境涯から自由になり得る人であり、純眞純美の人間性の發揮者である。で、利慾情慾を克服することの出來ぬ薄志弱行の徒は其の埒外に放逐さるべき者である。だが、皇道の精神は極めて寛大な抱擁性を有するものであるから、總ての人間を正しく生かさうとすることに關しては凡ゆる苦心と努力とを惜まぬのである。それはクリストの愛や、釋尊の慈悲や、孔子の仁の如く、又それを多くの人々が解する如く、救ふ者と救はれる者とを別なものとして對立せしめるとか、愛する者と愛せられる者とを相對せしめると云ふやうなことがなく、又助けられた人は必ず感謝の念を捧げねばならぬとか、助けた人は天の賜與若しくば神の恩惠に浴するとかいふやうな因果應報を說くのでなく、人を人としてその人自身の力に依つて眞實に生かすこと、換言すれば此の世に現存する一切の人類をして人格的に取扱ひ決して他の手段たらしめることなく、各々その處を得せしめ生の本義を完うせしめることを以て其の目標とする。斯うした意味の「まことの道」は人類最高の道德であり、最深の哲學であり、最大の藝術であり、更に最奥の宗敎であらねばならない。此の人類最高最大の理想信念を養ひ、且つ之を普及徹底せしめんとするのであるから、天下の大事業ではあるがそれだけに中々骨の折れる仕事であることは云ふまでもない。

人間そのものゝ大工作は凡ゆる事業中の最大事業であるが、而もそれは人間のすべてに普ねく課せられた大事業なのである。それは必ずしも他から指導薫陶を受けるといふことでなく、自らが自らを熔鑄陶冶することをも含んでゐる。否後者が却つて眞の陶冶であると云ふことを忘れてはならない。

併しながら自己が自己を陶冶するといふことの上にも何物かに則るところがなければならぬ。自己に內在する神といひ、規範意識と云つても一の抽象論に陷り易い。それはどんな神かどんな規範意識か、より具象的なものでなければならぬ。そこで我々は天地の公道に基く我が皇道の精神——それは神勅及び歷代天皇の詔勅中に表はされてあるところの具象普遍の大眞理——に則つて云爲行動し、之に依つて自己そのものを練磨敎養せねばならないことゝなるのである。

皇道は天皇の大道であり、同時に臣民の恪遵すべき公道である。更に之を押し擴めると全人類の由るべき規範となるのである。皇道教育は此の大道を知らしめ、且つ之に依らしめやうとするのであるから、それは一種の悟りの境涯にまで進ませることであり、全體的得道の境地にまで導かねばならないのである。隨つてそれは唯區々たる敎授法や訓練術の良くする所でなく、普遍的並に全體的意義を有する皇道中心の信仰敎育に依つてのみ可能となるのである。皇道本位の信仰教育！是を中心として我が國現代教育者の總てが立ち上る時、更に又爲政者や宗教家等指導者の位置

にある人々の全部が蹶起する時、眞に日本人としての教育が徹底的に行はれることゝなるのである。然るに今日は未だ指導者が振はない。指導者にして何等の指導精神乃至陶冶信念を持ち合せてゐないから一致團結して起ち上ることもないのだ！　苟くも皇國の前途を思ひ皇國民の現狀を知悉し、皇道精神の如何なるものであるかに目覺めたならば世の教育者たり將た指導者の地位にある者にして、どうして默視することが出來ようか。必ず奮然手に唾して起ち上るに違ひないのだ！

要するに、眞實に日本人たるの資格を附與する教育は、今日の學校教育に於けるが如く各種の學科を併立せしめることなく、皇道に依つて凡ゆる學科の統一を圖らねばならない。――今日學科の聯絡に就いては編纂者に於ても留意するところであり、又實地教育上に於ても注意を拂つてゐるのであるが、其の統一に至つては主張する人すら無い。それも牽强附會な統一であるならば吾人も亦賛意を表することが出來ぬけれども、皇道の精神に依る統一は不合理でないばかりでなく、人生の哲理に一致し、宇宙の大眞理に契合するのである――卽ち皇道を中心として新に學科系統なるものを作製し、之を一全體として一人格中に些の矛盾なく織り込むやうにせねばならない。然らざれば學科同士が各人の頭腦の中で甲論乙駁恰も群雄割據の狀態となり、今日は生物學上の眞理で云爲しようとか、今度は物理の法則で行動しようとか、更にこの次は快樂說で慰まうとか云つたやうに人間としての統一のない生活を送ることゝもなり或は極端な思想學說に捕はれて自己の一生を誤ることゝもなるのであるから、我が日本民族としてどこまでも突き進むことの出來る皇道の眞義に則つてその全人格を練磨教養することに心掛けねばならない。

（九）

皇道教育は云ふまでもなく皇道を中心とする人格陶冶である。隨つて皇道教育の徹底を期せんと欲せば終始一貫皇道の精神に則つて云爲行動する人格者を養成することに全力を注がねばならぬ。それ故教育者自身に於て常に自我の全人格を皇道に依つて鍛へ上げることに努め、自ら皇道意識の權化となり、皇道教育の普及と其の徹底の爲には身を犧牲に供するの覺悟がなければならない。

從來に於ける我が國の學校教育に於ては教授即ち知識の傳達にのみ重きを置いて情意の陶冶に缺ぐるところがあつた。近時人格主義教育の擡頭と共に情意の訓練にも關心するやうにはなつたけれども、未だ至情に滿ちた熱ある誠の教育者は尠く、自己の一生を皇道教育の爲に捧げると云つたやうな鞏固なる意志の持主の乏しいのは遺憾である。教育者の人格は時々刻々被教育者の前に披瀝されるものである。言々熱を吐き誠を語る場合の教育者の態度、眼光、音聲等悉く被教育者をして感憤興起せしめずには措かない。被教育者の思想信念は其の間に形成せられるのである。至誠に燃ゆる教訓の一語が彼等の一生を支配することゝもなり、それが根本動機となつて發憤し修養努力の功を積んで偉大な人格者となつた例も尠くない。這般の消息を知見する時、我々は教育者として或る知的說明をなす場合に於ても情意を込めて說示するの必要を痛感せざるを得ない。情意の籠つた說明は同じ說明でも印象が深いといふことは吾人の經驗に徵して明かなる事實である。而も良く腦裡に印象してゐる知識は別に繰り返して復習するまでもなく、何時までも記憶に存し必要に應じて想起せられるのである。況んや情意の陶冶乃至實行を主とする道德教育や公民教育

藝術並に宗教々育に於ては自ら情熱の烈火となり想像の彩霞となり、禪に參し、祈願を込め精進潔齋し衣冠束帶して始めて着手する底の大藝術家的態度乃至大宗教家的信念を以て事に當り教育の爲に討死するの覺悟を以て其の任に當らねばならない。

然るに今日の教育者は動もすれば、教育を一種の商賣位に心得て、人氣を取ること、評判を好くすること、昇級すること、拔擢されること、當局の御覺え芽出度からんことのみに腐心して教育の本義を忘れてゐる嫌ひがある。教育はどうでも大過なく仕來り通りの儘を繰り返して行けばそれで澤山！　後は父兄や有力者や當路者の機嫌を取つて置くに限る。さうして置くと馘になる恐れもなく、年功に依つて奏任校長位にはなれると云つたやうな極めて世俗的な考の下に教育を汚してゐる者が尠くない。

それかあらぬか、東京市に於ける今回の初等教育界の醜態暴露はどうであるか。視學や學校長にして贈收賄をするとか、待合で研究會を開くとか、男女教員の醜關係とか、公金費消とか語るに絶えざるものがある。而もそれは啻に東京市のみではない。全國到る所にさうした事實が聽取されるのであるが唯摘發されぬだけである。又それは初等教育界のみの問題ではない。中等以上の學校に於てもそれ等が唾棄すべき諸種の形式で行はれてゐる。神聖でなければならぬ教育界がどうしてそんなに腐敗するかといふに、是は名譽慾や、利慾や、情慾等、人間の下劣な慾望の奴隷的生活に根ざしてゐる。故にこれ等の下劣な欲望を高尚な人格意識に依つて統制し、何時如何なる場合に於ても自己の教育的信念を貫くといふ教育的眞人の協同的努力に依らざる限り、現時の教育界は容易に廓清されるものではない。

然るに慾望に目が眩み、成功第一主義の夢想的教育に墮してゐるが故にその當然の歸結として校長の椅子賣買もやれば、當路者に拔擢して貰はんが爲に贈賄することゝもなり、それに絡んで公金費消ともなるのである。教育者が斯うした失墜を演ずるに係はらず之を不問に附するやうなことがあつたならば、教育界は愈々腐敗することゝなるから、當路者に於ては此の期を逸せず徹底的に醜教員を檢舉し掃蕩して將來の禍根を斷たねばならない。更に又教育者自身に於ては今次の教育界不祥事件が神聖な教育を臺なしにする所以を考へ、是に依つて教育者の感化影響が如何程減殺されるか、又教育そのものがどれ程災ひされるかを思ひ、大いに自省自重して、各々皇道の精神を中心とする自我人格の修養を積み、自ら斯かる失墜を演ぜないやうにするばかりでなく、同僚に於ても亦斯うした落度がないやうに互に相戒め相勵し共に與に教育の神聖を維持存續するのみならず、愈々精進努力して教育の効果をより偉大ならしめるやうにせねばならない。

情意の陶冶を實現するとは知的陶冶を輕んずる所以ではない。知的陶冶に於ても今日完全に行はれてゐるといふ譯ではない。科學的頭腦の陶冶に於ては事實上歐米のそれに及ばない所がある。それは甚だ遺憾である。で、我々はより一層科學的體系的陶冶の必要を痛感せざるを得ないのである。知的陶冶と云つても眞に其實を擧げんが爲には情意を込め全我を傾倒してかゝらねばならない。即ち知に依つて情意を動かす所の眞知を養ふことに努めねばならない。

今日の教育者はリンデの所謂熱誠能感、個性顯明、生動獨創、操守堅固等の人格的特質に於て缺ぐる所がある。寧固な意志を以て自己の教育的信念を貫徹しようとする人が乏しい。教壇上の教師としても教育者間並に父兄乃至當路

者及び社會一般人との接觸の場合に於ても教育者は人に迫る力が無い。潑剌たる元氣が見出せない。どこ〳〵までも進んで止まぬ、所謂不屈不撓の精神が缺けてゐる。無論それは教育者の全部ではない。中には教育者にして一頭地を抜いてゐる優れた人格者もないではないがそれは極めて稀である。然らば何故教育者に元氣がないか、それは教育そのものが極めて地味なる仕事であり、別に熱誠を込めて教育せずとも大過さへなければ誠になる恐れもなく、更に又教育者が餘りに政治や經濟や思想問題等に嘴を入れると却つて危險視される恐れもあり、寧ろ控え目と沈默を旨として世人の信用を博した方が立身出世の近道だといふ所からも來るのであらうが、併し乍らそれでは現今の非常時を打開する人間を作ることも出來ねば、將來世界をリードする日本人を養成することも出來ない。それ故苟くも人の師表となるべき我が國の教育者なるものは自己一身上の利害得失や立身出世等を念頭に置くことなく只管全我を込めて皇道中心の教育に依つて皇道の眞義に徹した人間を養成すべく、日夜心膽を碎くところがなければならない。

（一〇）

從來は身體の發達が凡そ二十五歳まで繼續するから其の身體完成の時期を以て教育完成の時期であると見たのであるけれども、人はその一生を通じて發展すべきものであるから教育も亦終生的のものである。教育完成の時期は無いのである。人は終生學生たるの氣分を以て自己教育乃至自己修身を積まねばならない。隨つて被教育者ばかりでなく教育者も其の他の指導の任にある人も、大臣も、大將も、博士も、政黨員も、財閥も、特權階級の人々も、悉く皇道の精神に徹すべく絶えず自己人格を練磨訓陶せねばならないのである。然るに指導的地位にある人々は自ら一廉の指導者の積りで、人を指導することのみを考へて自らの人格が果して人を指導するの任に耐え得るか否かと云ふことを反省しようとはしない。彼の學校長や視學にして贈收賄をするとか、待合で亂痴氣騒をやる人々は假令檢擧せられずとも自ら反省すれば教育者たる資格もなければ指導者たる任に耐えられぬ筈であるが、世間の人がそれを知らぬのを奇貨として或は多少探知する人があつもそれが表沙汰とならねばよいことにして職責を汚してゐる人が餘りに多いのは長大息の至りである。此の傾向はどうしたら矯正することが出來るか、又その傾向はどうして馴致したのであらうか、固より其の因つて來るところ遠いのであるが一言にして蔽へば彼等の良心が痲痺してゐるからだ、「同じ罪惡を犯しながらも高位高官を贏ち得てゐる人もある。强ち俺ばかりではない」といつた風に全く恥辱を恥辱と感ぜぬやうになつて了ひ、而もそれが社會一般の風習となり傳統となつてゐるからだ。或る選擧違犯者は「選擧違犯は俺ばかりではない、嚴密に調査したら悉く選擧違犯者だ」と言つて平然としてゐた。そんな風に習が罪の子だから罪を犯すことを當り前だと考へてゐる。斯うした人々には理想もなければ規範意識もないのだ。隨つて自我の內界に閃めく神の御光としての良心もその痕跡だに止めないやうになつて了ひ、愈々奈落の底深く落ち込むばかりである。人間の修養を怠る者の末路實に憐むべきものである。かゝる人心の腐敗乃至社會の頽勢を挽回するの道は他ではない。我が皇道の精神に目覺めることだ。日本としての我の本質を會得することだ！　日本人たる我の本質を了得するには我が建國の精神に遡り、神ながらの道に依據し、我が光輝ある歴史に依つて我そのものが形成されてゐる所以を自得せねばならぬ。云ふまでもなく我は祖先なくして出來たものでなく、又我が歴史なくして我の存在する道理もない。建國以來天皇を頭首

とし中心として協心戮力、以て過去の麗はしい歴史を形作つて來た我々日本人はどうしても皇道の精神に生き皇道精神を宇内に顯揚することに努めねばならぬ。而も皇道の精神が世界精神であり人類意識の本質であることは皇道の意義の條下に説示したところであるから玆には之を贅せない。皇道の眞義を自得するには絶えず自我の魂を凝視し自己の歴史的生命を考察し日々自己修養を積まねばならない。學校を卒業しても、學位を附與されても、それは一種の上部の飾りに過ぎぬ。内心の純潔、良心の閃光は地位とか、肩書とかに依つて決定されるものではない。殊に從來に於ける我が國の如く唯歐米の糟粕を嘗めることだけを事としてゐたやうな教育を幾ら受けたところで日本人としての人格が養はれる筈がない。故に教育が却つて我が日本人の人と爲りを害ひ、皇國民を災ひしたといふことも出來る。で今日までの教育はすつかり反古にして了つて新に教育し直さねばならぬことゝなつてゐる。皇道の眞義に則つて我が國の教育を根本的に改造せねばならぬやうになつてゐる。それに我が國朝野の事大主義は偏に肩書のみを尊び、學校出を歓迎し、地位官等を無暗に有難がり、人格そのものを標準として人たるの價値を決定する所以を知らなかつた。是は從來の教育が成功第一主義に墮し、徒に事大主義を煽る教育が日本國民の殆ど全部を災ひしたとも云へる。更に又卒業と云ふ言葉も自己修養を怠る起因となつてゐる。卒業と云ふことを概ね學業を卒へるといふ意味に解し「もう自分は大學を卒業したのであるから學校時代のやうに試驗勉强する必要もなく、又卒業論文に頭巾を搾る必要もない、これから自由の天地に逍遙することが出來る」と云つたやうな、勉强は唯學生の時に限る位に心得てゐる。

元來卒業といふ語は學業を終へるといふ意味に解すべきものではない。(卒業は規定の課程を修めただけで學業を卒へたのではない。學業は終生我々に課せられてあることを忘れてはならぬ。graduation は卒業と譯するけれども實は漸進を意味する。無數に續く階段の中一階段を上るといふ意味に解する。是が本當の卒業の意味だ。日本人は勉强を在學中に限ると心得、卒業後は勉學を斷ち只管運動や手蔓に依つて官公職にあり附き、お世辭と迎合主義と賄賂と平身低頭とに依つて漸次引立てを蒙り、地位の向上を圖ればよいと考へてゐる。是は實に呪ふべく唾棄すべき國民の缺陷だ！

固より我が國民性と云つても麗はしいものばかりではない。故にその短所缺陷を捨てゝ長所美點を發揮するやうに努めねばならぬ。而して其の長所を分ち美醜を決するの根據はそれが果して皇道の眞義に一致するか否かにある。皇道の精神は至純至美にして普遍性と永遠性とを具へ、古今東西に通じて悖ることなく謬ることなき大眞理なるが故に、之に照らして人生一切の眞僞、善惡、美醜、正邪、理非、曲直を辨知することが出來るのである。否啻にそれを辨知することが出來るばかりでなく、其の眞、善、美、正、理、直を固く執つて動くことなく、世の邪、惡、僞、醜、非曲に惑はされぬやうにせねばならない。斯の如く自我一切の生活を皇道といふ中心標準に依つて決定するやうに努めたならば、眞に皇道本位の人格者が出來、その言行は一々肯綮に當り、孔子の所謂心の欲する所に從ふも矩を踰えずといふ域に達することが出來るであらう。

八　皇道と非常時教育の諸問題

（一）　問題への呼びかけ

非常時局は何時まで續くか、それは寧ろ愚問であらう。吾人の前には一難去つて又一難と空前の非常時も、之を奇緣とする自我改造乃至社會革新の絶好機會も、限りなく展開されるものと見ねばならない。隨つて全國民は決して緊張氣分を緩めるやうなことがあつてはならない。殊に身教育の任にある者に於て然りである。固より教育者は自己の職責たる日々の教授訓練に依つて被教育者の心身の練磨に意を注ぎ將來有爲の人物を養成すると共に非常時局に於ける重任を自覺し、出來得る限り社會教育に進出するとか、農村教育の革新を圖るとか、都市教育の充實に力を注ぐとか、自己の研究並に創見に基づく教育的信念を披瀝すること等に依り、絶えず周圍に感化影響を及ぼすことに心掛け、更に進んで大局に眼を注ぎ教育の大方針を誤らぬやうにせねばならない。

（二）　知育偏重の檢討

世の中が複雜となるに連れ、教科目も殖え教材も愈々增加し、隨つて教育活動の分野も益々多岐に亘ることゝなり、各種の知識技能は矢繼早に注ぎ込まれる。而も被教育者に於てはそれ等の知識技能を十分に咀嚼し整理し統一し練成するの餘裕が與へられないので概ね之を鵜呑みにする。それ故生半可な知識を澤山習得しては居るやうだが、其の知識たるや上辷りで情意を動かすに足る程の確實性を帶んで居らぬ。隨つて幾ら多くの事柄を學んでも融通が利かず、應

用が出來ず、何等實際の役には立たない。無論實際に役立つ知識は條理整然たる體系的知識でなければならぬ。然らざれば必要に應じて所謂當意卽妙的に出て來るものでもなければ情意を搖り動かして實際化されるものでもない。今日の教育が知育に偏して居ると云ふのは一般の定評である。併し乍ら若し今日の教育が知育に偏して居るならば少くとも其の知識だけは鍊られたものがあり熟したものがなければならぬ。然るに今日學校教育を受けた者の一人々々を吟味して見るがよい。果して確實な知識を特つてゐるかどうか。條理整然たる科學的知識を與へてゐるかどうか。最高學府を出た者でさへ確乎たる價値意識がなく、隨つて各種の社會的出來事や思想問題等に關しても正當な批判を下すことが出來ないで、右に左に動搖してゐるの體たらくである。然らば知識偏重の教育とは果して何を意味するか。それは雜然と多種多樣の知識を授けるに止まり、單なる物識りを作るとか口巧者を拵へるに過ぎない。自己の醜い言行を辯解したり、責任逃れの口を利いたり、人の言行に難癖を附けたり、巧みに法網を潛つたりすることには今日の學校出には特に優れた所を認めるが、偖て實際に仕事をさせて見ると何一つ出來ないばかりでなく、文章を書かせても話をさせても纏まつた文章も話も出來はしない。是れでは偏重された知育でさへ甚だ怪しいものと云はざるを得ぬ。

今日知識偏重の教育を受けた學生並に卒業生の知識そのものは概ね不確實であり、曖昧多義であり、切れ切れ離れ離れのものであつて全的體系を具備したものがなく、それに知的探索の方途も指導されてないから、眞理への道程を辿ることさへ出來ぬ狀態に置かれてある。知育偏重の教育に於て知育そのものが不徹底を極めて居る以上、其の他は推して知るべきのみである。

然らばどうして今日の知識偏重の教育が、其の知育に於てさへ不徹底であるかと云ふに、それは人間教育に於て最も根本的な情意の陶冶に缺ぐる所があるからだ！　情意の陶冶に缺陷があれば、幾ら知育にのみ力瘤を入れた所で差程價値あるものではない。何故なら教へられた知識は眞面目な生徒は後生大事に覺えて行くけれども自ら進んで新知識を獲得しようとか自分の持つてゐる知識を丹念に整理しようと云ふやうな鞏固な意志が養はれて居ないからだ！　彼の自ら疑問を解決し、既得の知識を統一し、何處までも眞理の把持に努め、止むに止まれぬ熱心さを以て研究を持續する人は鞏固な意志の持主である。

現時に於ける教育の大缺陷は確固不動の信念！　一全體としての精神生命を把握することに努めないことだ！　飽くまで自己の目的を貫徹し、理想を實現せねば止まぬといふ堅忍不拔、不屈不撓の精神の教養に努めないことだ！　知的教養の場合に於ても教育者の熱情と、鞏固な意志に基づく研究心とを披瀝しつゝ、學習指導の任に當つたならば恐らく被教育者をして眞理の世界に驀進せしめることが出來、眞智の探究と發見とに貢献せしめることが出來るに違ひない。

（三）　歪曲せる教育者の態度

現時に於ける我が國の教育者は果して自己の教育的信念を把持し、其の信念に基づいて教育を施しつゝあるかどうか、果して自己の周圍の事情に惑はされたり、情實に捕はれたり自己の慾念に驅られることなく、只管教育目的の達成に力を盡し、日々教育の實務に熱中しつゝあるかどうか。果して教育の眞義に則り、教育薫陶の業を自己終生の天

職と心得、献身的に努力しつゝあるかどうか、凡そ是等の問題に就いて自己反省を怠ることなく、皇道教育の普及徹底に意を注ぐとすれば、より嚴肅な態度を持し、努力精進以て兒童生徒に範を垂るゝばかりでなく、社會一般民衆に至るまで感化影響を及ぼす筈であるけれども、今日の教育者に向つて之を期待することが出來ぬのは甚だ遺憾である。彼等の中には往々にして自己の本職を忘れ、權力者や財閥に對して阿附追隨するとか、當路者の前に平身低頭するとか父兄や學徒に對してさへ其の歓心を買はんとするとかして自己の權威を極度に失墜せしめてゐる。彼等は何が故に迎合主義を取るのであるか。何を苦しんで自己の教育的信念を曲げんとするか、他でもない、自己慾望を滿足せしめ其の野心を貫かんが爲である。それはお世辭を振り撒くことや媚びを呈することに依り、自己の世評を高め率るては當路者の御覺え芽出度く引立てを蒙らんが爲である。立身出世のみを目標とする今日の教育者は只管自己の榮達のみを計つて他を顧るの餘裕が無いのだ！　斯うした非人格者がどうして神聖な教育を取扱ふことが出來るか。今日教育が盛んになればなる程世は闇黑と化するばかりであり、人皆な腐敗墮落するのみであるのは教育者の態度と其の醜い心情との反映であると云つても敢て過言ではない。彼等は如何に自己の人格が低級であつても立身出世さへすればそれで立派な人間だと心得てゐる。又立身出世した爲に却つて身を持ち崩したり或は罪を犯したりするやうなことがあつても、それを胡麻化したり或は地位の手前無罪放免となつたりすれば、それで恥づることもなければ悔いることもない。そんな人が無邪氣な教へ子を傷つけたり、指導者の位置に立つて國民を愚にするから社會が亂れ國家が累卵の危きに迫るのである。

（四） 軟弱教育の排撃

教育者は一面「惡いことをせぬ」と云ふ消極的信用を博して居るが、他面「極めて弱い者」と蔑視されてゐる。如何に惡事を働かぬと云ふ消極的信用を受けて居るにしても弱い者では力强い教育は出來まい。教育者は自己が教育者として如何にあらねばならぬ乎といふ自己反省を怠るやうなことはないか、自己に正善を實行する上に弱い所があるならば無論之を矯正して强くせねばならない。若し自ら堅固な意志を持つてゐるに係はらず、又教育界の全體を見渡し內部的考察をして、教育者は一體に他の政治家や實業家や軍人や宗教家等に比して强い者であるとの自信があるならば社會の批判や輿論に向つて斷乎として抗爭すべきである。固より教育者の中にも幾らか意志の堅固な人もあるだらう。又教育の眞義を會得した愛情濃やかな模倣的教育者もあるだらう。併し概ね長い者には卷かれろ主義でグニャグニャ者やベコベコ者が多いのではないか。若し其の中に實力ある教育者や、研究心旺盛な教育者や、教育上の革新意見を有つ教育者があれば、却つて教育界から目の上の瘤として冷遇虐待される傾向はないか。どうも神聖なるべき教育界が事大思想に捕はれ、阿附迎合を事とし、事勿れ主義を取り慣習の奴隸となつてゐるから、校長も監督官廳も眞の教育者を目するに異端者を以てし、同僚でさへ敬遠主義を取り蔭口を吐き反逆者の如く言ひ觸らすことは珍らしくない。隨つて將來ある教育者、堅固なる意志、確乎たる信念を有つ教育者、卽ち教育界に無くてなるぬ人格者は當路者の反感を買ひ教育社會から放逐されることゝなる。併し乍ら硅角があるといふのみで別に惡いことをせぬ若い教員を理由なしに馘首するといふ譯には行かないから、左遷したり、五年も七年も一回の增俸もしないで放つて置き、

馬鹿らしい感じを起させ、結局教育界から足を洗ふの止むなきに至らしめる。それが當路者の常套手段となつてゐる。それ故教育界に止まる者は湯とも粥とも知れぬ、毒にも藥にもならぬ、有つても無くても良い所謂お人好しのみとなる。隨つてそこには革新運動も起らねば、眞面目な研究會も催されず、非常時局もどこ吹く風かと聞き流し、徒に父兄會とか、懇親會とか、展覽會とか、學藝會とか、稀には學校調査會とか、教授批評會等を催してお茶を濁してゐるに過ぎない。

斯うした教育界の內狀が教育不振の最大原因ではあるまいか？ 斯の如き教育界の雰圍氣を改めない限り、如何に教育の理想を說いても、如何に教育方法上の問題を云爲しても決して改まるものではない。

（五） 迎合主義の教育を排す

「被教育者の個性を尊重せよ」とか、「兒童の現在生活には特別の意義があるから之を重んぜよ」とか云ふことにも一應尤もな理由が存するけれども、被教育者の一時的傾向とか、現在に於ける特殊の生活の爲に將來の爲の教育を顧みぬやうでは、徒に被教育者に對する迎合主義の教育となつて其の我が儘を增長せしめ——彼の不良少年不良少女や無賴漢不德漢乃至大學生の赤化等大多數の危險分子は此の我が儘から生ずる——軟弱教育の弊に陷り、隨つて人の子の將來を誤り、社會を毒害することとなる。それ故教育者たる者はこゝに深甚の注意を拂ひ、教育の時代思潮にのみ捕はれることなく、自己の教育的信念に基づいて練磨訓陶して行く處がなければならない。

我々は嚙んで含めるやうな軟弱教育、世の風潮に翻弄されるやうな末梢教育を排して、硬教育、本質教育、乃至鍛

鍊教育を主張する者である。彼の歐米の飜譯教育、模倣教育を以て新教育と誤認する似而非教育者は硬教育を以てスパルタ教育或は寺小屋教育への逆轉とか、教育の時代錯誤とか云つて非難するかも知れないが、却つて現代の非常時局に對する認識不足であり、將來の國家社會を形成する人間は如何にあらねばならぬかに對して無理解なものであつて、彼等こそ時代錯誤の人間であり、慣習の奴隷であると斷ずべき者である。眞に自我の本質を發揮する人間、皇道の精神に終始する人間、大義を宇內に顯揚する人間、時代の先覺者等を作らんと欲せば、どうしても硬教育鍛鍊教育に俟たざるを得ない。——玆に鍛鍊教育とは心身の兩方面に亘つて絕えず切磋琢磨の功を積むの教育であり、各自の工夫考究、發明發見、努力創造を重んずるの教育であり、自我の主義信念乃至目的理想を飽く迄貫徹せんとする堅固なる意志の教育であり、全人格の陶冶を主とし其の人格を絕えず此の世に具現せしめんとするの教育であり、眞實に生きんとする人間、自らの力を以て何處までも進んで止まぬ所の人間自己の前途に橫はる如何なる障碍をも突破する人間、社會國家に對して犧牲的、奉仕的に働き得る人間、人類文化の發展に貢獻する人間を養成するの教育である。——今日の如く世の中の風向次第に右に左に動くやうな灰色の人間を幾ら養成した所で國威の宣揚も、非常時局の打開も決して出來るものではない。

（六） 廢止せよ！ 高等遊民への教育を

何と云つても高等遊民への教育は之を廢止せねばならない。ところが今日の學生は概ね高等遊民たるべく運命附けられてゐる。大學や高等專門學校を出ても就職難の今日、適當の口に有り附くことは極めて少數者を除くの外殆ど絕望の狀態である。だからと云つて鄕里に歸つて百姓や商人にはなり度くないし、そこで止むを得ず高等遊民になつて了ふのだ！

明治時代から大正時代の半頃までは帝大や高師でも出ると引張り凧に逢つたものであつた。それが大正時代の終り頃から次第に就職難が甚だしくなつて來た。今日特にインテリの就職難が甚だしくなつたかと云ふに、それは明治以來學校さへ出れば或は學位さへ得れば誰でも立身出世したものであつた。「學士樣なら娘をやろか」との歌が永らく學生を陶醉せしめたのに徵するも這般の消息が窺はれる。然るに今日では餘りに多くの人達が立身出世を目的に大學教育を受けるやうになつたから、總べてが官公職を望んでも或は立身出世がしたくとも、それが得られる道理がなく、隨つて就職者も立身者も一部少數者に限られて大多數の人達は落伍者とならざるを得ぬやうになつて了つた。

大體教育を立身出世の具に供しようとするのは根本的誤謬である。教育を以て人格向上の手段とし、將來獨立して個人的社會的國家的乃至國際的生活をなし得る素地を養ひ、又如何なる職業に從事するも其の職責を完うする所の人たらしめるといふ事は、凡ゆる人に取つて必要であり、此の意味に於てはどれ程多數者が高等專門の教育や大學教育を受けても敢て差支ないのであるから、學校の數や、收容人員を制限する必要もないのであるが、目的を官公職や立身出世に置く場合に於ては勢ひ大制限を加へるの必要がある。何故なら有限の官公職或は立身出世に對して無限の希望者が出來、其の當然の歸結としてインテリ・ルンペンを激增せしめることゝなるからである。云ふまでもなく立身出世には名譽と地位と高錄とを獨占して他人の勞働を搾取することである。世の中に搾取者が多くなれば多くなる程不

健全となり危險狀態となつて來る。若し此の儘進んで行つたならば、搾取者と被搾取者との對立となり、結局社會は一大修羅場と化するであらう。而して今日の誤れる立身出世主義の教育は歩一歩此の危險狀態に導きつつある者と見ることが出來る。

以上の理由に依つて今日の立身出世主義的教育は二重の危險を犯しつゝあるものと云はれる。その一は立身出世者卽ち世の所謂成功者（搾取者）を作るといふことが危險であり、其の二はインテリ・ルンペンを作ることが危險である。此の高等遊民や搾取者が殖えれば殖える程、社會や國家は愈々危險に瀕することとなるのである。

先づ高等遊民の方から論ずると、彼等は學校を卒業するのと同時に失業者となり、自ら喰つて行くことが出來ぬ爲に世を呪ひ人を咎めたいやうな一種の强迫觀念に襲はれてゐる。それに社會の錯綜した窮狀と醜態と缺陷とは、まざ〳〵と彼等の眼前に展開するし、其の上幾多の危險思想は國境を超えて押寄せて來るし、さなきだに自暴自棄的破壞的傾向を帶んでゐる彼等が殆ど無批判的に之を受け容れ、之に惑れて其の妄信者となるのは無理からぬことである。而して其の結果は進んで善からぬ宣傳に携はるとか、或はパンの誘惑に陷り、共產黨の仲間入りをするとか、又一種の名譽慾からコミユンテルンにでも選ばれる爲に努力するやうになり、さうして次第に深淵に沈んで行くのである。斯うなると最早取り返しが附かぬやうになり、君父の恩を忘れ、國民道德を蔑視し、我が光輝ある國史を否定し、國體の精華を傷づけ、皇室の尊嚴を冒瀆し、國家の存立を危うすることゝもなるのである。

次に搾取者に對して論鋒を向けると、彼等は先づ官途に有り附き、次第に立身出世して位階勳等を得、或は虎の威を借る狐のやうに是等權力階級に縋つては其の手先となり、勝利者の如く振舞ひ、衆庶を眼下に見下して横威を弄したり、或は搾取をすることに依り、有り餘る私財を貯へ、一身一家のみの慾望を滿し、贅澤に耽り多數者を泣かせ、其の怨府となつてゐる。それが直接若しくは間接に危險思想を醞釀し激發せしめるの因となつてゐる。それにも係らず彼等はそこに思ひを致さず、自分の罪を棚に上げて、只管近代に目覺めた思想家や社會運動家が惡いとか、右傾とか左傾とか〻危險だと思ひ込んで、之を呪ひ之に向つてのみ彈壓を加へんとするのは片手落であり、無反省であり、無自覺であつて、是れ又社會や國家や國際關係等を危險に陷れ、人類を終焉に導きつゝあるものと云はざるを得ぬ。斯の如き危險を伴ふインテリ・ルンペンを無數に作るとか、或は一面少數の成功者乃至搾取者を作るやうな我が國の學校教育、家庭及び社會教育並に一般人の教育思想を根本的に改めざる限り教育の振興も思想の善導も却々出來るものではない。一方に於ては思想惡化を醞釀しつゝ他方に於ては之が防止策に血眼になるとは何たる矛盾であらうか、それは恰も澤山ボーフラの出來るドブ池を拵へて置いて、他方に於ては蚊を退治しようと力んで居るやうなものである。

思想善導の根本對策は此の立身出世主義的遊民教育を廢止することである。其の爲には先づ官公私立專門學校及び各種の大學に於ける凡べての特權を剝奪することである。さうすると高等專門以上の學校への入學志願者も激減するに違ひないし、率ゐて高等遊民乃至インテリ・ルンペンも激減するに違ひない。

固より卒業證書や肩書等は何等實際上の役に立つものではない。是あるが爲に却つて人格や實力を傷ばないで唯學

歴とか稱號とかを無暗に有難がるやうになるのだ！　それは今日迄學歴と肩書のみが物を言ひ、それなしには殆ど立身出世が出來なかつたからだ！　立身出世は未だに現代學生の憧憬の的であり、垂誕の對象であるけれども、最早彼等に於ても見直さねばならぬ時が來た。即ち肩書を捨て稱號を抛ち位階勳等を眼中に置かないで全然之を實力本位、人格本位に改めねばならぬことゝなつて來た。隨つて從來に於けるが如き學校出の凡ゆる特權乃至學閥等を解消して是に代ふるに各自の實力を本當に表はさしめる所の國家試驗を以てしなければならぬ。此の國家試驗を通過した者のみを各官廳の官吏並に各種學校の教員に採用することだ！　さうすると資格のみあつて實力の之に伴はぬ者が無くなり、力の統一、資格の均衡が保たれるであらう。それに現在の官公職者も悉々く試驗を仕直して不合格者は悉皆之を馘首するの一大英斷に出でねばならぬ。否らざれば官公界の覺醒も社會の改造も得て望まれるものではない。

（七）畫一教育の打破

從來に於ける畫一教育も亦排擊される所である。農漁山村の教育も、都市の教育も之を導くに同一の教科書を用ひ同樣の運動競技を行ひ、殆ど鑄型に嵌つたやうな指導樣式を以てするが如き、或は天才兒も凡骨兒も低能兒も悉く同一教室に押込めて教壇上から一般的に呼びかけるやうな、而も之を卒業せしめるに同一の年數を要するやうな教育はどうしても之を畫一教育の弊に陷つて居るものと見ざるを得ぬ。教育は複雜な社會に應ずる爲之を地方の狀況に應じて教授事項を取捨選擇し、情意の陶冶にも特別の注意を拂はねばならない。無論斯うした規定も設けられてあるけれども、畫一教育に飼ひ馴された現今の教育者は殆ど之を適用して居ない。又出來ることなら被教育者の能力に應じて天才兒教育には累級躍進の方法を採るとか、低能兒の爲には教科書の內容を、より平易にするとかの方法を講ずることも必要であり、又個別的取扱法に就いても萬遺漏なきを期せねばならない。

併し乍ら今日の教育制度なり、學校組織なり、教育者の指導ぶり等では十分に被教育者の個性を伸ばすことも、或は其の天才を發揮せしめることも出來るものではない。もつと個別的取扱ひや、地方に應ずる教育を徹底的ならしめんが爲には教科書を增減することも、教授事項を取捨選擇することも、時間を制限することも、一に地方の學校長又は學校長會で決定せしめることゝしてはどうだらう。固よりそこにも學校長の人格なり、教育の全般に亘る理會の程度なりが關係するし、學校長や一般教育者の人格をより高めない限り、此の種の自由選擇は當分不可能であるかも知れない。だがそこまで學校長に自由選定の餘地を與へて置かぬと、眞に地方に應ずる教育も出來ねば、個性や天分に適切な教育を施すことも出來ぬことゝなる。隨つて師範教育を改善して一般教育者の人格を高め、而も學校長の人選に最も意を注ぎ、一旦學校長として拔擢したならば、之に特權を與ふることにして眞に生きた教育を施させねばならない。教育制度や學校の組織內容に自由の餘地を與へて畫一教育の弊を矯め、個別的指導を爲さねばならないけれども、それは決して全體的立場を忘れるものであつてはならない。元來個性即ち個人の特性と、社會性即普遍妥當性とは別の物ではない。個人の特性は之を社會的に發揮すると普遍化されることゝなり、普遍化された文化は個人々々の內界に喰ひ入つて其の個性を呼び醒すことゝなる。けれども古往今來個々人に依つて表現された思想文物は餘りに多岐多端であつて一々之を收得することは出來ない。隨つて之を教科材に資するに於ては現在及び過去の文化の中から、より

善きものを取捨選擇せねばならぬし、其の選び方も心理的立場から選ぶとか、社會的或は論理的立場から選ぶとか、種々の立場があるが、我々は之を皇道の精神に準據して――少くとも皇道の精神を裏切らないやうな材料を――選擇し、而して之を心理的及び論理的に排列し、個々人の心意發達の順序に應じて之を提示し、以て理會を容易ならしめ、之に依つて各自の知德を研き人格を練り、各自の分相應に社會國家並に人類文化に貢獻せしめるやうに努めねばならない。斯うして始めて畫一教育の弊を一掃することが出來るのである。

（八）輸入教育の是非

今日まで我が國の教育は殆ど歐米よりの輸入教育であつた。それは教育の目的と云はず方法と言はず悉く模倣中心であつた。個人的教育でも、社會的教育でも、經驗的教育でも、批判的教育でも、或は人道主義的教育であれ、人格的教育であれ、或は實際主義の教育であれ、文化的教育であれ、悉く歐米の受賣教育ではないか、是等の翻譯教育が下は小學校から上は大學まで行はれてゐたのだ！　我國の教育者で貝原益軒や三浦梅園や元田永孚等を口にする者は少いが、好んでカントやベルグソンやヘルバルトやジューキや、シュプランガー等を口にする。又我が國の大學出身で外國語を巧みに操る人は多いが、其の癖我が國語が分らぬ人は極めて多い。文章を綴らせても碌なものは出來ぬし、文字には誤りが多いし、特に我が國の古典の研究に至つては殆ど顧みる者が無い程である。斯くては我を忘れ我を投げ捨てゝ他を尊び他に依據することゝなり、我國を卑しんで外國崇拜熱に浮かされることゝなるのも無理はない。そこで歐米の思想文物は無反省的無自覺的無批判的に有難く感ずる所から善かれ惡しかれ其の儘之を受け容れてゐる。

ボイコットでも、ツラストでも、マルクス思想でも、コンミュニズムでもモラトリアムでも、エロでもグロでも、モダンやダンスやレヴューやジャズでも、庭球でも野球でも、マージャンでも、コリントゲームでも、スパルタ時代の圓盤投や槍投まで、苟くもそれが外國物でさへあれば有難がられる。隨つて和製の舶來品まで市場に飛び出した例が數限りもない程である。

知識を世界に求めることは差支ないが、それは我の心性を啓發せんが爲であつて、我の本心、我の本質を忘却することがあつてはならない。知識を歐米より受け容れるが故に歐米を先進國とし歐米のみを尊み、我が國を後進國とし模倣國として之を卑下するのみならず、我が國に於ては未だ嘗て何物をも創造して居らぬやうに考へるのは大きな誤りである。我々には過去三千年來鍛へに鍊へた日本魂があるではないか。神勅及詔勅を中心とした嚴肅な皇道の精神があるではないか。此の皇道の精神を我の魂として之を伸す爲に諸外國の思想文物を取り容れてゐるのではないか。即ち取ると取らぬとは我の自由である。換言すれば我の規範意識我の人格的判斷に依つて正善眞美なれば即ち之を取り邪惡醜醜なれば即ち之を捨てるやうに選擇の自由は全く我にあるのだ！這般の消息を辯へないで何もかも外國產でさへあれば之を受け納れるやうな馬鹿者がゐるから――そこには我が國民性の缺陷として多分に多血質的な所があり好奇心と衒氣心と虛榮心とに富み徒に流行のみを追ふ嫌ひがある――我が國體を誤るとか我が光輝ある歷史を傷づけるとか、我が皇室の尊嚴を冒瀆するやうなことゝなるのだ！そこで我々日本人たる者は宜しく自我の精神生命並に其の本質を凝視し反省して豁然と悟る所がなければならぬ。而して其の悟りとは我が皇道の精神に目覺めることである。

我が國の教育者にして玆に豁然と悟る所があつたならば今日迄の輸入教育や模倣教育の非を悟り、皇道を基礎として我が國獨得の教育を打建てるばかりでなく更に人類意識の本質を啓培する世界的教育を建設し、內は我が國民的人格を高め、外は全人類に共通普遍な心性を啓發し、以て彼我の精神生活乃至物的生活の兩面に亘つて偉大な貢獻をなすに違ひない。

（九）學閥の打破

次に論じようとするのは學閥の打破である。例の赤門出とか、高等師範系とか、私學派とか、出身學校の相異に依つて優劣を決定するとか、勢力爭ひをするやうな弊害はどうしても之を除去せねばならない。中等學校に於ても校長が赤門出であると主として帝大出身者を以て自校に當て篏め、高師出身の校長であると同じく母校から教員として採用すると云ふやうに各々自家に關係あるものを選び其の勢力を張るやうに努めてゐる嫌ひがある。そして私立大學出とか獨學者などはさうした手蔓が少いから、如何に實力があつても工夫創造力に富んでゐても出世することが出來ないばかりでなく、容易に就職することさへ出來ない。事實のところ、學校出身者と獨學者とを比較考察すると、一般に後者が前者よりも實力があり、元氣に滿ち溢れて居り、其の上意志も鞏固である。それは獨學者に於ては自己の內心に閃めく抑へ切れない求知心及び研究心を根底として奮勵努力せるに引き換へ、學校出身者は教育者の力が主で、自己自身の研究努力は極めて僅少だからである。そこで我々は何とかして此の獨學者を教員として推奬したい。それは獨學者のやうに克己精勵の體驗を有つ人が教育者として最も適切であり、自らの中に教訓となるべき模範實例を藏して居り、最も力强き感化薰陶を及ぼすことが出來るからである。然るに獨學者に於ては之を引き上げて呉れる先輩も同期卒業者もなく、出世の道も開けてゐないから、相當の地位も與へられねば其の人格を表現すべき機會も得ないで不平不遇の中に其の一生を終らねばならぬといふことは、啻に一私人に關する問題でなく實に社會國家の人物經濟上一大痛恨事と云はざるを得ない。

（一〇）被教育者の學習動機問題

教育の革新に於て最も重要性を帶んでゐる問題は多くの人が餘り氣附かない所に存する。それは何であるかと云ふに、被教育者の學習動機の根本的誤謬是れである。即ち立身出世の爲、名と位と金とを獲んが爲に學習することである。近時大多數の賣名の徒や、拜金主義者や、特權階級者に對する阿附迎合者が著しく增加したのは學習動機の誤謬から其の源を發するものと斷ぜざるを得ない。財產や名譽や地位を極端に有難がる結果は、畢竟どうなるであらうか唯自分さへ巨萬の富を積み、榮華の夢を貪れば他はどうなつても顧るの要はないとか、自己の名譽や地位を獲得せんが爲には他を蹴飛ばし蹂み躙るとか、甚だしきに至つては金品の泥棒ばかりでなく、名譽や地位の泥棒が續出するとか、果ては人の世を驅りて豹狼の如く呑噬を逞しうするやうになり、國家社會をして修羅の巷と化せしめるであらう。

現時に於ける凡ゆる行き詰りと破綻とは、此の名と位と富とを圖標とする學習動機の誤謬に起因すると云つても敢て過言ではない。而も其の名と位と富とは現代人を誘惑する大きな魅力を持つてゐる。否總べては其の擒となつてゐるのだ！人間が一たび此の名と位と金といふ三つの惡魔に取り憑かれると、人の事や社會のことなど考へる餘裕は全

く無いようになつて了ふ。否總べては自分の敵とさへ思へるやうになつて來るのだ！それは各々限りある位や金や名を獲得しようとする場合に於て結局爭はねばならぬことゝなる。而して爭には必ず敵と味方とがある。人は皆名と位と金とを中に置いて互に噛み合つてゐるのだ！――怜も肉を中にして犬か猫が呻り合つてゐるやうに――

それにも係はらず、教育者も被教育者も父兄も一般人も全く意に介することなく、此の惡魔を目標として教育をなし教育を受け、或は孜々として勞作を續けてゐる。それは悉く自ら墓穴を堀つてゐるやうなものだ！　結局人と人、社會と社會、國家と國家とは此の名と位と金との奪ひ合ひの爲に自滅を急ぎ、人類の終焉を招來しつゝあるやうなものだ。此の誤つた學習動機を改めない限り教育が却つて惡魔のスパイとなつて、人を害ひ世を滅すことゝなるのである。

然らば學習の動機を如何に改むべきか、是は現代教育界に投げられた新な問題である。隨つて之に對する答辯の如何は教育界の運命を決するものである。而も之を一言にして蔽へば、皇道の精神を中心とする人格本位の教育に改造すべしと云ふことだ！名と位と富とは畢竟人格の附屬物としてのみ取扱ふべきもので全然主體的とすべきものではない。人格を本位とせずして其の附屬品のみを有難がる場合に於ては全く價値顚倒となり、隨つて人格は物質の下敷となり、或は地位や名譽の爲に驅使せられることゝなり、結局人生の意義を減却することゝなる。人生の意義の減却は畢竟人間そのものゝ滅亡となるのだ！　それ故如何に社會の狀態が變轉し、時代が推移しても必ず人格を最高地位に置き、凡べてを其の下に從屬せしむべきであり、教育の目的も學習の動機もそこに歸着せしめねばならない。斯うして始めて人間が人間らしい生活が出來、眞實な歩き方とを會得するのである。

（一一）私立學校論

私立學校も往昔の私塾のやうに師弟の情愛濃かにして至誠献身、人物を本位とし只管國士若しくば志士の養成に努めたならば、眞に君國の爲に働く所の人間が出來、國家をして富嶽の安きに置くのみならず、限りなき國運の發展の爲に貢献することゝなるのは明白である。然るに今日の私立學校にはともすれば教育ブローカーとか、學校商賣の輩出せらるゝに至つたことは神聖な教育を害ふものである。

無論設立の當初から大なる抱負と信念とを以て其の本領其の特色を發揮すべく、より善き動機に基づいて人格本位の教育を施し隨つて相當の成績を擧げ、幾多の人物を輩出せしめ社會の信用を博してゐる私立學校もあるが、今日では學校開店とか教育營業に依つて私腹を肥さんとする學校經營者が頗る多くなつて來たので、私立學校としての眞價を問はるゝが如き傾向が生ずるに至つた。殊に近來一部のインチキ私立專門學校は文部省に依つて摘發されたことは實に遺憾である。而もそれは唯入學の際に於ける寄附金の要請ばかりではない。一定の年限だけ學校に籍を置き、授業料さへ滿足に納入すれば卒業證書並に免許狀が貰へるかに見られてゐるものもある。無論形式的には試驗を施行するのであるが、其の試驗問題は一・二週間前に豫告して置くとか、或は教科書の內一定の範圍を示して其の中から問題を出すやうにするのであるから、試驗は極めて樂に受けられる。加之成績不良の學生は教授や講師に賄賂を使つて及第及び卒業をさせて貰ふとさへ傳へられる。

學校廣告に依ると其の教授及び講師には博士の名前がずらりと麗々しく掲げられてあるが、內部を覗いて見るとそれは唯名義だけのが多い、是等は全く羊頭を掲けて狗肉を賣るの類であつて眞面目な學生を失望せしめてゐる。併しながら大多數の學生は唯名前だけの大學生たり、形だけの角帽を被つて滿足して居り、力は無くとも資格さへ得ればどうにかなると思つてゐる位だから、私立學校も案外樂に其の經營が出來るやうなものだ！

若し今日の私立學校を根本的に改造して皇道教育の徹底を期することが出來たならば、寧ろ官公立學校を廢止して私立學校のみにしても差支ない筈だけれども、今日の場合それは到底望まれさうにもない狀態である。

我々は深く教育上から考察して數百人乃至數千人の學生を收容する官公私立學校よりも少數者を入るゝ私塾の方に一層重要な意義を有つと思ふ。それは教育そのものが人格と人格との接觸に依つて行はれるし、而も教育を目的とする各種の團體に於て師弟間の情誼の最も濃厚なのは私塾であるから、隨つて教育的感化力の最も善く行はれるのは其の私塾であるといふことが出來る。そこで私塾に於ける塾長及び助教に其の人を得れば吾人の要請する教育の眞義が遺憾なく發揮されることゝ思ふ。

（一二）師範教育の改善

師範教育の改善は現下の急務とする所である。これは從來に於ても可なり叫ばれたのであるが、唯學校長の首の刺換や制度の問題を云爲した所で本當の改善が行はれるものではない。無論當該學校長の人格や、教諭の人と爲りが直接將來の教育者たるべき學生に反映するのであるから、師範教育の任に當る教育者の人選は最も注意を要すべきであり、殊に高等師範や文理科大學の教授の如きは學界の權威者たり且つ皇道精神に徹する人格者を以て之に充當すべきである。否らざれば身を以て範を示すことが出來ず、教育上の規範と信念とを與へることが出來ず、人格陶冶の完全を期することは出來ない。

今日の學生を通觀すると概して思想的に混亂動搖の狀態に陷り、右に左に翻弄されて居る傾向があるのは全く彼等の基礎的信念が養はれてゐないからである。故に師範教育の任にある者は、自らが將來教育者たるべき者の教育者であるといふ二重の大きな責任を痛感して皇道の精神を中心とし、人格價値至上の信念に依つて教化薫陶の任を完うせねばならない。教育者にさうした自覺と確信とを有せず、事大思想に捕はれてゐたならば、被教育者に對して何等の思想信念を與ふることが出來ず、唯徒に弱々しい灰色の人間を作るか、さもなくば常軌を逸した異端者を作るに過ぎないであらう。それがあらぬか、東京廣島の兩高師から赤化學生を出すとか、長野縣下其の他に多數の赤化小學校教員を出したことは甚だ遺憾であり、教育界の一大不祥事である。身苟くも教育の任に當り德化を旨とすべき教育者か、若しくば將來人の師表となるべき師範學生にして自ら赤化し、無邪氣な人の子を害ひ、我が國體を傷づけ、國民にあるまじき賣國奴となるが如きは實に慨嘆の至りである。

それ故特に師範教育の任にある者は自責の念を痛感すると共に、大いに自我反省と人格修養とに努め、文部省や地方廳の指令や干涉を俟つまでもなく自ら進んで該教育の改善に最大の努力を拂ふべきである。

次に師範學校に於ける入學試驗乃至人物考査問題に就いて一言すれば、從來學力の試驗を主として人物の考査に關

しては初等中等學校に於ける操行調査を參考にするか、若しくば口答試問位でそれもほんの形式のみに止まつてゐたに過ぎなかつた。是では將來教育者たるべき人を選擇するには餘りに無責任である。隨つて師範教育改善の第一着歩としては入學志願者に對する學力試驗よりも寧ろ人物考査に重きを置き、從前に於ける家庭及び學校の狀況、言語動作道德意識。國體觀念、其の性格——純眞さ、眞面目さ、熱心さ、責任感や、研究心や、努力の如何等——知情意の全體、人格の全面に亘つて嚴密に精査するを要する。其の爲に多くの時日を要するも敢て差支ない。斯うして入學者選定上に過なきを期せねばならぬ。教育者に於ても現代人の缺陷を具へ、面倒を厭ひ、當然爲すべきことを怠つて入學者の人選等にも手落ちが多いと云ふことは甚だ遺憾である。又折角入學せしめても、人の師表たるに足らないとか、不都合な廉があるとか、或は成業の見込みが立たぬやうな者はどし〳〵退學せしむべきである、それにも係はらず、情實關係に依つて放校處分もせず其の儘卒業せしめるやうなことをしたならば將來教育界を搔き亂す元ともなるのである。故に師範學校入學者は市町村の名望家の子弟を入學せしめ眞に教育者として外的條件を具ふることも必要である。

そこで入學志願者の人選が極めて重要な位置を占めることゝなる。だが既に人學せる者の教化陶熏は尙一層大切である。

師範教育の根本精神は之をどこに置くべきかと云ふに、それに對しては「皇道の精神に徹するの教育を施すにあり」と答へることが出來る。詳言すれば皇道精神を中心とする人格の陶冶を行ひ、絕えず之を教育上に表現するの力を養ふにありと云ふことが出來る。これ迄我が國の師範教育は歐米の教育思想を中心としてゐたので翻譯教育、受賣教育の譏を免れなかつた。一時我が全國を風靡したヘルバルトの個人的教育學說であれ、或はベルゲマンやナトルプ等の社會的教育說であれ、或はリンデやブッデ等の人格的教育學說であれ、或はシュプランガーやシュテルン等の文化教育學說であれ、之を殆ど其のまゝ我が國に取り入れたものであつた。教育史であつても西洋のを主とし日本のは寧ろ之を副貳的に取扱つてゐたに過ぎなかつた。

其の他教授法乃至學習指導と云はず、知能測定と云はず、訓練法と云はず、悉く歐米教育思想の取次と、其の模倣とに過ぎない嫌ひがあつた。そこで教育者の人格養成と云つても知的方面を主とし、情意の訓練に至つては遺憾な點が多かつた。隨つて彼等は分析すること、說明すること、理窟を附けることには巧みであるが、概ね志操の堅固なものがなく、鞏固な意志を持合せてゐないから感化力の偉大な教育者とはなり得なかつたのである。

勇將の下に弱卒なしで、教育の意志が鞏固であり、人を教導誘掖せんとするの情熱に燃えて居り、潑剌たる研究心があり、陶冶的精神に滿ちてゐるならば、生徒も亦之に倣つて將來有爲有能の教育者たり得るけれども、それでない限りより善き日本國民を作る教育者たることも出來ねば、停滯せる教育界の革新も得て望まれるものでもない。

最後に師範教育制度の革新に就て一言する。尤も是に就ては所謂文部省案なるものがあつて從來の府縣師範學校を專門學校程度に引き上げ更に師範大學を新設して何れも修業年限を三ヶ年とし、高等師範並に文理科大學を廢止する計畫であるが、之に對しては相當反對意見も多いやうであるから、果して實現するや否やは頗る疑問とする所である。

惟ふに斯うした師範教育制度の改正に依つて眞に教育者として人格が教養せられるものとしたならば、制度の改正

大いに可なりで吾人も亦之に贊同の意を表することを惜しむ者ではないが、從來の如く人の師表となるに足るべき人格を根本的に練磨教養することなく、徹底した陶冶的精神を練成することを怠つて唯教育者の資格を與へるだけに止まるものであるなら、寧ろ師範教育制度の改正は無意義となつて了ふ。隨つて師範教育制度を如何に改正すれば眞に教育者としての人格を容易迅速且つ適切に養成することが出來るかといふことが問題となつて來る。

固より教育者も人間である以上、人としての修養が必要であり、人としての教育は特殊の師範教育でなく、小學より大學に至るまで之を行はねばならないのである。隨つて教育者養成機關としての師範學校は現在の本科第二部を本位とし中學校四學年修了者を入學せしめ、之に三年の師範教育を施すべきである。

教員養成機關と關聯して教育者の資格を與へる特殊方法としての教員檢定試驗制度も之を改正して一方に於ては學力試驗程度を高めると共に他方に於ては全人格的考査を綿密周到に行ふ必要がある。是れ人を教へ人を導くには單に學力ばかりでなく其の人格の如何が至大な關係を有つからである。

若し夫れ師範教育制度の改正並に其の內容の充實に依つて教育者的人格の完成を期することが出來たならば今日の如き教育者の疑獄乃至瀆職事件等が一掃され、隨つて教育界が清新の氣分を以て滿されることゝなり、率るては社會の革新も人心の改造も文化の促進も出來ることゝ思ふのであるが、源泉が濁つてゐては末流の腐敗をどうすることも出來ない。玆に師範教育改善並に教育者の人格改造の重要性が存する。

（一三）　大學教育の革新

我が國の大學教育は果して最高學府たるの名に恥づる所は無いだらうか。其の教化訓陶の任に當る教授も、其の教へを受けつゝある學生も果して其の重任を完うしつゝあるかどうか。大學教授の內情を取調べて見ると、大抵幾つもの學校を掛持つて暇の無い狀態であるが、それで本當の研究が出來、眞の指導が出來るかどうか。而も我が國の大學教授は概ね歐米原書の翻譯と受賣教育に沒頭してゐる體たらくであるから、創意創見に乏しく、其の對象としての學生も自ら進んで研究する者極めて尠く、唯學生ノートに速記することに忙はしく質問さへも出來ぬ狀態である。甚だしきに至つて大學教授にして殆ど質問の時間を與へず、學生が廊下で「先生一寸之を教へて下さい」と言つても「イヤ自分は忙しい自動車がチャント待つて居る！」などゝ言つて逃げて行くことすらある。講義の遣りつ放し位ならば學生だつて出來ぬことは無い。而も研究心に乏しい教授は古いノートを持つて來て千篇一律的に講述して行くのだからたまらない。

世の中は絶えず流動し進歩するけれども、先生の講義は一向進まない。それにも理窟を附けて眞理は永久に變らぬなどゝ云ふかも知れないが、少くとも表現法の創造や、內容の充實等に依つて絶えず新な方法を案出して、より有效適切に學理の探索心理の啓發を圖る所がなければならぬ。今日の大學教授には果してさうした用意があるかどうか。

又學問の獨立と云ふことなどは多年叫ばれてゐることであるが、我が國の學者達は大體に於て今尙ほ歐米學者の糟粕を嘗めてゐるのではないか。明治維新以來六十六年間も模倣しながら未だに學問の獨立が出來ぬといふことは如何にも情ないことではないか。

我が國の學者教授連中は我々より尊いもの〻存在することを忘れ、自己創造の力を錬ることを怠つて、徒に歐米學者の研究の跡のみを追ふて居り、年々留學生に多額の費用を投じて居るが、將來は多くの留學生を出さないで自ら獨立して學問の研究が十分に出來るやうにせねばならない。學問の獨立を圖らんが爲には自由講座制を設けるとか、私教授制を布くとか、學位授與制度を改正するとか、各種大學の統制を圖る等制度方面の革新も必要であるが、其の內部に於て大學教授が眞に學問の研究を持續するとか、學生が本當に學問を好み熱誠に研究に從事するやうにすること等が尙一層必要である。尤も自由講座制にすれば教授は當然研究せねばならぬやうになり、教授が眞劍に研究すれば學生も亦勇將の下に弱卒なしで大に研究努力するやうになる。我が國の學者なり學生なりが眞に學問に熱中し、我は眞理なり、眞理は我なりの域にまで達するやうになると、最早歐米人の糟粕を嘗むるの必要が無くなり本當に學問の獨立が出來るやうになるのである。無論大學教育の革新は唯學問の獨立と云ふだけに止まるものではない。學問の獨立乃至眞理のための眞理研究は寧ろ枝葉の問題であつてより根本的なものがあると云ふことを忘れてはならない。それは何であるかと云ふに學問を統制する人格そのものを練るといふことである。固より人間が學問を爲すといふことは人格の知的方面を研かんが爲である。人格は知のみで出來てゐるのではない。情意の方面もある。總べての人間に取つて寧ろ情意の方面がより根本的だと云ひ得る。然るに學問の獨立を叫んで情意の陶冶を忘れ、爲に大學から國家の存在を危うするやうな赤化教員が出たり、一赤化教授擁護の爲に教授講師の連中及び大學生までが束となつて文部省に當つたりするやうなことがあり——それには喧嘩兩成敗と見るべき節もないではないが——併しながら學問の獨立のみを楯に取つて全人格の陶冶といふことを考へないならば大學教育も亦災ひなるかなと云はざるを得ない。

然らば其の全人格陶冶は何を基準として行はるべきであるかと云ふに、固より我が皇道を本位として錬られねばならない。大學教育に於て學校教育は完成さるべきものであるから、特に皇道本位の人格養成といふことを中心として學問の蘊奥を究めしむべきものである。

（一四）教育の實際化

教育の實際化に就いては近頃爲政者に於ても實際教育者に於ても相當の關心と努力とを拂つてゐる所である。それは從來の教育が動もすれば學校限りの教育となり、徒に形式に捕はれ、抽象に趨り、論理の遊戯をなすに過ぎなかつたからだ！　併しながら玆に考へねばならないことは、實行或は實際的と云つても如何に實行すべきか、如何に實際化すべきかを科學的に將た組織的に明かにせざる限り、即ち指導原理を究明せざる限り、眞實な實行は出來るものでないといふことである。指導原理なくして實行を强ゆるが如きは恰も的を示さずして射的せよと命ずるが如きものでそれ自身矛盾であり撞着である。隨つて一全體としての系統ある精神生命に關係を有ち意義を有する實行、換言すれば普遍的意義を有する人格的活動としての實行でなければ眞の實行ではない。單に日常生活をどうにか切り拔けて行く程の實行か、或は從來に於ける慣習に依つて云爲して行く位の實行であるならば誰でもやつて居る所であるから別に實行論の必要はない。「今日は最早理論の時期ではない、宜しく實行すべきだ」とか、「皆理窟は知つてゐる要は實行に在り」とか云ふけれども、若し其の理論が正しいものであり、且つ本當に其の理論を會得して居るならば、そこ

から實行のプログラムが無限に生れて來ねばならぬ。何故なら理論は表現法を創造する作用を有するからだ！眞理の把持者でない者には理論と實際とを結び附ける此の微妙な作用が明らぬだらう。そこで若し實行のプログラムが出來ぬならば未だ理論を有たないのだと言ふことが出來る。固より自分は實行の故に理論を排する者でもなければ、理論を主とし實行を副とする者でもない。歸納的に個々の實行より入つて理論を築き上げるにせよ、又演繹的に原理より出發して之を實行に移すにせよ、理論と實際との先後の關係が場合に依つて相異するとしても、兩者は密接不離の關係を有するものであり、渾然たる一全體的價値を有するものであると見るのである。實際を離れて理論なく、理論を離れて實際なしと思惟するのである。便宜上理論と實際とを區別して見るとか、理論家と實際家とを切り離して考へることは差支ないと思ふ。理論家卽學者が現代社會の眞相を明かにし、之を科學的論理的に敍述し現代人の行くべき目的を指示し其の方途を與へたならば、實際家は之に依つて實行して行くことが出來る。無論一人格に於て理論と實際とを兼ねることが出來れば甚だ結構であるが、何人にもそれ〴〵長短があり能不能があるから、學者は學理の研究と其の發表とを以て奉仕し、實際家は學理の適用と表現法の創造とに依つて奉仕すべきである。社會は各人各個の長所々々を發揮することに依つて健全な發達を遂げるのである。だが、此の理論と實際との間にもそこに截然たる區劃があるのではない。それに見方に依つては思索も、辯論も、理論探究も、立案想定も悉く實行の中に編入さるべきものである。實行は具體化された理論であり、理論は內面化された實行であると云ふことが出來る。然らば理論家と實際家とを截然と區別するのは寧ろ當を失したものであつて、社會人は悉く渾一體としての實際家であると言ふことが出來る。其の渾一體としての實際家たるべきことに目覺めてゐる人が果して幾人あるか。

本當に社會意識に目覺め全體的立場に立つて行動する人でなければ此の世に無くてならぬ渾一的實際家とは云はれない。單に農夫が鋤鍬を採るとか、商人が算盤をはじくとか、漁夫が釣を垂るゝとか、大工が家を建てるとか云ふことは一の實行ではあるが、それが全體的に意義附けされない限り、其の實行は極めて價値が乏しいばかりでなく、かゝる無自覺の狀態では其の仕事に對して自我の生命を打込むことが出來ない。尤も生活慾や利慾が手傳つて力瘤を入れることはあるが、唯それ丈けでは社會的意義をなさない。然るに一たび自我の本質に目覺め全體的立場に立ち、自分が農具を投げ捨てたならば、農村救濟及び自力更生を如何にせんやとか、自分が教育界を去つたならば國家發展の原動力たる教育を如何にすべきとか、或は乃公出でずんば國際關係を如何すべきと云つたやうな、自ら地方的、國家的乃至國際的立場に立つて云爲行動する時、眞に全我的活動が出來、眞劍に努力することが出來るのである。教育者に於ても自我が社會的に無くてならぬものであり、國家を双肩に擔つてゐる者であり、人類文化發展の基礎を築く者であることに目覺め、徒に他の追隨者を以て甘んずることなく、阿附迎合を事とすることなく、帝王教育、政治教育貴族教育、庶民教育の全體を通じて苟くも教育に關する限り、教育者としての自我人格に依つて感化さるべきものなることを思ひ、自尊自重、自奮自發、乃公徹りせば天下國家を奈何せんやとの明治維新の際に於ける志士の如き確信を有ち眞に國家を背負ひ、世界を擔ふが如き全體的立場に立ち自我の魂を教育の爲に打込むべきである。斯うして始めて教育の實際的效果が擧り教育の根本的革新が出來るのである。

（一五）創意創見への教育

生々發展は宇宙の鐵則である。此の鐵則に隨順して向上の一路を辿る者は人生の意義を完うすることが出來るけれども、是に逆つて怠惰に流れ遊興に耽る者は腐敗し墮落して人生の意義を滅却することゝなるのである。我が皇道の精神は神意に則り皇室を尊み、祖先を重んずると共に、更に將來に向つて希望を投げ、生々化育の道程を辿るものであるから、啻に過去の傳統を重んずるに止まらず、生々發展して止むことがない。若し我が國民にして創意創見工夫精進を怠るやうなことがあつたならば、皇道の精神を無視するものと云はざるを得ない。

此の點から我が日本の教育を觀察すると、實に遺憾な點が多いのである。發明發見工夫創作の力を錬磨教養することに就いては初等教育から中等高等大學教育に至るまで殆ど無關心の狀態であつたと云つても敢て過言ではない。それは殆ど教科書の內容を說きほどくことゝか、講義のやりつ放し位なもので全く創造教育には觸れてゐない嫌ひがあつた。——無論創造教育の聲だけは相當八釜しいものであるが、それは例のスローガンのみに止まつてゐる——日本の學者教育家は概ね外國の書物を翻譯するとか、思想文物の取次販賣をするのに忙はしく、自已の魂から直接表現する所の卽ち自らの創意創見に基づく何者をも持合せてゐないのではないか。

小學校に於ては開發教授とか、學習指導とか、自治訓練とか云つて多少被教育者を自發的に活動せしめるの方法が構ぜられて居り隨つて工夫創造力を幾らか養つてゐるが、中等學校の高學年以上になると大底說明と講義とを以て終始し、——固より實業學校、專門學校其の他特殊の學校に於ては實地指導を主として行つてゐる所もあるが——學生は

唯要點筆記に忙はしい狀態である。而も大學生中極めて少數者を除くの外、其の最大多數者の暢氣さ加減と遊惰ぶりには一驚を喫せざるを得ない。是に依つて觀るも彼等の大多數が何等目新しい仕事をなすの知能を缺いてゐることは一々取調べるまでもなく、豫ての心身惰氣を帶ぶるの狀態で之を推知することが出來る。是では工夫創造力を練ることは愚か、過去の文化を承け繼ぐことさへもどうかと思ふ。

我が國は過去に於ては支那の儒教や、印度の佛教や、歐米の物質文明を受け容れ、之を模倣することに依つて發達した國であり、其の傳統からして我が國民が模倣性に富んで居り、それに加へて我が國の教育が終始一貫模倣を事として來たのであるから、模倣だけは實に迅速機敏なものがあるにしても、惜しいことには人生に最も重要な創造性が練られてゐない。その上我が國民は現實的樂天的傾向が濃厚であるから、短い浮世を安樂に暮したい氣分を以て滿され、一代も二代も工夫し續けるとか、苦心努力の效を積むことを要する發明發見創作等に力を注ぐ人は極めて尠なかつたのである。隨つて我が國に於ては古來大發見、大發明、大創作に乏しい。

然らば我が國民は創造性に缺けてゐるかと云ふに決してさうではない。それは今日我が國に於ても幾多の世界的發明家が出來たのでも證明されるのであるが、併し乍ら大體に於て我が國に發明家が少いといふことはそこに種々の原因がある。それは發明家保護方法が極めて幼稚であるとか、又發明家に對する社會的尊重の念が乏しいとか、又我が國民性の缺陷として小成に安んずるの嫌ひがあつて、小金でも貯へれば別に苦心努力などゝ餘計な心配はせぬがよいとか、或は工夫創造の爲に自已の一生を捧げるといつたやうな持續力が一般に缺げて居るとか、それに學校教育に於

て工夫創造力を練るの機會とその實際的指導法とが忘られてゐるからである。

若し工夫力とか、創造力とか持續力とか云ふものが我が國民性に缺ぐる所があるならば、教育の方面から之を補塡するとか矯正するとか、練磨教養するとかして、發明發見創作等に必要な心性の啓發に力を致さねばならないのである。然るに我が國の教育は寧ろ工夫創造の芽生えを萎縮せしめるやうな――創造性は適當に刺戟して之を伸すの機會を與へないと次第に萎縮して了ふ――詰込教育のみを事として敢て創造性を啓培するとか、伸長せしめるとか云ふやうな積極的方法を構じなかつたのである。

工夫創造力を養ふには無論判斷とか、推理とか、歸納とか、演繹とか、想像とか、構成とか、統括とか、應用とかの諸作用を練るの必要があり、時に或は空想に耽らせる必要さへある。又時折發明發見創作家等の苦心談とか其の態度その心境等を味はせる必要がある。すべて前人未發の發見發明等をなすには寢食を忘れ思ひを潛め、工夫を凝らし努力の功を積まねばならぬし、そこには常人の企及することの出來ぬ熱心と忍耐と持久性と眞劍味とを要する。斯うして幾多の歲月を費し、私財を蕩盡し、腦漿を搾り、苦心慘憺の結果、發見發明等に成功した曉に於ける喜びは實に甚大なもので、それは發明家や發見家でなければ味ふことの出來ぬ所である。而もその發明發見等に依つて社會や國家や人類文化發展の上に多大の貢献をなすことが出來るのである。

今日まで殆ど模倣のみに終始した日本及び日本人も最早目覺めねばならない時が來た。即ち東西兩洋の文化を模倣し盡した日本人は何時までも彼等の糟粕を嘗めたり追隨者であつたりしてはならない。現代に於ける一切の文化を素

材として其の上自己の創意を加へ、皇道精神に則つて新文化を建設し、以て普く人類の福祉に貢献せねばならない時が來たのだ！　隨つて我が國の教育に於ても從來に於けるが如く模倣教育にのみ依據することなく、創造創見の教育へと驀進し以て幾十百千の偉大な發見發明創作家を作り、彼等をアッと驚愕せしめる所がなければならない。

（一六）　國士養成の急務

現下の非常時に際しては其の非常時を乘り切ることの出來る國士を必要とする。何時の世にも國家の危急存亡の場合に於て身を擲して國難に當るの士は所謂國士である。國士は決して官途や地位に戀々たる人ではない。國家の大事に關して我の信ずる道が行はれねば冠を掛けて去る底の人でなければならぬ。彼の利慾や權力慾等に迷ふてゐる人間は假令地位はあるにしても內心下劣であり匹夫下郎の輩であつて皆目國士たるの資格が無い。國士は國中に優れた人士であり、君國の爲には何時たりとも身命を拋つて働く所の至誠に滿ちた人格者である。全體のためには一切の私心を捨てゝ奉仕するてふ犧牲的精神に富んだ人である。彼は一國の儀表たり、四方に使ひして君命を辱めないばかりでなく、皇威を宇內に顯揚するを以て己が任とするの士であり、常に國家を背負つて立ち、國家と我とを同心一體と見我の全人格を國家的に具現せんと努め、國家の榮枯盛衰はかゝつて我にありと心得てゐる。隨つて彼は國家人格主義の立場に立ち、自我を練磨教養すると否とは國家の進展に至大の關係ありとし、絕えず自我人格の向上と進展と其の表現とに努めてゐる。それ故彼は寸陰を惜んで研鑽の効を積み、自己の周圍に對して甚大なる感化影響を及ぼしてゐる。彼は一身一家の利害關係などに捕はれることなく只管社會國家を思念し、更に人類全體の上にも思ひを馳せ、所

謂文化の惠澤を共にせんとする者であるが、一朝國に事あるに際しては現代文化人の如く弱々しい態度に出ることなく、粉骨碎身以て其の事變に當り國難を突破せねば止まないのである。即ち彼は固より世界の平和と人類の幸福とを希望し意圖する者ではあるが、併し乍ら、列强に於て我が國を呪ひ、我が國の前途を遮斷し、我が國を狙ふ場合に於ては一歩も假借することなく、それ等を膺懲すべく奮然手に唾して起ち上り、彼等を辟易せしめ若しくは撃滅せねば止まないのである。

國士の關心事は決して一小局部に捉はれることなく、常に天理に則り、神意に契合する。彼は宇宙の大眞理を把握し天地神明に誓つて其の理想信念を貫徹せんとする。我が皇道の精神を自我の中心生命として生き、是に依つて云爲行動する。絶對に公私を混同することが無いばかりでなく、公事の爲には私事を抛つて顧みる所がない。我が國家は斯うした忠勇義烈死を視ること歸するが如き國士に依つて維持存續發展するのである。現時に於ては斯うした國士は殆ど地を拂つて求むる由もない。偶々あつたとしても其の人は不遇に一生を終つて何等頭角を現はす機會さへ與へられないのである。それも多數の國士が現はれて大同團結でもすれば兎に角、極めて少數者か若しくば一騎打ではどうすることも出來ない。

現今の學校教育なるものが殆ど國士養成の實を擧げてゐない。現在の弱々しい文化人を作るか、功利主義者や、成功第一主義の人間を作ることにのみ急にして本當の人間らしい人間——國士らしい國士——を作ることを忘れてゐる。現前の非常時局に當つてどれ程教育界が革正されたか？どれ程教育者の人格が改まり、どれ程教育的人格者が豐出したか？　又どれ程教育界に緊張氣分が漲り眞劍な態度で教育上からの非常時突破に努力してゐるか？　更に如何程教壇上の勇士が現はれ實際的に教育の改善改造を行ひ、どれ程國士陶冶の爲に全力を込め、目覺ましい働きぶりを發揮しつゝあるか？　彼等は唯座談會等で非常時を連發するのみで、殆ど之に處するの方法乃至教育上の一大刷新を意圖しようとはしない。彼等は教育が國家發展の原動力たる所以を忘れ、此の非常時を奇緣として今日まで停滯せる我が教育界を革新するの勇氣を缺如してゐる。乃公出でずんば蒼生を奈何せんと云つた明治維新の志士のやうな意氣の壯なるものがない。

彼等は唯改革とか革新とか云ふことを口にした丈けでも誠になりはしないかと恐れてゐる。彼等は概ね首の問題增俸の問題。ボーナスや昇進の問題のみに沒頭して、大局に眼を注ぎ教育上の一大方針を決定し、教育方法上の創造刷新の爲に一身を捧げるやうな熱あり血あり涙あり生命あり信念ある教育を施すことを知らない。國士を養成するには教育者自身に於ても國士でなければならない。國家は我に依つて維持存續し、我に依つて進歩發展するものなる所以を了得し、一意專念、全力を込めて自己の教育的信念を突き貫き、君國の爲に忠良な臣民を養成せねば止まぬといふ決心と覺悟とを持たねばならない。此の大覺悟大信念を把握し之を實現してこそ眞に教育の權化たることが出來、眞に國家を背負つて立つことが出來、國家を富嶽の安きに置くことが出來る。然るに現在の教育者は果して這般の消息を辨へてゐるかどうか。果してさうした重大なる責任を自覺してゐるかどうか。世の教育者たるもの須らく大いに猛省すべきである。

要するに國士の養成は目下の急務とする所である。皇道政治の徹底を期するにも、昭和維新を斷行するにも國際關係の危機を防止するにも、國民思想統制の上にも、經濟機構改善の爲にも、農村問題、小商工業者問題及び失業者問題等を解決する上に於ても公明正大、些の私情私心を挾むことなく、逡巡躊躇することなく、天地神明に誓ひ斷乎として所信を貫く所の國士を要するが故に、教育上に於ても特に此の點に着眼して國士の養成に眞劍な努力を拂はねばならない。

九　皇道と思想善導

（一）思想とは何

思想とは觀念系統であり、纏つた知識であつて我々の精神生活上に無くてはならぬものである。誰でも此の世に生を享けて居る以上、自らの生活經驗に基いて事物に關する觀念を形成し、應分の知識乃至常識を具へてゐるのであるが、其の知識たるや概ね或る規範意識に依つて組織立てられたものでもなく、首尾一貫した觀念系統でもない。斯うした經驗知は所謂原始的知識であつて、今日の複雜な社會に善處するに於て餘り役に立つものではない。――尤も知識を系統的に拵へ上げる爲には個々の觀念も必要ではあるが、それは組織ある思想への道程であるといふことを忘れてはならない。――そこで我々は條理整然たる知識、或る基本意識に依つて統制された觀念系統、即ち思想信念を拵へ上げねばならない。系統ある知識は必要に應じて當然即妙的に活用することが出來、而もそれは絶えず創造の道程を辿つて次第に發達もするのである。隨つてそこから盡きせぬ人生の妙味も生れて來るし、眞に生き甲斐ある生活を營むことも出來るのである。

我々が日常味ひつゝある精神文化は悉く思想の表現であると云ふことが出來る。それ故我々は思想なしには一日も生きて行かれるものではない。隨つて人間と思想とは全然引離すことの出來ぬものであり、思想信念を離れて人生を語ることは出來ないのである。

世の中が進めば進む程、思想はより豐富になつて來る。フレクシヒ氏は人間の大腦組織に於て（大腦は之を感覺中樞・運動中樞・思考中樞に分つことが出來る）思考中樞が其の大部分を形成して居り、全體の三分の二を占めてゐると云つて居る。思考中樞は感覺や運動に基つく觀念を聯繫する作用を有するものである。其の思考中樞が大腦組織に於て其の大部分を占有するといふことは我々に何を教ふるか。それは云ふまでもなく、觀念系統即ち思想が人生に取つて最も大切であるといふことを雄辯に物語るものである。我々が文化人として工夫を運らし、想像を逞うし思考中樞を練れば練る程思想はより豐富となり、より精緻となり、科學・哲學・道德・藝術・宗教等各方面の進展と聯關統一とに依つて文化は愈々進み、思想生活の妙趣を心ゆくまで味得することが出來るのである。

（二）思想の種々相

思想は千態萬樣にして、之を嚴密に區別したならば各人各樣の思想を懷抱して居るといふことが出來る。無論思想の由つて來る源泉は各人の頭腦の働きであり精神作用そのものである。即ち思想なるものは各個人の生活に即して生

れて來るものである。隨つて最初は觀念と觀念との結合から出發し極めて單純なものであるが次第に經驗を積み、想を練り、知見を廣め、先輩の意見を徵し、經典を繙き、最近思想の動きを察し、東西思想の比較研究を試みること等に依つて自己の持つ精神內容もより廣汎なものとなりより深遠なものともなるのである。

現時に於ける思想界を一瞥すると、左傾思想だの右傾思想だの、急進・漸進・保守思想だの、國家主義對國際主義だのといろ〳〵の思想があつて甲論乙駁殆ど歸一する所を知らない狀態である。隨つて思想國難の聲喧しく政府當路者に於ても之が對策に腐心焦慮してゐるのである。だが思想の統制や、思想善導の任に當る人にして未だ思想の根源乃至思想統制の規範を把握することなく、無內容で抽象的な中正穩健とかいふ不鮮明な旗章を掲げて導かうとするのであるが、其の中正穩健の思想は果して何であるか、余はそれを屢々當局に質しても明確なる答辯を得なかつたのである。

ところが今日に於ては殆ど全國民擧つて「日本精神を中心として國家を建て直さねばならぬ」とか「是に依つて國民思想の統一を圖らねばならぬ」とか言ふやうになり、彼のマルクシズムに凝り固まつた左翼分子でさへ次第に國家主義に轉向するやうになつて來た。即ち國民の總てが殆ど申し合せたやうに思想善導の根本原理は大和心乃至皇道の精神であると言ふことに一致するやうになつて來た。是は我々が最も欣幸とする所である。皇道の眞義を國民の中心生命とし、飽く迄皇室の尊嚴を擁護し奉り、國體の精華を發揮することを以て臣民としての自己の最大任務と心得、絶えず奮勵努力の功を積んで行つたならば、如何なる思想が海外から國境を超えて侵入することがあつても、之を自家藥籠中のものとなすことが出來るのである。

今日まで學生やインテリゲンチヤの中から多數の共產黨員並にその關係者を出したのは甚だ遺憾であるが、是は結局それ等の人々に於て我が建國の精神を辨へず、國體觀念を明かにせず、徒に外來思想に憧れ、傳統を輕んじ、歷史を無視し、歐米の物質文明に憬れ、自我の本質卽ち日本人としての本領を忘れた結果に外ならない。更に其の根柢を叩けば我が國の敎育が下は初等敎育より上は大學敎育に至るまで歐米の輸入敎育に墮し、眞に日本人としての敎育が行はれてゐなかつたからである。略言すれば我が國に於ける一切敎育の不徹底に歸せざるを得ない。

(三) 現代思想の根源

現代思想の根柢を究めようとするならば、勢ひ歷史を溯り、其の思想の流れ出た源泉を探らねばならない。或る論者は「現代思想は世界大戰を機緣として世界各國の政治的及び經濟的の不安が濃厚となつた結果、各方面に向つて擡頭して來たのである」と云つてゐる。成る程世界大戰に依つて在來の思想が一層擴張されたり、より濃厚深刻となつたり或は一大變化を生じたりしたことは事實であるけれども世界大戰を以て直に現代思想一切の根源であるとする見解は餘りに皮想的な觀察である。然らば歷史的事實を何處まで溯つたならば其の源泉に達することが出來るかといふに、我々はどうしてもフランス革命を擧げざるを得ない。フランス革命が總べての現代思想の源泉であることは一たび歐洲文明史を繙いた者の齊しく首肯する所であらう。我々はフランス革命の本質を明かにすることに依つて今日の世界的思想動搖の本質を理解することが出來ると思ふ。然らばフランス革命の本質は果して何であるか、是に對して

史家は種々の見解を下してゐるのであるが、我々は次のやうに答へることが出來る。即ち「個性の自覺又は人格尊嚴の意識是である」と。

フランス革命の三標語たる自由と平等と友愛とは明かに人格の意識に外ならない。自由は人格の實質的方面であり平等は人格の形式的方面であり、友愛は其の社會的方面である。

自由は固より自我人格發展の自由で、人格の向上と其の活躍とに對しては毫も外部からの拘束を許さないといふことで決して我が儘勝手を意味するものではない。人格は各々理想を追ふて自己決定的に進展すべきものである。其の當然の結果として人格に實質的差異を生ずる。そこに人格の獨自無双性があり、個性の意義がある。カント曰く「すべて人格は目的として取扱ふべく手段として取扱ふ勿れ」と。人格がそれ自身目的となる時、その人格は完全に自由であるが、人格が他の手段となる時、全く其の自由を失ふものである。故にカントの至言は人格の自由進展を意味するものと云ふことが出來る。

次に平等は人格を形式的方面から見たところである。即ち人格を形式的方面から眺めると差別はない。地位の高下も知能の差異もそこには撤廢せられて同じく人格としては對等であり、互に尊いものである。隨つて人生は各々自己の人格を尊重すると同時に他人の人格を尊重せねばならない。

最後に友愛は人格の社會的方面を意味する。友愛は人と人とを結合し、互に相倚り相助け互に人格の向上を圖りつゝ文化の惠澤を共にせんとする最も麗はしい感情である。人にこの友愛の情がなかつたならば人生は實に殺風景なもので生き甲斐がなく、結局人間生活の破綻を免れ得ないであらう。

佛國革命は實に斯うした人格價値意識に依つて呼起されたのである。ルーテルの自由も、ルソーの天賦人權も畢竟個性の自覺又は人格價値の意識に外ならない。

（四）現代社會の二大對照

荒み切つた現代社會の狀態！　一方に於ては少數者が巨萬の富を積み特權を領有して衣食住乃至閑居逸樂等の生活全面に亘つて贅澤の限りを盡してゐるかと思ふと、他方に於ては終日額に汗して働いても妻子眷族を養ふことが出來ぬばかりでなく、全國を通算すると百二十萬以上の失業者があり、更に農民や小商工業者や、其の他貧民の多數者があつて、何れも餓死線上に彷徨しつゝある狀態である。そこには飢寒に泣くプロ階級と飽食暖衣遊興三昧、物的慾望と劣情とを滿してゐるブル階級とがある。此の上下貧富の懸隔が餘りに甚だしいのは社會生活をして不健全に導き、人心の不安と動搖とを馴致し、思想惡化を招來することゝなる。即ち物質的に惠まれない者、志を成し遂げ得ない者虐げられる人々は絶えず不平不滿であり、自我日常の悲慘な實生活に即して危險思想を醞釀してゐる。彼の外來思想は自我の內奥に痛ましい體驗を持たない限り、假令一時之に惑れるやうなことがあつても其の非を悟る場合に於て日本人は日本人らしく過去幾千年の歷史的生命を有つ日本精神に轉向し復歸するに違ひない。併しながら自らの苦しい體驗！　悲痛な境遇！有產階級の道德的缺陷と社會的害惡とに依つて冷酷無慈悲な壓迫を受けつゝある最大多數の落伍者に取つては事實上世の爲とか人の爲とか云つてゐる餘裕がないばかりでなく、結局世を呪ひ人を咎め所謂捨鉢の

狀態となつて破壞的傾向を帶び險惡なる思想を懷抱するやうになるのである。

次に權力の方面から社會の對立關係を考察すると支配階級と被支配階級とに大別することが出來る。彼の特權階級とか財閥とか、政黨等は支配階級に屬し、一般民衆は被支配階級に屬する。之を勤情の方面から見ると、前者は概ね有閑階級に屬し、後者は勤勞階級に屬する。無論是は大體上の別け方であつて決定的のものではない。隨つて支配階級の中にも淸廉潔白な人格者があるとか、無產階級の中にも勤勞を厭ひ自ら陰慘な境遇を招來した者があるのは言ふまでもないが、一般に上流社會特權階級に於て安逸に流れ、贅澤に耽り、權力を亂用して綱紀を紊り、自己乃至自黨の爲には一切を犧牲にして省る所を知らず、國家百年の計を誤つてゐることは、之を例證する場合に於て其の餘りに多いことに一驚を喫せざるを得ない程である。

今日當路者に於ても農村救濟とか、失業者救濟とかを云爲するが、救はるべき者は是等の農民のみであらうか？固より是等の人々は物質的に悲慘な境涯にあるから、此の方面よりの救濟を必要とするのであるが、有產者や特權階級に屬する人々は果して物質的に惠まれぬ慘めな人々に對して眞に救濟の實行に力を盡しつゝあるかどうか。又ブルジョア階級や權力階級者自身に於ても救はれねばならない所はないか？ 彼等を人間の本質から考察した場合に於て、貧者や失業者よりも一層精神的に飢えてゐるのではなからうかと思はれる。彼等は客觀的物質的地位的に惠まれてゐるが故に、自己の魂を視凝める機會もなく、隨つて眞我に目覺めることもなく、利慾情慾の赴くまゝに奔弄され、其の奴隸となつてゐる所はないか、彼等は人間本來の純な魂までも肉的享樂の爲に蠶まれてゐるのではないか。彼等の病毒

は既に膏肓に入つて居り、最早取返しの附かぬ所まで昂進して居る。それにも係はらず彼等は得意の鼻を蠢めかして此の世をば我が物顏に振舞つてゐるのである。

世の所謂有福者に於ては本人自身その幸福を意識してゐるであらうか。又眞の幸福がどんなものであるかを認識してゐるだらうか、唯肉感の躍るがまゝに亂痴氣騷ぎをやつてゐることが果して眞の幸福だらうか。彼等は眞の幸福が何物であるかをも視詰めることなく、唯徒に利慾や權力の爲に酷使されつゝ血みどろの生活を續け、其の遣る瀨なき苦しみを酒と女で胡麻化してゐるのではないか。斯うして彼等は身も魂も傷づけつゝ日に日に精神的に飢えて行くのである。

斯の如く純な魂を害ひ、精神的に飢えつゝある有產者と――それは無論全部ではないが――物質的には飢えながらも實生活と戰ひつゝ自我の魂を視凝め、人間そのものゝ本質に生きんとする淸貧者と何れが幸福であり、又何れが先に救はれねばならないものであらうか？ 自分は先づ物的有福者兼精神的餓鬼を救ひ、彼等をして凡ゆる對立や差別を超越した皇道の精神に甦らせ、其の財貨に對する執着の念を去らしめると同時に同胞愛人類愛に目覺めしめ、然る後物質的貧者を彼等自身の手に依つて救ふやうに仕向けねばならないと思ふ。

（五） 思想善導の重要性

現時に於ける經濟的破綻は愈が上にも危險思想を煽りつゝある。一方に於ては危險性を帶んだ外來思想の再燃となり他方に於ては生活苦に喘ぐ現代人の荒み切つた心的狀態に卽して思想日に險惡に趣く傾向があるのは事實である。

今日國家主義の勃興と當路者の思想取締が嚴重な爲、共產主義的傾向は稍々下火となつたと云ふけれども、其の嚴重な彈壓下に尙ほ潛行運動を續けるとか、政黨・財閥・特權階級連の道德的低能に憤慨する右傾團が愈々擡頭し來り國內淨化を絕叫するとか、又財閥や旣成政黨等は自分達の支配慾や權力意志を滿足せしめるため現狀維持を意圖し、新思想の一切——殊に社會革新意見までも悉く危險視するとか、各々自己の立場を異にすることに依つて勝手な主義を宣傳することゝなつてゐるから、素朴なそして批評眼なき國民をして取捨去就に迷はしめるばかりでなく、凡てを驅りて將に其の渦中に投ぜんとしてゐるのである。かるが故に我々は思想善導の必要を痛感せざるを得ない。現下の狀勢にあつては思想善導は急務中の急務である。隨つて我々は現時に於ける不安・動搖・混亂の狀態にある思想傾向を根本的に研究して之を比較し、解剖し、批判し、取捨選擇して其の核心を摑み、更に我が皇道の精神に依つて總合統一し茲に最も中正嚴肅な合理的思想を樹立し、以て國家を富嶽の安きに置き各自をして一歩たりとも人生の行路を踏み誤らしめないやうにせねばならない。

(十八) 我が皇道は革命を許さず

我々は曩に現代思想の根本動機が、個性の自覺、人格價値意識にあることを突き止めた。隨つて其の根本動機に就いては「尤も」であると首肯せざるを得ない。革命の根本動機が如何に麗はしいものであつたにせよ、革命そのものゝ本質として極端に流れ、過激に趨り、無辜の民を殺傷し、血腥き風を吹かせ、此の世ながらの生地獄を現出せしめることは我々の絕對に取ることの出來ない手段である。フランス革命の根本動機に就いても眞實總べての者がそこに目

覺めてゐたといふ譯ではない。大多數の者は唯盲目的に附和雷同者となつて虐殺を敢行し革命黨の萬歲を叫ぶに過ぎなかつた。而も革命後の佛國人民政府ロベスピエル一派の恐怖政治は實に暴虐極まる遣り方であつた。何の罪咎もない貴族を片ッ端から斷頭臺に送つたのは寧ろ狂氣の沙汰であつた。目に一丁字のない文盲の徒ならば兎に角として、身苟くも主腦の地位に立ち統治の任を帶びながら群衆心理に驅られて暴虐の限りを盡すといふことは亂心か發狂か我々は批評する言葉さへ持合せてゐないのである。之に依つて觀るも上下共に未だ自我にも目覺めねば人格意識にも徹してゐなかつたのは明白である。

最近資本主義を全廢してマルクス派社會主義の實驗を試みた露西亞の革命はどうであつたか？　大正六年ロシア革命に依つて殺傷された露國民の數は無慮六百萬人、革命後の恐怖政治に依つて銃殺された者は百七十萬人、其の後の大飢饉に遭遇して餓死する者七百三十萬人を加ふる時は總計一千五百萬人が革命の犧牲となつた譯である。實に戰慄すべき大暴虐ではないか。現に露國に於ては一億五千萬人の人間が新特權階級たる六十萬の低級無知な勞働者の支配を受け其の極端な專制政治の下に呻吟してゐる狀態である。我が國に於て無產階級の專制政治に共鳴するマルクス主義禮讚者は宜しく勞農露西亞の現狀を正視するが良い。

東洋に於ける儒敎は古來道德敎育上に多大の貢獻をなしたのは事實であるが、孟子の所謂易世革命の思想のみは我が國には當篏らない。否我が國に於ては斷じて易世革命を許さないのだ！

「革命は常に過激に走る」とは獨逸の詩聖ゲーテの喝破した所である。革命思想は我が皇道精神並に國體觀念と氷

炭相容れない。皇道の精神乃至國體意識は我が國民の生命であり魂である。之を取去れば最早日本人ではあり得ないのだ！　隨つて革命思想を懷く者は根本的に日本人たるの特質と資格とを缺如してゐる者と云はざるを得ない。心氣一轉の精神的革命はあるにしても國家組織の根本的革命は我が國に於ては歴史あつて以來未だ曾て無いのである。尙ほ未來永遠に亘つて我が國に於ける國家的革命はあり得ないと信ずる。

（七）　マルクシズムは我が皇道の精神と相容れず

我が國に於ても從來日本共産黨なる者があつてマルクシズムを遵奉してゐたのであるが、彼等は祖國日本を忘れてゐるばかりでなく、其の祖國に弓を引く大反逆者である。マルクス主義は唯物的であつて人と人との關係を搾取關係と見、階級鬪爭を煽り、無産階級の獨裁政治を叫び、凡ゆる傳統及び歴史を否定する等、我が皇道の精神とは全く相背反する思想であり、我が國體觀念とは全然相容れない思想である。苟くも日本人であり日本精神の持主であるならば、マルクス主義に惑れる筈がなく又革命思想を謳歌する道理もない。それにも係はらず、日本國民でありながら、中には共産黨員となつて容易に轉向しないと云ふことは何たる心得違ひであらうか？彼等は第一皇道の精神に目覺めないからである。それに我が國民性の缺陷として舶來品を尊ぶ傾向があり、マルクス主義も一種の舶來思想なるが故にそれを有難がるとか、又頭の良い學生は必ず一度はマルクス思想に惑れると云つたやうな妙な虚榮心からマルクス主義者を以て自ら任じ、共産黨員となることを名譽とするやうになるからでもある。彼等はコミユンテルンにでもなつて置けば從來に於ける我が國家を破壞し、新國家を建設したる曉に於ては功勞に依つて大臣位を得られるものと信じ、峻烈なる彈壓の下にありながら潛行運動を續けてゐるのである。若し我が國が共産黨獨裁の世の中となつたら果してどうであらう？その場合に於て無産階級や勞働者階級は支配階級の位置を占めて横暴の限りを盡し、先づ貴族階級やブル階級を手始めとして大虐殺を行ひ、次に知識階級に及び、資財は悉く之を沒收して彼等の手に收め、世を擧げて修羅の巷と化し、玆に過去三千年來の麗はしい歴史を有する神國日本は其の終りを告げ、そして獰猛な恐怖政治が行はれることゝなるに違ひない。

我が國は何と云つても萬世一系の天皇政治でなければ治まりが附かない。人民の中から選び上げた大統領の類はどうしても我が國には當嵌らないばかりでなく、それでは三千年來鍛へに鍊へた日本魂が承知せぬ。即ち日本臣民たる者は飽くまでも皇道の精神に則つて忠節を盡し皇威を世界に顯揚するを以て其の任とするのである。

（八）　思想對策（その一）

以上數項に亘つて論じたやうに、現時の混亂狀態にある思想と之に伴ふ危險とを憂へ、殊に左右兩翼の激越なる思想を矯正する必要あるに依り、政府に於ても思想對策協議會を設けて考究中であつたが、昭和八年七月十三日首相官邸に於て協議會を開き種々審議を重ねた結果、思想對策見地よりの教育に關する方策（教育の制度に關する方策及び教育の機構乃至思想方面に關する教授講師は圓熟した人を以て之に充てること等）を決定した。依つて翌十四日の閣議に堀切書記官長より此の成案を中間的に報告、各閣僚の諒解を求めることゝなつた。右思想對策としての一部面たる教育に關する方策は、日本精神の徹底、德育、人格教育の振作が根本精神であつて、此の趣旨に則つて行はんとす

る教育改善の內容は次の如きものである。

一、不穩思想抱懷の教職員は上は大學から下は小學校に至るまで教職員を徹底的に掃滅すること、

一、不穩思想抱懷のものは教職員として絶對に選任せざること、

一、教育の實際化を圖ること、

一、教育の機會を均等ならしむること、

一、師範教育の改善を圖ること、

一、高等教育の改善を圖ること、

一、教育の社會政策的施設を爲すこと、

一、中等教育の改善を圖ること、

一、初等教育の改善を圖ること、

一、社會教育の振興を圖ること、

一、宗教家の覺醒奮起を促すこと、

此の思想對策としての教育改善案は無論項目だけに止まつてゐる。其の內容に關しては他日具體的に發表せられるであらうが、吾人も亦其の根本方針としての日本精神の徹底、人格教育振興に關しては參同の意を表するのみならず既に本稿に於て力說したところである。

(九) 思想對策 (その二)

全國民を一人の例外もなく生活の保證をしてやるとか、一般に不平不滿を抱かせぬやうにするとか、或は各自の社會的意義を了得せしめるとか、或は各々の志を遂ぐることの出來るやう機會均等を與へてやると、人心をして倦ましめることがなく、各々生を樂しむことゝなるから、危險思想を醞釀するの機會も與へられないし、外來思想にも惑はされぬやうになるのであるが、今日の社會は餘りに缺陷が多く、各々利己主義に陷つて居り、官公職にある人や、人の師表となるべき人までが私腹を肥すことにのみ沒頭して居るから、上の好む所下之より甚だしきもので、人皆は愈々利己的となり、益々腐敗墮落するのみである。

然るに此の社會は、さうした利己主義や、腐敗墮落や、眦み合ひや、排擠や、情實や、獨斷や、自暴自棄や、頽敗的氣分や、善人の敗訴や、惡人の勝利等に依つて搔き亂される。即ち社會の缺陷は人間の排他的感情や、偏狹な知識や、附和雷同や、階級鬪爭や、富の偏在や、欲望の衝突や、對立的行動等に依つて生ずる。此の社會的缺陷を何とかしてより善くしようとするのが諸種の社會思想である。社會主義であれ、愛國思想であれ、皇道及び王道主義であれファッシズムであれ、何れも此の社會乃至人類生活を改造せんとする一種の想定に過ぎない。

そこで我々は一面に於て社會そのもの及び各種の社會改造思想なるものを比較研究するの必要があり、他方に於ては自己の規範意識に依つて各種の思想を批判し統制する所がなければならない。此の意味に於ては世の所謂社會運動者も一般人も大いに自己自身の立場及び自己と社會との關係、自己の此の世に生を享けたる理由、自己の天職乃至自

己生存の價値等を考へ、徒に外來思想に惑はされることなく、他人の糟粕のみを嘗むることがないばかりでなく、諸種の害毒を流すが如き危險思想を掃蕩することに努め、それと同時に嚴乎たる自己の規範意識・自己の指導原理卽ち自己の信念に準據する所がなければならぬ。徒にマルクスがどうの、ファッショが斯うのと云つて自己の立場を捨て他の擒となるか或は浮草のやうに右に左に、東に西に變轉するやうでは自己生存の意義何れにあるかを疑はざるを得ないことゝなるではないか。斯うした自覺を國民の總べてに與へることが爲政者の執るべき思想對策の優越せる一方途であらねばならない。

（一〇）思想對策（その三）

更に思想對策の一手段として官民の接近と其の融合とを力說したい。日本に於ける今日までの一般的傾向のやうに官尊民卑であつたり、官僚風を吹かせたり、それに對して阿附追隨者が續出したりしては永久に本當の官民合同は出來ない。無官の大夫乃至浪人——休職者や退官をも含む——は如何に高潔な人格者であつてもそれを尊重しないのみか、民間から如何に有價値な獻策をしても一向取り上げもしなければ又面會を求めても逢つてさへやらない。それに加へて一般民衆が如何にも功利的利己的に飼ひ馴されてゐる。隨つて野にある者が如何に最善と信ずる國策を大聲疾呼して見た所で一向反響は無いが、相當の地位にある人や、勢力ある者が下らぬことを言つても、有難がつて拜聽する。事大思想に捕はれてゐる人間には附けてやるべき藥さへないのだ！　それを官途に衣食する人、卽ち現職者は良いことにして自己の追隨者のみを求めてゐる。他日自らが辭職の曉に於て、是等の追隨者は早速掌を返すやうに裏切者となることには氣附かないであらう。現在的、一時的、表面的、利己的人間が多數を占めてゐるから、都合のよい時にのみペコペコと頭を下げて媚び諂へば、得意の鼻を蠢めかしてゐるのが、今日の官職者であり、地位を得てゐる人達の動向である。今日は唯上官の鬚の埃を拂ひ、御機嫌さへ取つて居れば職を失ふ恐れもなければ飯の喰ひ外しもないのである。御無理御尤も唯々諾々と頭を縱に振ることのみが下の上に仕へる唯一特定の道である。隨つて上役がどんな惡事を働いても其の面を犯して諫止すること等は大禁物とせられてゐる。是が下役たる者の遵守すべき法則である。無論自分にどんな名案があらうとも、又如何に革新の必要を直感してゐても、上役の好まざることを口にしたら早速白眼視せられることゝなり、何か小さな問題でも惹起さうものなら、直樣誡にされるのである。

併しながら是では上役と下役との融合も出來ねば官民の合同も出來るものでない。其の間に深い溝が出來、障壁が設けられて互に嫉視反目、憎惡怨恨となつて思想の惡化を劇致することゝなるのみである。

思想對策協議會にせよ、國策樹立にせよ、教育調査會にせよ、其の他國際文化、外交問題等に關する諸種の會合にせよ、官民合作に依つて其の完成を期せねばならない。然るに我が國に於てこれまで官民共同の營利的でない奉仕的事業を如實に仕上げた何物があるか、我が國家其のものが官民合作だと云ふかも知れない。又見方に依つてはそれに違ひない。だが國民は自覺的且つ自發的に官民合作をやりつゝあるかどうか。各種の國家的會合に於て民間に於ける國士或は志士を參加せしめたことがあるか、政府に於ては隱れた志士、而も君國を思ふ至情に燃ゆる國士を見出して其の志す所を遂げしめねばならない。無論國家を支持し、心から其の發展を意圖する者は役人ではなくて天下の志士で

ある。

古來天下の志士として我人共に許してゐる人物は極めて少數者であつた。志士は固より其の志す所遠大であり、國情民意に精通し、先見の明があり、粉骨粹身君國の爲に殉ずるの概があり、人民を塗炭の苦より救はんとするの至情に燃え、意志飽くまで强固なるが故に多數者を感激せしめ、民衆を指導鞭韃し、君國を富嶽の安きに置くことが出來たのである。

何時の世にも大多數者はロボットであり、員に備はるのみであつた。今日は學問が進んだと云ふけれども、多くは理窟屋となり、口巧者となり多血質的神經質的人物のみ輩出し、意志の强固な澹汁質的の人物に乏しく、眞に指導者の位置に立ち身を以て率ゐる底の人物は極めて尠い。尤も名義上の指導者、俸給取りのお役目的愛國者は多いけれども、眞に身を捨て名を捨て自我を沒して只管君國の爲に盡す底の誠忠者、餓死線上にある民衆を救ふ爲に一身を犧牲にする程の志士、皇國の隆昌と國民の幸福の爲に奮進する愛國の士が果して幾人あるか、それは實に寥々たること曉の星よりも尙ほ淡いのである。官民合同の實を擧げんとならば、民間から隱れた學者や、志士を選び出して國家的國際的各種の會合に參加せしめ其の意見を徵し其の信念を吐露せしめる所がなければならぬ。而してそれを國政上の參考に資するのみならず、時に應じて彼等を直接國政上に參加せしめるの方途を構ぜねばならぬ——今の代議士撰出は國士を撰出する方法ではない——さうすると志あるの士は國家の前途に至大の關心を持ち、國家統制・國際關係、產業革新、思想解決、非常時突破等の諸問題に對しても相當の獻策をなすことゝなり、延ゐて國運の進展に一大光明を投

け國民思想の統一の如き自らにして解決することゝもなるのである。

（一一）思想對策（その四）

次には上層階級に屬する人々の道德的反省と自覺とである。兎角是等の人達は自己反省が足らず、人生を視詰めず、自己教育を怠つて居る嫌ひがある。殊に是等の人々の中には道德意識の不明瞭な人が多く、又道德的意志の薄弱な人も少くない。それは餘りに有福な家庭に人と爲り、幼少時から蝶よ花よと何不自由なく育てられた結果、國民の全生活、特に下層階級に通ぜないからでもある。

彼等をして下層階級に通ぜしめる爲にはどうすればよいか、それには先づ貧民窟のドン底生活を體驗せしめ其の同情心を呼び覺すことである。襤褸を身に纏ひ、南京蟲に喰はれて見ぬと細民に對する同情の念も起らない、少くとも彼等自身自發的に貧民の生活を視察し研究して其の慘めな狀態に對し、哀憐同情の念を喚起し、自己の贅澤遊興私行等を禁止し、積極的に之を救濟せんとするの道德意志を働かせるやうにせねばならない。

然るに上流の家庭では子供の時から多くの人に持てはやされ、贅澤・遊興等のみ見習つてゐるから、我儘が多く、同情の念も哀憐の情も養はれて居らず、人を驅り使ふことは覺えてゐるけれども、人に使はれたことがないから、使はれて居る者の心持を察することが出來ない。學校に通ふ場合に於ても一々自動車で送り迎へされるのだから身體を鍊る機會も乏しく隨つて心身共に軟弱となるの嫌ひがある。そこに將來道德的觀念の缺乏及び道德的意志薄弱の人となるべき運命が約束附けられてゐるのではあるまいか。

遮莫上層階級の人々は自らを高しと自惚れてゐるのだから、他より教育をしようとした所で「何だ生意氣な」と撥附けられて了ふ。古來英傑の士は禮を厚うし辭を低うして高僧知識に物を聽くとか、安心立命の法を授かるとかしたものであるけれども、今日の支配者階級は徒に權威を弄するばかりで、篤學の士や、憂國の士に對し蔑視的態度さへ取つてゐる。隨つて他から彼等の蒙を啓いてやらうとした所で糠に釘程も利けないであらう。それ故彼等自身に全人格の修養を積むやう卽ち自己教育をなすやう仕向ける必要がある。若し貴族階級にして之をしも自ら怠るとすれば彼等自身墓穴を堀る者と言はざるを得ない。

上流社會の人々は、どうしても國政上相當の地位を占め、人の風上に立つて模範を示すとか、或は國政に參與することゝなるのであるが、それが爲には民を知らねばならない。民を知らないで國政に與るのは寧ろ危險である。今日の特權階級や政治家は果して幾人貧民窟の狀態を知つてゐるか、又下層階級に通じて下情上達の役目を果しつゝあるかどうか？　此の點に就いて爲政者は特に反省と考慮と適切な實施法とを構ぜねばならない。

（一二）思想對策（その五）

我等は他人の指圖や命令等を待たないで、自分の生活を律し、その仕事を處理して行くことを以て一個の人格者としての特權と心得て居る。自治とは廣く斯うした自律的生活を指すのであるが、それは個人の生活ばかりでなく社會團體の生活に於ても又必要なことである。ところが一般社會の實狀を凝視し考察すると、概ね個人主義的立場に立つて自己一身の利害關係を中心として動いてゐる嫌ひがある。又社會には各種の團體や黨派などがあつて各々自己の團體や黨派の爲には諸種の規定を設けて其の基礎を固め、各々自治の法を構じ其の發展を意圖してゐるが、他の團體や黨派とは相對立し嫉視反目して、互に勢力爭ひをしてゐるところがある。卽ち彼等は自治と云ふことを理解しないのか、或は之を極めて狹義に解してゐるのか、自己一身上若しくば自己の屬する團體に對して忠實であれば、それ以外はどうでもよいと云つたやうな廣く一般社會に對する共同の精神を忘れてゐるやうな狀態である。これでは到底自治の本旨を完うすることは出來ない。自治の本旨を完うせんと欲せば先づ自治の精神を十分に會得せねばならない。

自治精神の特質を擧げると、（一）獨立自營の精神、（二）公共的精神、（三）協調的精神、（四）責任觀念等である。世には往々にして獨立自營の精神と協同的精神とを以て互に矛盾するものゝやうに考へる人もあるが、それは大きな誤りである。自立自營善く自己の運命を開拓する者にして始めて社會公共の爲に盡すことが出來、社會協同の精神を發揮する人にして始めて眞に一個の獨立した人格者たる資格が具はるのである。彼の自分さへ衣食住の實生活が出來れば、他はどうでもよいと考へるやうな公共心の缺除した人間は孤立的存在であつて社會的意義を持つ人ではない。社會的價値を持たぬ人間ならば人格的存在と云ふことは出來ぬ。それは人格そのものが一個の社會的存在であり、社會的要素は人格に缺ぐことの出來ぬ重要な特質の一つだからである。此の人格者同士が社會の一員としてそれ〴〵社會的生活を續けて行く爲には互に人格を尊重し合ひ、各々其の人格の特質を發揮すると同時に各自社會連帶の責任を自覺して公共事務を處理して行かねばならない。斯うして各自が其の本分を盡し責務を全うして行くことに努めたならば、地方自治も、國家社會もより進展するに違ひない。今日農村の疲弊と云ひ、市民の窮乏といひ、經濟機構の破綻といい

ひ、政界の腐敗と云ひ、一面此の自治の精神乃至自律的精神の缺陷に基くものではないか？　更に又此の自治精神の缺乏は民育の不徹底に源を發するものではあるまいか？

茲に民育とは全國民の社會的國家公民的の教養を指す、即ち貴賤貧富老幼男女の區別なく普遍的に行ふ國民的知德體の教育乃至自治訓練の一切を指して云ふのである。斯うした意味の民育に依つて全國民を覺醒せしめ以て思想の動搖を未然に防止するといふ點に於て、今日缺ぐる所はないか？　須らく識者の反省を促す次第である。

（一三）思想對策（その六）

爲政者は思想對策として國家社會全機構の改善に對し、より積極的な方法を運らさねばならない。即ち政治や、教育や、經濟機構等を更新するとか、農村や小商工業者や就職難等を救濟し緩和するとか、外交を一等國らしく自主的にやつて除けるとか、內治に遺憾なきを期するとか、自ら皇道の精神を發揮して模範を示すとか、絕えず民心を新にするとか、趣味津々と湧く文化創造の世界を醸成するとか云ふやうな、より積極的方法を爲政者乃至當路者に於ては眞劍に考究し實施することに依つて危險思想の生れる餘地及び破壞思想を受け容れる餘裕がないやうにせねばならない。

今日まで危險思想を彈壓するにはどうすればよいかとか、右傾或は左傾思想に伴ふ直接行動を如何に取締るべきかとの消極的方法にのみ沒頭して、如何に彼等をして自ら進んで道理に遵ひ正善を行はしむべきかといふ積極的方法に就いては餘り考へてゐなかつた。思想犯罪者が出て來た場合にのみ、騷ぎ立てゝ之を逮捕するとか、載くとか、取締

るとか、防止法を構ずるとか云ふことにのみ力瘤を入れて其の思想惡化の原因を根本的に取除くといふことには餘り注意を向けなかつた。現代に於ける諸種の社會的缺陷を此の儘にして置いたならば、外部的に如何に取締りを嚴重にしても次々に危險思想が生れて來るのは識者を俟たずして明白である。徒に結果のみを見て之を彈壓するとか取締るとかしたところで何時まで經つても同じことを操り返すばかりで、之を根絕することは出來ない。愈々危險思想を振廻す人が出て來たら、之を檢擧するとか監禁處罰することも必要であるが、それよりももつと積極的に國民各自の純な魂を發揮させるやうにせねばならぬ。此の世をより住みよいやうにし、穢土を淨土に化し、利己的な爭鬪の世界より共存共榮の樂國へ移らしめるやう、其の責任者たる爲政者に於て誠心誠意盡力するやうにせねばならない。

（一四）思想對策（その七）

我が國民性の缺陷として捉れるとか、溺れるとか、惑はされるとか、騙されるとか、云ふやうな、隨つて受身的で被支配者となるやうな他の追隨者模倣者を以て甘んずるやうな所が多分に存在する。それは一面正直なるが故に他人を善人と信じて疑はない所から生ずるのであるけれども、斯くては結局馬鹿正直の譏を免れない。又一方に於ては其の溺れるとか、捉はれるとか云ふことは、他に對する熱心さを表はすもので所謂沒我の境に入る者であり、そこに眞劍味が親はれ、軈ては對象物を自家藥籠中のものとなして自我を豐富にして偉大にするの道程であるとも言へる。だが受動は畢竟受動に終り、模倣は終生模倣のみに止まるやうなことがあつたならば、自己を滅却する所以となつて了ふ。詰り受動や模倣や沒入等は悉く自我を如實に表はす一過程としてのみ意義を有つ、自我を眞實に生かさんが爲に

は固より取込む働とか、模倣運動とか、對象の中へ自我を沒入するとか云ふことも必要であるが、それは或る期間に限られてゐることで何時までも然るべきものではない。卽ち最後の統制者は自我である。自已其のものを太らせる爲に見聞を廣め對象を取込んで行くのである。彼の赤化するとか拜米思想に流れるとか云ふやうな者は——それが單なる一時的現象であるならば兎に角として若し永久性を帶んで來ると——自已を他國の奴隸となし、其の延長たらしめつゝあるのだ！

近頃左傾思想家が轉向するのは漸く自我の魂に目覺めかけた者と見るべきである。非を非とし、過を過とするのはよい。そして新な自我を見出し、そこより眞實な歩みを踏み出すことにせねばならない。而して我々日本人の有つべき新な自我、純粹我、理想我、普通我とは何か？　それは云ふまでもなく皇道の精神である。皇道の精神は我々の中心生命であり、規範意識であり、指導原理である。皇道精神を體得すれば、假令之を事細かに分析し說明することをしないでも、必要に應じて時々刻々當意卽妙的に自由に表現することが出來るのである。隨つて要は皇道精神を確實に把握する事だ！　もつと適切に言ひ表はすと、皇道的人格になり切ることだ！　皇道的人格とは皇道卽我、我卽皇道の域に體達した人を云ふのである。さうすると自已表現卽皇道の實行となつて少しも誤ることがない。我が國民が此處まで進むと最早どんな危險思想が國境を踰えて這入つて來ても、一々皇道精神に依つて取捨し統制して行くから少しも恐るゝに足らないのである。

（一五）思想對策（その八）

思想對策は一にして足らないけれども、之を要約すれば（一）國民の全般に亘つて思想そのもの及び思想生活の本義を知らしめること、（二）皇道の精神乃至國體觀念を明かにし之を以て全國民の中心生命たらしめること、（三）國民思想の統一を圖ること——皇道の精神を中心として國民思想を統一すれば如何なる外來思想を輸入しても敢て憂ふるに足らず——（四）國家に於て國民生活の安定を保障すること、（五）有產無產の對立を撤去するため兩者相互の讓歩と溫情主義とを發現せしめること、（六）社會の缺陷を補ひ罪障を消磨し、人心の不安を一掃すること、（七）人心——利慾情慾、權力慾等欲望中心の人心——を其の根柢より改めること、（八）都市村落の區別なく、各々それ相應に文化的施設をなし以て國民の高尙な趣味を養ふこと、（九）資本主義的經濟組織の革新を圖ること、（一〇）適材適所の人物經濟を計ること、（一一）學校教育家庭教育乃至社會教育を改善すること、（一二）全國民をして一人の例外もなく各々其の志を遂げしめるの方途を講ずること、（一三）皇恩、國恩、父母の恩等一切の恩義を感得せしめ、大いに皇基を振起すると共に我が國家をして世界の道德國たらしめること等を舉げることが出來る。之を貫くものは一の眞心である。誠心誠意互に奉仕的精神を發揮し各々其の生を完うすることに努めたならば社會、國家乃至世界人類の平和と幸福とは期せずして得られることゝなり、危險思想も自ら其の跡を絕つことゝなるに違ひないけれども、惜しいことには最大多數者が純眞至誠の理想我を發揮することを忘り、物慾に驅られ、情慾の滿足を求め、奴隸的根性に墮し、强食弱肉の動物世界へ逆轉し、自他共に人生の眞義を沒却し、其の生命を縮めつゝあるのは實に慷慨の至りである。

（一六）思想善導の極致

思想問題に就いては爲政者も教育家も政黨も財閥も多少腦漿を搾つてゐるやうだが、未だ其の核心に觸れてゐない。極右と極左とを取締るとか、個々人の言論や著述を取調べて思想上の色別けをするとか、或は彈壓、檢擧、監禁所罰等に依つて思想の惡化を防止しようとしてゐるが、それ等は思想犯罪に對する處理法で思想問題の根本的解決法ではない。又文部省では國民精神文化研究所等を設けて思想問題を取扱ひ、我が國民道德とか、日本精神とか、我が國の歷史教育・宗教とか、或は全般に亘る哲學とか云ふものを研究し、中等教員を選定して講習を開くとか、パンフレットを配付するとか、臨時講演會を催すとかして多少努力の見るべきものがあるけれども、概ね學理に趨り抽象に失して現在の政黨をどうするとか、特權階級を如何に覺醒せしめるとか、財閥を如何に指導するとか、民衆の全體を如何に導くとか、危險思想の因つて起る根柢を斷つとか云つたやうな實際問題には觸れてゐない。それに各種の學校に於て教育者が信念の籠らない中正穩健とやらの思想を教壇上から呼びかけた所で餘り利目のあるものではない。今日の所謂思想善導なるものは、成るべく現狀を維持し、出來得る限り地位あり權力ある人々の意を迎へ成るべく社會の缺陷等にも觸れないで、極めて穩やかな人間を作ることに腐心してゐる。而も斯うした穩やかな人間のみを以て社會を組織することにすれば、假令社會や國家の進步發展は望まれぬにしても先づ安全第一で問題は起らぬ。即ち姑息の平和は保てるといつたやうな遣り方である。

斯の如く旗幟不鮮明な、社會の缺陷に觸れることを恰も瘡物にでも觸るやうな心持でゐるとか、又は何事も世間並にして行けば間違ひはないと云つたやうな、所謂お人好しを作ることを思想善導位に考へてゐたら大なる誤りである。苟くも思想善導の任に當る者は眞劍であり徹底的でなければならぬ。上は王公貴族より下は匹夫下郎の輩に至るまで一人も餘さず思想善導の原理を把握せしめ、是に依つて自己乃至人間相互間の思想をより健全ならしめるやう努力せねばならない。

思想善導の原理とは何であるか、それは前にも屢々繰返したやうに我が皇道の精神である。我が國に於ける規範的思想は天皇中心の思想であり、一君萬民の信念であり、皇道の精神である。此の皇道の精神を措いて他に中正健全の思想はあり得ないのである。

身は指導者の任を帶びながら、無內容で抽象的な中正穩健の語を口にして、皇道の精神に言及しないのはどういふ譯か、皇道精神を確持して居らぬ者は眞の日本人ではない。日本精神の把握者でない者がどうして日本國民の思想善導が出來るか、而も全世界に於て我が皇道の精神に優る思想は斷じて無い。皇道の精神は日本國民を淨化し、非常時を救ひ、我が國家發展の原動力となるばかりでなく、人類永遠の平和と眞の幸福とを齎す所の原理である。我々は、此の日本國民乃至全人類の指導原理たる皇道の精神に依つて世界の凡ゆる思想を指導し統一せねばならない。「大義を世界に顯揚する」とか、「皇道を世界に布く」とか云ふことは、世界全人類の有つ凡ゆる思想を、皇道中心の日本思想に依つて統制し、彼我の差別を撤して普ねく人類の福祉に貢獻しようとする普遍的信念である。近き將來に於て事實上皇道を世界に布くことが出來たならば、人類の平和と幸福とは期せずして之を待つことが出來、思想善導の極致に到達して最早思想善導の要なきに至るであらう。

一〇　皇道と家庭教育

教育は家庭より出發する。姙婦の善き心掛と一家團欒の樂しい生活とが胎教となり、父母の濃かな愛情と注意深い躾とが家庭教育となる。

家庭教育とは家庭に於て行はれる教育で、狹い意味では特に小學校入學以前に行はれる家庭教育を指して云ふのである。家庭は兒童最初の教育所であり、又最も自然的な教育所である。家庭では男女老幼相合して自然の一小社會を成して居り、父の威嚴と母の愛情とは相待つて自ら兒童に種々の良い習慣を與へることが出來る。家庭教育も一般の教育と同じく知情意身體の各方面に亘るべきは勿論であるが、特に情意の陶冶は家庭教育の中心とすべき所である。

三つ子の魂百までと云つてゐるやうに極めて幼稚な時代に植付けられた精神內容は人間の一生を動かすに足るものがある。そこで家庭教育が全教育上極めて重要な位置を占めるのである。家庭に於ける父母の言行一切が直接子供に影響するものであり、家庭の狀態が子供に印象附けられることを思ふ時、而もそれが子供の心情を形成し、子供の將來を支配することを思ふ時、世の父母たるもの、どうして自己の言行を愼みて範を示すことに努め、其の環境を整理せずに居られやう。父母は實に子供の外部的良心であり、子供は父母の反映である。父母の躾如何が子供の將來、子供一生の計を決定するものたる以上、家庭教育に甚大の注意を拂ひ、模範に依る教育「目より入る教育」に重きを置き其の教育法を會得し自らの人格を以て率ゐつゝ、絕えず其の實踐に努めねばならない。

家庭に於ては同情、愛情、從順、感謝、克己、忍耐等の道德的習慣や、淸潔、運動、規律等の身體的習慣や、子供自身の生活に必要な知識や、環境に對する理解力及び將來の進展に必須な基本的知識を成るべく自然的に養つて置かねばならない。而して是等を一貫する所の原動力は健全な家庭的精神であり、方法上の第一原理は「自然的なれ」と云ふことである。

家庭的精神とは家庭の各員、殊に父母が家庭生活に對し强き興味と信念とを有し、家族の爲に獻身的に努力するの精神であり、自然的とは家族的精神に基き家庭の自然的感化に依る教育を云ふのである。子供の强い模倣性と感受性とを利用して周圍の感化影響により不知不識の間に良習慣を養ひ、適當な遊戲に依り自然に身體を練り、玩具を取扱ひ、自然に親しむ間に何時とはなしに事物に關する知識を與へ、他人との接觸交際に依り自然に言語を收得するように導くべきである。

子供の時から皇道の精神を知らせることは困難であるけれども、「子守歌」を改善するとか、玩具やお伽噺を改良するとか、建國神話を聞かせるとかして皇道精神を呼び覺すの方法を構ずるもよし、假令意味は分らぬにしても教育勅語を子供の將に眠らんとする時などに讀んで聞かせるのもよい。すると子供は何時の間にか暗誦してゐる。其の暗誦は子供の現在生活には餘り役立つものではないが、後に至つて其の意味を悟り、內容を附し、本人の中心生命となるから極めて有價値である。卽ち一つの暗誦が中心骨子となつて後には精神全體を支配することゝもなり、是に依つて總べてを統一することゝもなるのである。隨つて子供の時卽ち小學校入學以前に於て、教育勅語を暗誦せしめて置く

といふことは將來の日本人乃至日本精神を形作る上に於て極めて意義深いことである。

子供は無邪氣であり、天眞爛漫である。家庭教育に於ては其の天眞自然な嬰兒幼兒から育てゝ行くのであるから、そこには云ひ知れぬ面倒と周到な注意とを要するけれども、又極めて興味のある仕事である。家庭生活は全く利害を離れ社會生活に於ける慾得の境涯から遠退いて藝術の世界にでも遊んでゐるやうなものである。家庭は實に息詰るやうな社會生活の避難所であり安息所である。斯の如く家庭は人間に惠まれた唯一の樂園であり、藝術の世界であるがそこに育つ子供は更に藝術そのものである。子供達の云爲行動を默つて見守つてゐるだけでも、趣味津々と湧き起るのを覺えるのであるが、況して子供に對し種々教育的に働きかけつゝ其の印象とか、記憶とか、想像とか、德性とか凡ゆる心身の發達狀態を觀凝めてゐると、子供を導き乍らも亦子供から教へられる處が多い。教ふるは習ふの一端であり、導く中に導かれる所がある。そこに教と學との一致といふ眞理が發見される。斯うして家庭教育を施す中に新しい眞理を發見しつゝ進んで行くところに盡きせぬ愉悅が生れて來るのである。

家庭教育の任に當る父母は固より純眞な心の持主でなければならぬ。又父の嚴と、母の寛と兩者その宜しきを得ることに依り、家庭教育は其の全きを期することが出來るから、父母は同身一體となつて子供の教養に任ぜねばならないのであるが、父は概ね外に働くことゝなつてゐるから多くの場合に於て家庭教育の任は母たるものゝ重要な務となつてゐる。隨つて世の母たる者は自らが家庭教育の全責任を背負つてゐることを思ひ、子供の現在及び將來を察しつゝ至誠獻身的に我が子の指導訓練に當らねばならない。

然るに我が國では概ね學校教育にのみ重きを置いて、家庭教育の重要性を意識しない人が多かつた。無論稀には家庭教育を學校教育以上に重んじて子供の指導訓陶に當つてゐる人もあるけれども、それ等は極少數である。殊に中流以下の家庭では、子供が學校から歸ると「うるさい」とか「八釜しい」とか云つて厄介視してゐるのである。暑中休暇にでもなると、「早く學校が始まらねば子供がヤンチャして叶はぬ」などゝ云つて愚痴をこぼす程で、子供の教育は殆ど學校に任せ切りであり、又學校を以て厄介な子供の放逐場位に心得てゐる人がある。斯うした人達にどうして家庭教育の何たるものであるかゞ分らうか？　多少教養のある人で家庭教育に幾らかの理解を持つて居る人でも事實に於ては家庭教育を意識的に施して居らない人が多きを占めてゐる。

聖賢や偉人傑士等が概ね家庭教育、殊に母の教育其の宜しきを得た爲であるといふ事實は之を歴史に徵するも、現代の家庭教育の實際と其の子弟との關係を調査しても明かに之を察知することが出來る。而して聖賢や、偉人が此の世に多く出ると云ふことは、社會國家に取つて祝福すべきことであり、人類全體の進展を促進することゝなるから、母の人格的感化の如何は社會國家乃至全人類に至大の關係を有つと云はねばならない。然るに此の重大な責務を忘れて子供を厄介視するとか、或は有福な家庭に於ては、如何はしき家庭教師を傭ひ、子女の教養をそれに托して自らは社交界だの演藝會だのに浸つてゐる婦人も多く認めるのであるが、是等は全く母たるの任務を忘り、且つ自らの心身を害ひつゝある者と云ふべきである。それ故有產階級や上流社會から却つて不良少年少女を出すとか、或は左傾思想に趨る所の學生を出すとかするのである。青年子女の將來を誤るものは家庭の亂脉であり私行である。今日有閑婦人

の亂行は日に甚だしきものあるを認めるが、斯くては全く家庭の破壞であり神聖な家庭の冒瀆であつて實に慨嘆の至りである。

家庭に育ちつゝある子供は、將來社會人として國家人並に國際人として活動するの人である。隨つて唯優しい愛情同情のみでは眞の教育にはならない。時には愛の鞭も魂の鍛錬も必要である。中には子供の好き嫌ひに任せたり、我が儘勝手を振舞はせて顧る所がなく、而も之を以て子供のあるがまゝな姿を現させる爲であると理窟を附ける人もあるが、それは放任主義であり教育否定である。苟くも教育といふならば、そこに目的があり、具體的成案があつて意識的に行はれねばならない。其の目的達成の道程に於て障碍があるならば、それを突破して進まねばならぬし、子供が粗暴で教育を裏切るならば、それを禁止せねばならぬし、怠けるならば勸めるやう仕向けねばならぬし、幾ら言ひ聞かせても聽入れぬならば嚴格な態度で戒めもせねばならぬ。隨つて場合に依つては叱責もし、激勵もし、時々體罰さへ、加へることがある。それだのに子供が小學校の先生から叱られたとか、打たれたとか云つて泣いて歸つた場合、父兄が腹を立てゝ小學校に怒鳴り込んで行くやうでは到底眞の家庭教育が行はれないばかりか、累を學校教育にまで及ぼすものといふべきである。

教育には眞心を要する。隨つて眞心を込めて導かんとするに當り、それに反抗するとか教へを無視する場合、止むを得ず最後の手段として撻たねばならぬこともある。それを控えて居ると、却つて兒童の我が儘を增長せしめたり、慢心を起させたりして結局教育は行はれぬことゝもなるのだ！　無論叱責も加へず撻つことを要しないで唯々諾々、命是れ從ふと云ふやうであれば甚だ結構であるけれども、生きた人間だから中々さう簡單に行くものではない。又先生の德が高く且つ教育の方法其の宜しきを得て、諸種の消極的手段を加ふることなく、積極的に被教育者の心身を陶冶することが教育の理想であるが、一般の教育者にはそれが望まれさうにもない。故に一通り教育の目的及び教育法を會得して熱心に教育を施す所の教育者であるならば、多少子供に對して無理があるとしても、父兄に於て餘りにそれを詮議立てするが如きは、教育の眞意を了得せる者の爲すべき行爲ではない。

古は子弟の教育を師匠に賴む場合は「假令お手打になつても宜しうございますから十分のお躾けをお願ひいたします」と云つて師事せしめたものである。今日の家庭では子供を餘に甘やかしてゐる。子供の愛に溺れて其の心身を無下に弱めつゝある上流家庭に於て特に然りである。是れでは將來非常時日本を背負つて立つ人間を作ることも出來ねば國運の發展乃至人類文化の創造に參加する人間を養成することも出來ない。

我が國の全教育は皇道を中心とし皇道に依つて包括せらるべきものであるから、其の當然の歸結として家庭教育も亦皇道を中心として行はれねばならない。人は極めて幼稚な時代から適當に指導し教養して行かねば立派な人となることは出來ない。特に皇國の忠良な臣民たらしめんが爲には、皇道を本位として練磨教養せねばならない。而して皇道教育の徹底を期せんが爲には、どうしても教育の出發點たる家庭教育から皇道本位の教育を施すやうにせねばならない。

皇道の精神を家庭教育の中心生命たらしめんが爲には、先づ父母兄姉に於て神國日本の純粹精神を會得し、家族的

精神乃至自我の信念たらしめねばならぬ。

家庭に於て純眞の愛情、尊敬の念、神意隨順、親切と丁寧、奉仕と禮讓等、理論を超越し利害を抜きにした麗はしい家庭的精神を養ふことは驕て皇道の精神を體現する所以である。

子供は模倣心に富み環境に支配される所が多いから、絶えず其の周圍を整理して皇道の精神に一致せしめる所がなければならぬ。

それ故各家庭に於て國家の祝祭日には必ず國旗を掲揚して家族揃つて敬敎意と表するとか、或は敎育勅語を家族擧つて暗誦するとかして、皇道精神を呼び醒すことに努め、更に床の置物や掛軸や日用品や飲食物や子供の玩具に至るまで意を用ひて皇國日本精神に因緣を有するものを選ぶべく、而して日夜皇道精神中心の人格陶冶に向つて心血を濺がねばならない。

一一　皇道と學校敎育

由來敎育と云へば學校敎育を意味する程、學校敎育が重んぜられてゐる我が國のことであるから、學校敎育は一面普及し完備した所がある。けれどもそれは概ね表面的形式的のことで、其の內容實質の方面は差程充實してゐない。我が國の學校敎育は知識を世界に求めることは相當行つてゐるやうだけれども、大いに皇基を振起する方面は殆どお留守にしてゐる。如何に零細な知識を世界に求めた所で之を統一する根本信條がなく、皇國の進展に貢獻する所がな

かつたならば、それは恰も佛作つて魂を入れず、龍を描いて睛を點ぜないのと同樣、殆ど偶像を作るか、物言ふ機械を作るに過ぎない。如何に歐米より輸入した知的敎育を施して見た所で生きて働く日本人は作れない。

明治天皇の五箇條の御誓文中最後の條は、前項「知識ヲ世界ニ求メ」よりも後項「大ニ皇基ヲ振起スベシ」の方に重きを置くべきである。知識を世界に求めるのは大いに皇基を振起せしめんが爲である。卽ち大いに皇基を振起することは目的であつて知識を世界に求めることは其の目的達成の一手段に過ぎない。それにも係はらず、概ね前項のみを尊重して後項を忘却してゐる觀あるは甚だ遺憾である。

特に學校敎育が知識偏重の敎育に陷り、情意の訓練並に全人格陶冶を忽諸に附するが如きは大なる誤りである。それは人間の全生活に於ける枝葉と根幹とを履き違へた違り方であつて、眞の敎育ではあり得ない。

今日は分析することや、說明することや、顯微鏡下に觀察することだけは甚だ進んで來たけれども、其の根柢を築くとか、中心生命を攝むとか自我の本質を發揮するとか總べてを統合し大觀するとか、自己一生の大目的や大方針を決定して之を實現するとか、國家的國際的に生きるとか云ふ方面に缺ぐる所があつて志が立たず、方向が定まらず、常に內心動搖の狀態であり、隨つて右に左に、或は東に西にグラついて各々危險極まる歩き方をしてゐるやうなものである。

是れでは小理窟を並べるやうな人間や、多血質的な小才子を作ることは出來るであらうが、本當の膽ッ玉の据つた腕ッ節の强い、意志の堅固な、自己の目的を貫徹するとか、飽く迄皇道精神を發揮するとか云ふやうな膽汁質的人格

者を作ることは出來ない。

今日の學校教育は、下は小學教育より上は大學教育に至るまで冷たい知の人を作るか、立身出世の俗惡な人間を作るに止まつて血あり涙あり熱あり情ある純眞至誠、努力創造の人間を作ることを怠つてゐる。それは世の中が餘りに複雜になつて來たから、學校に於ても學科の數は殖えるし、教へる事項は多くなり、隨つて人間の本質的陶冶を忘れ枝葉の問題に沒頭し、教科書以外成るべく多くの知識を得せしめて科學萬能の世の中に順應せしめんとの念慮から、知識偏重の教育に墮したのでもあらうが、併し乍ら其の爲、最も大切な人格陶冶を忘れ、日本人たるの資格を與へることを忘れてしまつたことは甚だ遺憾である。彼の政談演說や、大學に於ける講義の場合でも、歐米人の名前を擧げ其の言葉を引用するとか、原語交りで饒舌り散すと、さも學者らしく考へられ、又文章の中にも外國人の名前を並べるとか、原語を挾むとかすれば、之を尊重して讀むと云つたやうな、徒に歐米憧れの人間のみ增加して我が國家を忘れ『我は日本人なり』との意識を失つて了つたやうな嫌ひがある。某大學生はハッキリと「我は日本人である」と自覺した時、自己の誤つた過去を省みつゝ次のやうに語つた。

「私はこれまで日本人であるか歐米人であるかハッキリした自我の意識がありませんでしたが、或機會に於て自己の魂を視凝めることを得て、やつと我は日本人である」との意識を明瞭にすることが出來ました。今まで學校に於て教へられたことが一として眞劍味がなく、修身科や法經科や倫理哲學講座等に至るまで、殆ど抽象的な——例へば『偉大な人格者たれ』とか、『勤勉力行せよ』とか『自力更生を圖れ』とか、『立憲自治とはこんなものだ』とか、『誰それ

の學說は斯うだ』とか云つたやうな——それは東洋人にでも歐米人にでも當嵌まるやうな一般的な指導說明のみで、生きた日本人の特質を發揮せしめるとか、過去三千年來鍛へに鍊へた日本魂に目覺めさせるやうな熱烈な主張を一度だつて聽かされたことがなく、隨つて自我に魂に觸れることが出來なかつたのは實に遺憾である」と述べ、更に「私は日本人であると云ふことを意識した瞬間！本當に愉快に堪えませんでした。是で始めて私は私のものであり、純粹な日本人であつて決して外國人でないことが判り、自己をシッカリ大地に植ゑ付けたやうな心持になりました。私はこゝから出發して眞に日本人として輝かしい生活を送ります。創造の世界へも理想の天地へも突き進んで見せます」と云ひ終つて朗らかな氣分と力ある態度とを見せてゐた。

今日の學校教育では斯うした自覺を與へることが出來ないのか？　弱い者としての代表者たる教育者には力强い教育を施すことは出來ぬであらう。だがさりとは實に情ないことではないか。如何に眠つてゐるやうな民衆でも日本人としての眞の自覺を與へれば力强く生きることが出來る。眞に日本人たるの根本意識に觸れたならば自我を表現することが其のまゝ皇道精神の發揮となつて、個人も社會國家もより善く進展することゝなるのである。而して一旦自我の本質たる皇道の精神に目覺めさせたならば、別に其の表現方法を指示しないまでも生きた人間であるから、幾らでも實行のプログラムは彼の頭腦から迸出するのである。

我が全國教育者にして、祖國愛の爲に總立となり、各々教育の權化となり、教育の爲には何時たりとも生命を投げ出すといふ程の元氣があり、自己の教育的信念を貫く爲には一身を犧牲にする覺悟を有し、以て我が皇道の精神を中

心とする眞の教育を實施したならば、恐らく我が國は普ねく世界を照すやうになるに違ひない。

從來の我が學校教育に於て改善を要すべき最根本的のものは何か？それは「小學教育から大學教育に至るまで皇道の精神を以て終始一貫すべし」といふ我が國教育の根本規範を設定することである。

然るに今日までの我が教育にはそれが缺けてゐた。成るべく現代の生活に應ずるやうな教育を施し種々の事項は巨細となく教へてゐるやうだけれども、人間の本質を把握せしめることや、根本的規範乃至指導原理を與へることに就いては殆ど顧みることがなく、そこに我が國教育の根本的な缺陷があつた。其の根本的缺陷を改めるにはどうしても右に掲げたやうな規範を定め、教育の出發點から其の到達點に至るまで、之を以て一貫するところがなければならない。我が國教育者にして此の最高規範を遵奉しない限り、教育の改善も思想の善導も、非常時の打開も、國家の隆昌も、民族の文化發展も、得て之を期することが出來ないのである。尤も小學校に於ては、忠君愛國や、敬神崇祖や、よき日本人たれと云ふことに重きを置いて教育する所があり、中等學校に於ても多少其の點に注意を拂つてゐるのであるが、高等專門學校以上になると其の點に力を注ぐことが或る特定の學校を除くの外、殆ど無い。有つてもそれは極めて稀である。甚だしきに至つては國家の四大節に儀式さへ行はない所がある。それ故高師や、私立大學や、帝大などから赤の教授や赤の學生を續出するのだ！　特に國家の最高學府たる帝國大學で、四大節の儀式を行はぬといふことは、一體どういふ譯か？　唯學問の蘊奥を究めるだけが能ではあるまい。——尤も今日の大學で學問の蘊奥を究めるなどゝ大きなことが言へるものではないが——人間を作ること、即ち皇道精神を自我の中心生命とする人格者を

作るのが教育の最高目的ではないか。

皇恩を忘れ、祖國を忘れ、自我の本質を忘れ、拜外思想に流れ、外國語を操つて得意になつて居るやうな人間を幾ら作つた所でそれが果して何の役に立つか。我が國民にして「我は日本人である」との意識を有たない人間が果して學問をした人と云はれるだらうか、此の點に關しては教授も學生も大いに反省し自覺するところがなければならない。

一二　皇道と社會教育

社會教育を廣義に解すると、諸種の社會的生活が個人の心身に對し、意識的に若しくば無意識的に及ぼす影響を總稱するものであり、狹義には一般民衆の教化を指して云ふのである。狹義の社會教育は家庭教育や學校教育と相對し普通教育を卒へた後、進んで高等教育を受け得ない者、即ち一般民衆に對し補習的に種々の教育を施すことに依り、學校教育の效果を維持せしめるとか、更に一層深い教化即ち高尚な人格の陶冶を以て其の目的とする。我が國で各市町村に於て青年訓練所を設け、青年の指導に任じてゐるのは狹義の社會教育の一部である。家庭教育は家族的精神を基礎とする自然的教育であり、學校教育は一定の課程と年限とに依り被教育者をして强いて學ばせるのであるが、社會教育では諸種の機關を具へ、被教育者をして能動的・自發的に自由に之を利用せしめる。即ち家庭教育は自然的であり、學校教育殊に普通教育は客觀的强制的の性質を帶ぶるものであるが、社會教育の精神は自由であり、自展的である。其の自發的であり、能動的であるといふ所に教育的原義が含まれてゐる。そこで家庭教育も學校教育も結局眞

の社會教育、卽ち社會教育施設としての凡ゆる機關を利用する自由的・自展的・能動的自己的教育にまで進まねばならない。――或る意味に於て世界の凡ゆる文化は悉く人間敎化乃至社會敎育の施設と見ることが出來る。何故なら人類の凡ては文化を味ひ、文化生活を營むことに依つて各々自我人格の修養を積むことが出來るからである。

社會教育も亦一般の教育と同じく身體・知識及び情意の各方面に亘つて行はるべきもので、是が機關としては第一身體の方面では公開運動場の施設を始めとして諸種の體育機關の設備を必要とし、殊に公開運動場に關する問題は各國共喧しく論ぜられてゐるばかりでなく、着々實施されつゝある。第二知識の方面で、社會教育上甚大な關係を有つてゐるのは新聞雜誌・著述等の刊行物で、之に次で利用すべきものは動物園・植物園・博物館・水族館・特に民衆教化の爲に設置された市民博物館・教育博物館・圖書館及び通俗講話會・講習會・大學の擴張等を擧げることが出來る。第三道德的方面では、消極的には演劇・寄席・活動寫眞等種々の娯樂機關を改善し、積極的には宗教々化の普及を圖り、自治訓練の方法を講じ、社會生活の道德化を促がし、時局批判演說會を催し、純美なる音樂を廣め、美術展覽會を開く等、道德と美と相俟つて進むことが必要である。凡そ民衆は理論よりも感情に依つて動くことが常である。隨つて道德的訓練に於ても特に感情の方面に注意しないと勞して效なきに終る場合が尠くない。併し乍ら感情の方面のみに心を注いで、知と意との方面をお留守にすることがあつてはならない。是れ人格が情のみに依つて出來てゐるのでなく、知情意の圓滿に調和されたものであり、殊に知と情とを統制する意志の修養が一層大切なものだからである。

社會教育を大別すると、前述の如く體育・知育・德育に別つことが出來るが、此の三方面を調和し統一する者は果し

て何か？　今日の教育は一面微に入り細を穿つてゐるが、それを總合し大觀することが閑却されてゐる。枝葉末節に關する知識の穿鑿には遺憾なき程であるが、さて其の根幹を忘れてゐるの嫌ひがある。解剖すること、分析することには妙を得てゐるが、根本的な中心生命を把握することが出來ない。然らば今日の缺陷ある社會教育施設を如何に改善すべきであるか。それには家庭教育や學校教育が皇道を中心に教育の改善を計るやうに社會教育に於ても同じく皇道精神に基いて是が改善を意圖せねばならない。

運動・競技・柔道・擊劍等各種の體育機關に於ても日本武士道を發揮するやうな、敬神崇祖の念を呼び覺すやうな施設をせねばならぬし、補習教育も、圖書館教育も、大學擴張も、講演會も、各種の長期並に短期講習も、皇道を中心として生きるの方途を指示するやうにせねばならぬ。殊に外國の思想文物を取り入れる場合に於ては之を直譯するとか受け容れるだけに止めないで、之を批判し消化し練成して自家藥籠中の物となさねばならない。自家藥籠中のものとなすとは結局皇道化するといふことである。世界一切の文化を取捨選擇して其の長を採り短を補ふと云ふことは畢竟皇道精神の內容を豐富にするに過ぎない。世界の凡ゆる文物は皇道の鏡に照らしてのみ其の本當の姿が見えるのだ！

曇りなき皇道の鏡！　明朗透徹の眞澄の鏡に照らして始めて人間の本然の姿が見えるのである。

人間が客觀界の色彩に眩惑されてゐる間、未だ自己に目覺める者ではない。外界に捕はれてゐる人間は單なる模倣の動物に過ぎない。

吾々が唯客觀的事物に動かされ、取り込むことにのみ汲々として何等之を練成し、表現し創造することがなければ無と同一である。然るに表現や創造には生みの苦しみが伴ふ。世には勞苦のないこと、我が儘勝手が働かれること、贅澤三昧に耽ることを以て幸福と考へる者もあるだらうが、それは却つて自らの魂を傷つけ自我そのものを滅却することゝなる。物質的に何不自由なき者の生涯——唯それだけで滿足してゐる者の生涯——は低能の生活である。それは徒に物慾の奴隷的生涯に終るだけであつて人生の意義と價値とを否定することゝなるのである。

人生の價値は苦惱に依つて生ずる。幸にして物質に惠まれた人と雖も精神的苦痛がある。貧乏人と雖も精神的快樂がある。富の所有者は物質的には快樂を得るが、精神的には貧しいから其の快樂は一小範圍に限られて居り、從つてそこには飽きが來る。嫌味かさす、果は厭世思想にまでなる。多くの侍女が側に居て御機嫌を取つても、寧ろ五月蠅い感じさへ起つて來る。山海の珍味も毎日續くと平凡になる。物質に對する吾人の關心は平凡化するを免れない。平凡化は驕て物質化である。存在——平凡化——自然物は人間生活の化石である。隨つて絶えざる創造のない所には眞の人生はない。

社會教育の主眼とする所は自律的人格の自由な發展である。隨つて各自の人格修養並に自己教育は其の要點である。自己教育とは自我を無限に進展せしめんとするの努力である。それ故そこには眞の人生があり創造生活が展開する。自發活動！　是れこそ我を我として生かすの道であり、是れなしには人生は無意義である。けれども一般人は之を忘れてゐるのではないか？　人皆右顧左眄徒に人の鼻息のみを窺ひ、人眞似のみで世渡りをしてゐるのではないか。

仕來り通りの慣習と人眞似——それで出來てゐると云はれるだらうか？　社會教育は他の模倣者たり追隨者たらしめるとか追隨者たらしめる者ではない。飽くまで各自を自發的に能動的に且つ自由に發展せしめることを主眼とするものである。自ら働きかけねば社會教育施設は無用の長物に終る。だが積極的に之を利用する時は家庭教育以上、學校教育以上效果の著しいものがある。

向後社會教育機關は愈々進展し完備するであらうが、要は其の活用に在る。直接社會教育の任に當る人は云ふに及ばず、各人各個自我人格修養の爲、絶えず之を利用することに努めたならば、其の效果は一層著しいものがあるに違ひない。

一三　皇道と軍隊教育

云ふまでもなく軍人は國家の干城であり、皇國民の典型である。苟くも軍隊教育を受けた者は迫がに身命を賭して國難に當るの覺悟を平時に於て鍛へてゐる。隨つて一朝國に事變あるに當つては一切の私人關係を抛つて國難に赴くのである。此の君のため國の爲には何時たりとも身命を抛つて働くといふ奉公的精神が卽ち皇道の精神であり、軍人精神であり、古今を貫く日本精神である。

現今利己と情慾とに依る腐敗し切つた社會の眞ッ只中にあつて唯軍人のみが日本魂を維持し、必要に應じて之を發揮しつゝあることは最近の日支事件に關しても如實に之を窮知することが出來る。特に彼の肉彈三勇士の如きは全人

類を驚倒せしめ、米國の主戦論者をして悉く屏息せしめたのである。

忠勇義烈の我が帝國軍人は、明治天皇の軍人に賜はりたる勅諭を遵守し、我が國古來の武士道に則り、常に規律を嚴守し、上官の命令は君主の命令として絶對不可侵と心得、絶えず報國盡忠の精神を中心として訓練されて居る。隨つて日本魂は玆に軍人精神となつて復活し、君國の爲、壯烈な最後を遂げることを名譽とし、欣然として　天皇陛下の萬歳を三唱しつゝ死に卽くが如きは、世界に於て唯獨り日本軍人のみ所有するところの特權とも云ふべきものである。我が國威は古來此の武士道精神卽日本魂の發揮に依つてどれ程發揚されたか知れない。又未來永劫に亘り此の日本魂乃至皇道の精神に依つてのみ我が國家は永久的生命を持續するばかりでなく、限りなき國運の進展が期せられるのである。

此の君國の爲に一身を捧げる軍人の心を以て、政治家も教育者も、資産家も、商人も、百姓も、賃銀勞働者も皆協力一致して眞劍に働いたならば我が國はもつともつと優れた國になるべき筈だ！　軍隊生活のやうな規律的生活、一身を捧げて君國の爲に盡すの覺悟を以て、個人生活、家庭生活、國家及び人類文化の生活に於て專心努力したならば、自己も、家族も、社會國家もより善くならぬ筈はないと考へる。

誰か軍隊教育を以て壓制教育と感ずる者ぞ！　若し軍隊的訓練を以て壓制束縛と感ずる人があつたならば、其の人は自由を通り越して我が儘勝手を働いてゐる人であると云はざるを得ない。我が儘勝手は軈て治安妨害となり、社會の秩序を搔き亂すことゝなる。今日の人間は我が身を檢束することに依つて條理ある生活を營むことが出來ない。そ

こで本能や衝動の滿足を求め、慾望の奴隷となつて了ふのだ！　本能や衝動や欲望も一種の生活意識ではあるが自我の精神作用中劣等の地位にある。隨つて我々はこれ等の下劣な意識に依つて左右さるべきものではなく、眞善美聖の價値意識に依つて支配さるべきものである。換言すれば我々の有つ經驗知や劣情や盲目的な本能衝動の如きものゝ一切は自我の本質たる規範意識に依つて制御せねばならない。自己の規範意識に從ふことそれ自身が眞の自由だ！

衝動や本能等が自己の目的や理想を裏切る場合は無論之を抑制せねばならぬ。自我の理想を實現せんが爲には小我を捨てゝ大我に就き一時的の僞我を否定して永遠的な眞我を確立せねばならぬ。是れ卽ち自己規定と云ふものだ。

自己規定は自我を無限に發展せしめる爲に缺ぐ可らざる要素であり、組織ある社會を形成する上に於ても必須不可缺のものである。若し各々がそこに目覺めないで我が儘勝手を働くとすれば外部的規定を設けて是れに則らしめねばならぬ。例へば國憲國法の如き或は自治團體規定の如きに於ても未だ其の眞意を了解しない間は或は拘束を感ずるかも知れないが、深く自己の行く手を考へ、人間性の種々相を凝視し、社會の複雜な狀態を察したならば、其の規定は自己を拘束するものではなく、却つて自己の發展に缺ぐことの出來ぬ規定であることに氣附くであらう。無論一切の外部規定は人間の創造力、殊に人格的表現を阻碍するものであつてはならない。又我々は唯外部規定を後生大事に守づて行くだけでなく、積極的な內部規定に依つて活動するやうにせねばならない。

軍隊の規律的生活も今まで自由奔放な生活を續けて來た人に取つては苦痛であり。隨つて拘束を感ずるであらうが併しながら此の規律的生活に習慣づけられると、少しも拘束を感じないばかりでなく、それが却つて心身共に爽快を

覺えるやうになり、自ら進んで規律的生活を實行するやうになるのである。

我が國に於て眞に共同的な規律的生活をなしてゐるのは唯軍隊だけであると云つても敢て過言ではない。學校に於ける寄宿舍生活――軍人養成機關を除く――等は兵營生活に比すべくもない。我が國民は全體として、より嚴格な訓練を要する。軍隊生活法は之を國民生活乃至人間生活全般に及ぼすべきものである。寢るも、起くるも、食ふにも、學ぶにも、働くにも、もつと規律的でなければならぬ。日本軍人が世界獨歩の地位を占めてゐるのは、豫ての規律的生活や精神陶冶及び軍事的訓練の然らしめる所である。而して其の練成された軍人精神は卽ち日本魂そのものである。

此の日本魂は軍人のみならず、日本國民の總べてが各々祖先から繼承してゐるべき筈であるけれども、我が國の現狀では家庭に於ても學校に於ても、將た社會に於ても、眞に日本魂を指導し訓練するの方途を構じてゐない爲に其の先驗的な魂も概ね意識の闇下に隱れて了つて無自覺な狀態に置かれてある。唯國家に變亂があるとか、外國と事を構へた場合にのみ日本魂がむく〳〵と頭を擡け、擧國一致の精神となつて現はれるのであるが、それが平時に於ても絶えず働いたならば、どれ程我が國運の發展を促進したか知れない。卽ち今頃は最早我が日本は世界をリードするやうになるに違ひないけれども、惜しいかな、我が國民性の缺陷として其の緊張氣分が一時的で永續しないから、何時まで經つても皇道を世界に布くといふ所まで進めないのだ！

願はくば軍隊の精神教育を擴張して、全國民に普及徹底せしめ、常に戰時的緊張氣分を失ふことなく、協心戰力、以て凡ゆる國民生活の不安を一掃し、我が國家の世界的發展と大義を宇內に顯揚するの實を擧げたいものである。

名譽は決して自ら之を獲得しようとしても容易に得らるべきものでなく、又名譽は何等か欲望の對象とすべきものでもない。卽ち名譽といふものは之を目的として追求すべきものでなく、或る理想を實現し目的を貫徹した場合これに附隨するものである。

彼の名譽を得んが爲に孝行をするとか、忠義を盡すとか、其の他一切の國民道德を守るとか云ふことが如何に不合理であるかは、少しく自己反省をするとか、客觀的考察を運らす者の齊しく理會する所であらう。卽ち人が臣民として君に忠義を盡すのも子が親に對して孝行をするのも皆當然のことである。其の當然のことをして名譽を得ようなどゝ考へるのは餘りに虫のよい話ではないか？

固より不忠不義不孝不貞の徒の多い世の中では忠義・孝行・貞操等一切の道德行爲が賞讃に値するけれども、それは忠義者や孝孝者自身に於て世人の賞讃を博せんが爲に行ふものでなく、本人自身が止むに止まれぬ至情を以て是等の善行を表はした場合、其の當然の歸結として他から賞讃されて則ち名譽となるのである。

自ら名譽を得んが爲に正善を行つた場合はそこに不純分子が加はり、一種の虛榮心の滿足となつて全く賞讃に値しないことゝなつて了ふのである。

人が當り前な道を歩くからとて、卽ち當然守るべき法を守り、行ふべき善を行つたからとて、それで世人の賞讃を博するといふことは社會が全體として進んでゐないからである。世の中が全體として進めば忠義も當り前な事として誰もが行ふことになり、それは別に賞讃すべきことでもなければ、名譽とすべきものでもないことゝなるのである。

凡ゆる道德的行爲は自己の名譽慾を滿足せしめる爲に行ふのではなく、自己の道德的理念や文化の理想を表現することに沒頭すべきである。而して其の結果より見て自己の不知不識の間に社會に認められ稱揚せらるゝに至りて名譽たるを自他共に許すべきである、眞の名譽たるや我の與り知る所でないと云つたやうな、或は却つて世人の賞讃を恥らうやうな氣分で滿されるところに一層其の奧床しいところが見出されるのである。

古來動もすれば我が武士に於ても名譽慾に驅られ「適將を討取りたる者は某なり」などゝ言ひ爭ひ、名譽の奪ひ合ひをした例は尠くない。今日に於ても名譽々々の連發に依つて、忠君愛國の精神を發揮することを以て自己の名譽を高めるの方法なりと考へるやうな心得違ひの無いやうに名譽の意義を正解せしめ、君國の爲に盡すは自己の本分を全うする所以であつて、何等自己に求めるところがあつてはならないと云ふことを吳々も了得せしむべきである。

要するに我が軍隊教育は日本魂を中心として之を練磨教養し飽く迄我が皇道の大義を字內に發揚せんとするの教育を實施するのであるから、此の意味に於て皇道本意の教育を唱導する吾人の主張と完全に一致する。

惟ふに皇道精神を離れて別に軍人精神が存在するのでなく、又皇道教育を外にして我が軍隊教育は考へられない。即ち皇道の實行教育が我が軍隊教育と見るべきである。

我が軍隊教育に於ても世界の趨勢に鑑みて國防教育、軍事的訓練を施すことは無論であるけれども、それは決して軍國的若しくは侵略主義的の意味を含むものではない。然るに歐米諸國に於ては夙に黃禍論を唱へ、或は我が國を武斷主義的好戰國と見做すが如きは誤解の甚だしきものである。此の誤解を一掃する上に於ても我々は人類教育者の立場に立つて日本軍人特有な武士道の精神、日本魂乃至皇道の眞義を彼等に理會せしむべく指導し訓陶するの必要を痛感するのである。

一四　皇道と宗教々育

茲に宗教々育とは或る既成宗教の信者を作る爲に施すものではない。又既成宗教の教旨や信仰條條を敎ふるのでもない。更に又學校の教科目中に宗教科を加へよと云ふのでもなければ宗教學校の建設を叫ぶ者でもない。

それは人間最高の生活を營ましめんが爲に施すところの信仰教育を指していふのである。無限絕對、全智全能の神に對して歸依尊信の赤誠を捧ける底の人を作る信仰教育！　各自の宗教心！　道德意識！　良心！　神性！　佛性！　人格性（人間の本質）を啓培して之を凡ゆる生活の根源とし、指導原理とし、規範意識として一生を突き貫かんとするの信仰教育！　余は之を指して宗教々育といふのである。

抑々現代教育の相を觀ずるに、概ね成功第一主義に墮して了つて、斯うした人間意識の本質に徹した信念ある教育が皆目施されてゐない。人間最高最深の宗教意識に目覺めた高雅な教育的人格に依る統合教育が施されてない。

小學校に於ては一人の教師が、殆ど全學科を受持つて學習指導なり情意の訓練なりに任じてゐるから、教育者の人格に依る統合教育が行はれてゐると云ふことが出來るけれども、若し教育者に其の人を得なければ到底被教育者の全人格的陶冶乃至其の神性啓發は覺束ないことである。殊に中等學校以上に於ては概ね學科受持で知識の切實教育しか

行はれてゐない。隨つてそこには全人格の陶冶といふことが缺けてゐると云ふことは今更論を要しない。尤も學校長が修身科や公民科、或は倫理哲學講座などを擔任して總合的に指導してゐるとか、假令さうした學科を擔當しないまでも講堂訓話や日常の訓辭等に依つて學生生徒の方途を誤らしめないやうにしてゐるとか、或は學校長が學校統一の鞭を握つてゐるから總合的人格的な教育が施されてゐる筈だとか、或は國家にはチャンと教育法令なるものがあつて教育の一切はそれに統制されて誤ることはないとか云ふ形式主義者や法令萬能論者が有るかも知れないけれども、唯それだけで果して被教育者の心身全部を引き緊めるに足る所の而も彼等の一生を支配する何物かを把握せしめ得るかどうか、果して全人的陶冶の實を擧げ神性に生きる底の信念に滿ちた人間を如實に作りつゝありと云ふ事實を指示し得るかどうか？

元來教育法令とか、學校の設備とか、學校當路者のお役目的言辭とか云ふものは被教育者の全人格を搖り動かす者ではない。無論校長とか學長とか總長とかゞ、山鹿素行や、中江藤樹や、山崎闇齋や、二宮尊德や、吉田松陰や、藤田東湖や、或はペスタロッチとか、フイヒテとか、ヂースステルウエッヒとか云ふやうな、熱ある誠の人格者であるならば、其の時折の教訓々辭と雖も學生々徒の全意識界を支配するに足るものがあらうけれども、さうした偉大な人格者でない限り徹底的な信仰教育は到底望まれさうにもないのである。

而も今日の教育に於て最も缺けてゐるのは鞏固な意志、强い信念を養ふことに於て殆ど無關心の狀態であるといふ點に存する。單なる知識の傳達、小理窟を言ふ人間、或は小才子を養ふといふ點に於ては今の教育も役立つてゐるやうだが自我の本質に生きる人間を作るとか、飽くまで我が神性を發揮する人間を養ふとか、尊き信仰の人を拵へるとか、或は國運の發展、人類文化の創造に貢獻する底の偉大な人物養成には殆ど役に立つてゐないばかりか却つてそれを沮碍してゐる傾向さへある。

單に技巧を弄するとか、利得のみを追ふとか、名譽心に驅られるとか、其の場々々を都合よく切り拔けるとか、現實我乃至小我としての欲望を滿足せしめるとか、立身出世を夢みる人間、成功第一主義から一歩も拔け出ることの出來ぬ人間、一言にして蔽へば我利々々盲者のみを作つて人間生活の一切を破綻に導き、人間の凡てを驅りて奈落の底深く擠し此の世ながらの生地獄を現出せしめようとするのが現今教育の實狀である。此の死に直面せる悲慘な教育に應病施藥の方法を講ぜんとする慈惠の教育！　滅び行く斷末魔の教育に活を入れるの生命教育！　奈落の底に落ち込みつゝある我執の教育に救ひの手を伸ばさんとする聖愛の教育が玆に云ふ宗教々育なのである。

宗教々育を廣義に解するとそは人生最高の教育であり、圓融無礙神人感通の教育であり、教育そのものゝ極致であると云ひ得る。隨つて個人的教育も社會的教育も、人格教育も、文化教育も悉く廣義の宗教々育に歸着することゝなる。人間の全的陶冶！　生命進展の教育！　人類意識の本質を自由に表現する教育！　無限に創造し永遠に生きる教育！　純眞純美な人格至上主義の教育等はすべて廣汎なる宗教々育の中に包含せられるのである。

宗教的價値は聖そのものであり、綜合文化價値である。綜合文化價値を體現せんとするの宗教々育は無論一切教育の上に立たねばならぬ。是れ余輩が曩に宗教々育を以て最高の教育であり、教育の極致であると叫ぶ所以である。

宗教の莊嚴善美なる殿堂を地上に築くことは我等の念願である。神々しい神のみ姿を我が胸中に見出す事、それは我等の法悅とする所である。此の全知全能の神を思慕し現實の醜い我を純化し美化することそれ自身が人格完成で無くて何であらう。それが我等の期待する最高文化の創造でなくて何であらう。

學者の眞理思慕！　藝術家の工夫創作！　道德家の努力精進！　何れも永遠の生命に參せんが爲の念願でないものはない。卽ち落ち付く所は神人感通物我一體の境地であり、宇宙の大生命と脉絡相貫通せんとする所にある。

實に宗教々育の範圍は宏大無邊である。そは人格陶冶の最高峯であり、久遠永刼に亙る精神生活であり、文化發展の絕對境である。吾人は區々たる對立關係や、慾得の境涯や、日常經驗の現實世界にのみ住み込んでゐては滿足することが出來ない。どうしても超經驗界！　神仙の世界！　理想の天地に逍遙すべく自我の神的自意識を味得し表現しないでは居られない。略言すれば我々は一日たりとも宗教なしには生きて行かれないのだ！　此の意味に於ても宗教教育者が如何に重大な役割りを演ずるかは蓋し想像するに難くはない所であらう。

我々の持つ現實我は醜いものだ。經驗我は如何に之を積み重ねてもその範圍が極限されてゐる。隨つて我々は現實的小我の本質は現象や經驗のやうな存在の世界にあるのではない。それはあるべきの世界、思慕！　憧憬！　聖愛！理想等精進努力を以てせねば贏ち得られないところに存する。

そこで我々は絕えず繰り返されつゝある靈肉の劇しき戰に於て靈の勝利を期すべく奮鬪努力を續け、以て理想を裏切る利慾等を克服せねばならない。

然るに今日の人間は一般に名利の慾や、肉感の滿足を求めて自我に內在する神意に隨順しようとはしない。それ故今日の人間は概ね腐敗し墮落してゐる。人心の墮落が今日の政界の腐敗や經濟の破綻を招來してゐる。國際關係の危機も亦其の源を人心の腐敗に發する。人心の腐敗とは、人間の意識中道德的理念！　規範意識！　神への尊信等、高貴な意識の存在を忘却或は無視して、衝動！　本能！　感覺的慾望等の劣惡な意識が支配者の位置に立つて跳梁跋扈することである。其の神性を失つた人間！宗教心を缺如した人達が支配慾や權力意志を働かせつゝ互に呑噬を逞しうする所にどうして健全な社會、理想的國家、文化的世界が構成される道理があらう。

そこで我々は何等かの方法に依つて其の價値意識！　殊に宗教的價値—理想的人格價値—綜合的文化價値—聖—神—の意識に最高の權威を與へ、是れに依つて自我の全生活を支配せしめねばならない。否らざれば此の世は決して救はれるものではない。

然らば如何なる方法に依つて吾人の持つ規範意識乃至神性に對して最高絕大の權威を與ふべきか。それは外でもない。廣汎なる宗教教育に依つて自我の神性を覺醒し、之に意義附け價値を與へることに依つてゞある。我が國民は祖先以來「まこと」「まごころ」乃至良心を中心として君父に仕へ忠孝を勵みつゝ歷史的生活を續けて來たのであるが、併し乍ら其の「まごころ」乃至良心たるや、始めから完全無缺なものとして存在してゐると云ふ譯ではない。それは啓培に依り修養に由つて漸次發達して來たものである。

固より啓培といひ、修養と云ひ、一種の經驗に過ぎない。經驗に依つてどうして「まごころ」とか良心とかいふ超

經驗的な規範意識乃至神的自意識なるものが發達するか、それは未開人の理想並に宗教意識と文化人のそれとを比較考察すれば略々了得することが出來るであらう。

吾人の眞我なり大我なり或は理想我なりは經驗や修養を積むに從つて發達する。修養を積まない人の良心は迷ひ易く、體驗を有たない人の意志や操守力は極めて弱い。何等の修養もなく體驗もない人の生涯は小我の生活と無自覺の狀態とに終つて所謂醉生夢死するに過ぎない。小我は經驗の範圍から脫却することが出來ず、容易に對象の爲に捕はれたり、劣情に驅られたりするのであるが、大我卽ち先驗我は遉がに經驗の羈絆から脫出し飛躍して經驗を省み、而もその經驗を批判し修正し統一し指導して自我の行く手を誤らざらしめんとする。そこに經驗我の獨自的地位があり、普遍的價値があるのだ。我々が日本國民として考へなければならないことは玆に所謂先驗我といひ、大我と云ひ規範意識といふ者は果して何であるかと云ふことである。それは卽ち誠であり眞心であり、良心であり、忠孝彝倫の道であり、惟神道であり皇道の精神である。かむながらの道といひ、皇道と云ひ帝道といふも其の根源は一である。斯の道は其の源を神代に發し、其の內容は神勅及び詔勅の中に明示せられ、君民一體となつて神祇を崇敬し、明淨正直の生活を營みつゝ、我が民族の限りなき進展を圖らんとする傳統的信念である。

抑々我が神道卽すめらぎの道は、宇宙の本源神から幾多の神々を經て、伊弉諾、伊弉丹尊に至り、其の御子天照大神の出現に依つて天壤無窮の神勅は發せられ、天孫を斯の國に降臨せしめられて我が帝國の基は築かれ、以後神々相傳へ、皇々相授けられ、益々發展して來たのである。此の神道卽皇道の大本を了得し、之を基準として廣汎且つ徹底的な教育を施すことが卽ち皇道の教育である。隨つて皇道教育は全人格的教育であり、至大至高の信仰教育であり、永遠に亙る生命の教育である。それ故皇道教育は廣義の宗教々育といふことが出來るのである。

元來我の意識なるものは民族意識を離れて存在するものではない。我の意識の中に民族意識があり、民族意識の中に我の意識があるのだ。民族意識を拔きにした我の意識は一つの抽象に過ぎない。而して我が民族意識の中心をなす者は我が惟神道であり、皇道の精神である。隨つて我の中心意識卽ち我の本質も亦皇道の精神であらねばならぬ。

我が國は神國であり、我が國民は古來神を祭り神を信じ神を敬ひ神に仕へて今日に及んだのである。神を信奉し神を理想とする我が國民は自らも亦神にまで體達せんとの念願を有つ、それは唯自己を罪惡のまゝ何等精進することも潔齋することもなく、只管神佛に縋つて救つて戴かうとする他力本願でなく、神を敬ひ尊びつゝも自ら精進努力して神域に體達せんとするの自力本願の點に於て他の宗教の追隨すべからざる所がある。而も我が民族の崇敬し奉事するところの神たるや、クリスト教の所謂ゴッドの如く抽象されたものでなく、皇祖皇宗の神靈であり、現人神であり、皇室國家に對して功勞のあつた祖先の靈である。

我が國民の敬神觀念は尊皇愛國を以て其の歸着點とし、祖先崇拜を以て其の基調としてゐる。此の敬神崇祖の觀念は我が國民思想の中核をなすものであつて、そこには日本民族の宗教的信仰と道德的信念とが融合一致してゐることを看取せずにはゐられない。

我が建國の大理想は神武天皇の詔勅中にある所謂「八紘を掩ひて宇と爲す」といふ所に存する。此の國家的大理想

實現の爲には固より全國民の宗教的信念を要する。玆に宗教的信念とは理論の上に立つものでもなければ、精とか意とか抽象された別々の心理學的概念の上に立つものでもない。全心全我の上に立つものであつて理論を超越したものであり、隨つて知的に解剖されるものでもなければ、說明さるべきものでもない。それは我の本質に根ざしたものであり、神的自意識であつて、どんなことがあつても他に動かされるのでなく、常に不動の境地に立つものである。隨つて眞に宗教的信念を持つて居る者は火に燒かれず、水にも溺れないのである。斯うして堅い强いそして自己の一生を突き貫くところの宗教的信念を養ふことは目下の急務とする所であるが、我が國に於ては從來それが怠られてゐたのではないか。

皇道本位の信念教育！　其の信念教育は全國民をして協心戮力、粉骨碎身、以て盡忠殉國の至誠を發揮せしめずには置かない。然るに其の信念教育が今日までどれ程實施されてゐたか。

現時の凡ゆる社會上の缺陷及び罪惡が一面教育の不完全と不徹底とに基くものであり、宗教的信念の陶冶を怠つてゐる結果であると云ふ事實に想到する時、世の教育者たるものどうして奮起せずにゐられやう。

殊に皇道教育の徹底が國民をして其の德性並に宗教心を啓培し、之を實現して自己を救ひ、社會人心を新にし、國家國體の擁護とその進展とを圖り、進んで國際關係の圓滿なる解決に努め、人類の平和と幸福とその文化創造の爲に貢獻せしめるものたる以上、どうして皇道主義的人格至上の教育を全國民に向つて、將た全世界に向つて呼びかけないでゐられやう。

一五　皇道と政教の一致

我が國に於ては、神を祭ることゝ民を治めることゝは相一致し、祭は卽ち政であつた。代々の天皇は神を祭るの御心を以て民に臨ませられ、又神意に則つて民を治めさせられたのである。現人神に亙らせ給ふ上御一人に置かせられては、祖宗の神靈に依據して民を愛しみ民を導かせられるのであるから、我々臣民たる者も亦、陛下の御心を以て己が心とし、神に仕ふるが如く、君に仕へ絕えず自我の心身を研き有事の場合は粉骨碎身以て君國の爲に盡すの覺悟がなければならぬ。それは君國一致、君國一體の我が國に於ては固より當然の歸結である。

神を敬ひ祖先を尊ぶこと乃ち敬神崇祖は古來我が民族の有つ宗教意識である。神を中心とする生活！　それは何と意義深いことであらう。神を敬ふことは自分を神にまで引き上げんとするの心であり、祖先を尊ぶことは本に報ゆる所以であり、本來の自己を尊ぶ所以である。敬神崇祖を中心とする我が國民は神意並に祖先の意を遵奉しつゝ、無限に創造し、發展して止まぬ理想的國民である。我が同胞が理想國民たり得るてふことは全く代々の天皇の深い御惠みに外ならないのである。卽ち古來祭政一致神意隨順の政治を行はせらるゝが故に、民も亦其の御神靈及び大御心を奉じて祭神の誠を致し赤心を込めて君に仕へ奉るのを以て其の本分としてゐるのである。

祭と政とが相一致すると云ふことは、東西に卓絕せる我が國體の所產で、それは我が皇祖天照大神の建國の大精神に基くのである。御歷代の天皇には寘祚の無窮を期待し給へる皇祖の限りなき恩賚を感謝し給ひつゝ、皇祖の政治的

御理想の實現に努力し給ひ、之に依つて御孝道の完きを期せられたのである。此の皇祖の御神靈を仰ぎ、其の恩賚を感謝し給ふ御精神は即ち祭祀の精神であり、其の御理想の實現に努力し給ふ統治の御精神は、即ち政治の精神である。形式上に於ては祭神と治民との二方面に分れるけれども、其の精神は兩者を一貫して、そこには何等の矛盾も撞着も介在しないと云ふのが、我が國祭政一致の根本基調である。隨つて祭政の一致といふことは萬世一系皇統不易の國體でなければ觀ることの出來ぬ我が國固有の美風である。

我が國では祭政が一致するやうに、政教も亦一致する。政治とは德を以て民を治めることであるが、其の治めるといふことは、依らしめるのではなくて、先づ知らしめることに在る。無知蒙昧を奇貨として威壓し統御するが如きは本當の政治ではない。帝政時代に於ける露西亞のニコラス皇帝の如く、愚と國民の教育を怠り、國民を愚にして操縱し易からしめた如きは、偶々革命を馴致するの導火線となつたやうなものであつた。民を治めるには善く民情を察し其の蒙を啓き、知らざるを教へ、其の信ずる所、希ふ所を按排して其の志を遂けしめる所がなければならぬ。而て其の蒙を啓くには、どうしても教に俟たねばならぬ。然るに教ふることなくして唯刑と法とに依つて統治せんとすることは最早進んだ文化國の採らざる所である。

人は教に依つて自己の良心を呼び醒すことも、之を發達せしめることも出來るのである。

一たび自己の本質卽ち良心に目覺め、之を確持して離すことがなく、益々之を發達せしめたならば、其の良心に照らし道德意識に從つて云爲行動するが故に、國憲國法に背くことがなく、別に六法全書を繙かずとも、又其の一つ一つの條文を暗誦しないでも法文に合するか否かの見當位は附く。卽ち法律を知らぬ一般人も道德意識を領有する限り法律に悖ることなく生きて行かれるのである。

上に立つ人、國政に參與する人々にして民を善く治めんと欲せば、民の知らざる所を教へ、足らざるを補つてやらねばならぬ。而して教へ導くことは不渡り手形のやうな政見發表では無くて身を以て範を示すことである。耳より入るの教育ではなくて目より入るの教育である。民は一般に自力更生がどうの、國策樹立が斯うのと云つたやうな一種のスローガンだけでは最早騙されぬやうになつた。若し上に立つ政治家にして其の言行が一致しないならば民の信用を害ひ、民をして離反せしめるの因を作り結局官民の合同も出來ぬことゝなるであらう。

故に民を治めるには德を以て導き、情を以て懷け、身を以て率るところがなければならない。

凡そ天下國家を治めんと欲せば先づ民を教へ導くところがなければならぬし、民を教へ導くといふことは轉て天下國家を治める所以である。

之を教の方面から見ると、帝王教育、政治家教育、官公吏の教育、特權階級の教育、財閥の教育、團體の教育、一私人の教育、老若男女の教育等、國民の全體を教育することに依り、個人も、社會も、國家も、より善く進展することが出來るのである。卽ち教育の徹底は心性を覺醒せしめ、其の心性を淸廉潔白にし、皇道政治の徹底を期せしめることが出來、一般私利私慾を遠ざけ、贈收賄を根絶し、國民各自をして各々純眞な人間性を發揮せしめることが出來るのである。

然るに今日の教育は不徹底を極めてゐる。教育者自身自己の識見を高めることを知らず、威嚴を保持することも出來ず、政治家乃至權力者の前に跪き、財閥の前に平身低頭して、面を上げることが出來ず、自己の教育的人格を發揮することを忘り、只管他本力願を夢み、立身出世のみを希つてゐる。是でどうして眞の教育が出來るか、苟くも教育の何たるを解し、教の依つて生ずる所以を明かにしたならば名と位と金との前に膝を屈したり、世の所謂追隨者たり得ない筈だけれども、今日まで誤られた教育を受けて來た教育者は同じく誤つた教育を施しつゝ、次々に持越して行くのである。即ち立身出世主義の教育を受け繼いでは之を後代に傳へて行くのである。斯くては百年河清を俟つと一般、何時まで經つても教育の根本的革新が行はれよう道理がない。斯の如く誤つた教育も、誤つた政治も共に其の一致を見ることは到底出來るものではない。そこで我々は一方に於て今日の教育を革新し、他方に於ては政治を改革することに依り、政教一致の實を擧ぐるやうにせねばならない。

惟ふに教育改革の實を擧けんと慾せば先づ教育者の態度から改めて掛らねばならない。お世辭と追隨、阿附と迎合ビールと菓子箱等一般に弱々しい態度を止めて嚴正なる態度を持し、全人格を教育上に披瀝し、社會の毀譽褒貶に耳を傾くることなく、徒に當路者の御機嫌を取るが如き愚を演ずることなく、只管自己の教育的人格の發揮に努め、以て政治と云はず經濟と云はず「一切社會の革新は先づ教育から」との信念を貫くやうにせねばならぬし政治家に於ても教育を正當に理解し、教育者を尊重して、兩々相俟つて國民の教養と其の善導に力を致さねばならない。

政治と教育とは密接不離の關係があるばかりでなく、兩者は其の根底に於て相一致する。政を民に施し民を統治するには眞心を以てせねばならぬやうに、教育に於ても亦人を教ふるに眞心を以てせねばならない。

乃公は政治家だとか、教育家だとか云つて政權や教權を振り廻すやうでは眞の政治も、眞の教育も行はれるものではない。爲政者と人民、教育者と被教育者とが共に「まこと」を以て結ばれた時、始めて眞の政治、眞の教育が行はれるのである。

次に政治の本質は自治であり、教育の本義も亦自己教育である。治者と被治者とは同一の人格者たり得るが如く、教育者と被教育者とも亦同一の人格者たり得る。それは自己そのものが主觀たり同時に客觀たり得るからである。隨つて政治も教育も其の本質に於て同一なりといふことが出來る。即ち一は自己統治であり、他は自己陶冶である。結局自己を主眼とする點に於て變りは無い。故に政治家も教育家も各々其の本質に目覺めたならば、より以上の政治も教育も之を行ふことが出來る筈である。即ち政治家は自己の政治家的本質を發揮することに依つて、より以上の政治を行ふことが出來、教育家も同じく教育家的人格を發揮することに依つて教育の革新も教育の普及徹底も之を期することが出來るのである。換言すれば眞劍に政治を執るとか、教育を施すとか云ふことに依つて各々自己の人格を研くことが出來、自己の人格を表現することが出來る。即ち政治家も教育者も各々自己を統制し自己を教育し之を自己の官公職の上に發揮することに依つて其の責を全ふすることが出來るのである。更に又政治家と教育家とが相提携しつゝ、同一歩調で進んで行つてこそ眞の政治も眞の教育も施されるのである。

然るに政治家は教育者を蔑視し、教育者は政治家の手先に使ひ廻されるとか、或は政治家に對し不平不滿を抱いて

るるやうでは、到底眞の政治も教育も行はれるものではない。それは政治家に於て教育家を尊び、教育家に於ても政治家を重んじつゝ互に教へ合ひ導き合ひ、互に國家社會をより善くするための共同作業に從事して居るといふことに目覺め協心戮力大いに國力の充實と非常時打開の爲に盡す所がなければならない。

然るに今日の政治家も教育家も概ね人格が低劣で利己主義に趨る者が多く、其の癖、自己を一廉の政治家たり教育家たるが如く自惚れ、各々慢心して修養を怠り業務を忽諸に附してゐる。隨つて學理の研究もしなければ、實地的の自己訓練も表現法の創造もしない。無論自ら範を示すことなく、口先でお茶を濁しつゝ職務時間の空費に努めてゐる。議會壇上に立つて、或は教壇上に立つて鹿爪らしく天下國家を論ずるとか、教育の神聖を叫ぶとかしてゐるけれども、御本尊の人格は既に業に壞れてゐる。月俸や年俸を戴きつゝ、お役目的に思想對策とか、國策樹立とか、國防の急務とか、教育の改善とかを口にしてゐるが、さて彼等が一たび官公職を退いたならば、全く皇室の尊嚴を說くことも無ければ國家の將來を憂ふることも無い。斯うしたお役目的言動には全く熱もなければ力も籠つてゐない。それは恰も傭兵の如く使用人の如き者である。

支邦では葬儀の場合、泣き役を傭ひ入れる。そこで傭はれた泣き役は、內心悲しいことは少しも無いが、唯お役目的にお金を戴く代償として荐りに泣くのである。今日日本のお役人衆は此の泣き役を演じてゐるに止まる。彼等は決して自己の內心を披瀝してゐるのでもなければ信念を物語つてゐるのでも無い。本當に天下國家の爲に盡さんとならば、職を拋ち地位を放棄して掛らねばならない。徒に名譽慾に驅られたり、權勢慾を恣にしたり、金權を振り廻したりするやうな人達には決して君國の爲に殉ずる底の眞心のはあるものではない。

而も中にはさうしたお役目さへも果さないで、官公吏や教育者にして赤化する者も少くないが誠に慨嘆の至りである。官公途に衣食し特別に君國の恩惠を受けてゐながら、その君と國との恩を忘れるばかりでなく、恩に報ゆるに仇を以てするが如きは何たる狂氣の沙汰であらう？斯の如きの人は永久に癲狂院に收容するか、卽席斬罪に處すべきである。決して二度と此の世の中に出すべきものではない。赤化宣傳をなす共產黨員等は社會改造を意圖する者でなく、國家を破壞して彼等自身の天下にしようとする大野心大陰謀に外ならないのであるから、唾棄排除すべく、根絕すべきものである。官公吏や教育者までが赤化して、君國を冒瀆するやうでは、我が國の一特色たる參政の一致も政教の合一も得て之を望むことは出來ない。

政教の一致を圖らんと欲せば政治家も教育家も我が惟神道、建國の精神國體觀念を明かにし古今を貫く日本精神に目覺め、より人格の修養を積み、兩者共に政治と教育との眞義に徹し、相携へて政教一致の精神を發揮することに努めねばならない。

教育者が教育立國を說き、政教の一致を主張し、國策を樹立し、教育の世界を構成し、教育上より國家的乃至世界的大問題の解決をなすのも亦人生の痛快事ではないか。

教育者は人間の魂を作り魂を錬る。世に魂を錬り魂を鍛へる程尊い仕事はない。帝王も大臣も宗教家も學者も詩人も教育家が產み出した者ではないか？　そこに教育者の强味があり、精神的報償がある。

惟ふに社會の改善も、國家の發達も、世界の進展も教育を基礎としなければ決して出來るものではない。苟くも教員にして自己が國家發展の原動力であり、又人類の魂の鍛錬であるといふことに目覺めたならば、從來の如き骨を拔かれたやうな弱々しい態度を改め、全く別人の如く堂々と自己の信念を披瀝し、日々の教授訓練上に實績を擧げ、自己の教育的本質を發揮するに違ひない。

今日我が國では政治と教育とが懸け離れて殆ど別世界の觀を呈してゐる。而も政治家は教育家を以て極めて與し易きもの、弱々しい者として之を蔑視するばかりでなく、中には教育そのものゝ存在價値までも認めない者がある。彼の權力意志のみ增長して教育に無理解な俗吏や政治屋は教育など全く眼中に置いてゐない——それに依つて教育そのものが、どれ程災せられてゐるか知れない。

それに關聯して村長と小學校長との立場を考へて見ると、小學校長は概ねペコペコ者となつて村長の鼻息を窺つてゐるやうな狀態である。若し校長にして村長の機嫌を害ふやうなことがあれば、村長は直に政黨の領袖其の他の有力者に賴んで校長を左遷若しくば馘にするやうなことは珍らしくない。中等學校長と學務部長や課長などゝの關係についても同樣、課長部長は大底法科大學の出身者で、教育の方面には殆ど素人であるけれども、學校長は其の命是れ從ふと云つたやうな體たらくである。高等專門學校以上の教授連になると、遉がに官邊に對する追隨者は減つて來るが、併し乍ら學生に對して迎合主義な所があり、一般に鞏固な意志を缺いでゐて、教育の不徹底は免れないことゝなつてゐる。

政治家が教育家を蔑視することは甚だ遺憾である。政治家も元は小學校の一年生であり、教育者から教育されて今日政治家の位置を贏ち得たのではないか。故に教育者微かなりせば政治家になれなかつた筈である。無論政治家が教育者を以て弱い者と見做し之を蔑視するやうになつたと云ふことには理由がある。そは教育者が餘りに監督官廳崇拜で當路者の鉞の埃を拂ひ、只管その機嫌を害はざらんことに是れ努め、自己を二三にしつゝ一身上の榮達を圖らうとする野心があつたからである。身苟くも教育の任にある者は、自らの人格を養ひ識見を高め、其の教育的信念を貫かんが爲には天下何人と雖も之を恐れず、驀地に突進するといふやうな、恰も戰場の勇士の如き觀あるを要する。否らざれば政治家の下敷となつて頭が上らないことゝなり、之に隨伴して教育そのものを災ひし、結局教育の效果をして極度に減退せしめることともなるのである。

要するに今日の急務とする所は、政治家も教育家も共に先づ自己を治め自己を教育することである。政治家が自己政治、自己裁斷を怠る時、國家の統治社會の秩序は紊れて了ひ、教育家が自己教育、自己訓練を怠る時、一切の教育人類の進步は停滯して了ふ。隨つて政治家も教育家も共に自己統治と自己陶冶との兩方面が必要である。政治家が自己教育を怠る場合は、優れた政治家にまで進展することが出來ず。教育家が自己統治を怠る場合は模範に依る教育を施すことが出來ない進んで止まぬ者のみ政治家たり教育家たる資格がある。人の風上に立つ者、指導者の位置に立つ者がどうして一日たりとも自己修養を怠ることが出來やう？　自己の停滯は決して自己一身の停滯のみに止まるものではない。其の及ぼす所の影響は實に甚大なるものがあるではないか。それは啻に指導者の位置に立つ人のみに止ま

らず、一般人と雖も總べて此の國家社會を形成してゐる一員であるから、自己の周圍に對して絶えず何等かの影響を及ぼしつゝあるといふことには誰しも氣附く所であらう。

凡ゆる人が「自己が進めば社會も進み、社會が進めば自己も進む」と云ふこと、及び「自己の退歩は社會の退歩、社會の停滞は自己の停滞」といふことに目覺め、常に自己人格の修養を積んで自己も進めば社會も亦進むといふやうにせねばならない。況して世の教育家たり政治家たる人に於ては眞の人格修養と、其の人格表現とに依つて一切衆生を教導し統治することに依り、社會國家の安寧と、秩序と、向上と、發展と、幸福と、平和とを圖り、以て皇道精神の徹底、政教一致の實を擧げねばならない。

一六　結　論

我々は單なる存在や經驗の世界にのみ住み込んでゐるのではない。「あるべき」の世界、即ち先驗的・規範的理想の天地に生きてゐるのである。徒に客觀世界に捕はるゝことなく、自我意識の本質を如實に體現せんとするのである。而も自我は一個の私的存在ではなくて公的意義を有つ社會人であり國家人であり國際人である。隨つて自我意識の中には家族があり隣里鄕黨があり、社會があり、國家があり、世界人類があり、大宇宙がある。眼を開けば我は宇宙の中にあるが、眼を閉づれば宇宙は我が心の中にある。自我意識は實に宏大無邊なものである。此の一切を抱擁する無限絶大の自己意識は全知全能の神の心に契合する。だがそれは理想化された人間であつて、現實的には極めて醜いところが

ある。それは恰も惡魔に憑かれたやうに罪惡の種を蒔き、醜惡を演ずることがある。今日社會の實狀を凝視すれば其の自意識は何處へやら雲散霧消して唯惡魔の巢窟見たやうな狀態になり果て、利己主義と、權力爭ひと、淫蕩と、肉と骸骨とが亂舞してゐるやうなものだ！

道德を說き、改善を叫び、理想を論じたところで、畢竟何の役に立つか？　現代教育の障碍と悲哀とはそこにも見出される。然るにそれは現代人が自我の中心生命を攫んでゐないからだ？　規範意識に目覺めないからだ！　自意識に徹しないからだ！　日本人の特質！　それは忠君愛國の至誠に生きることや、沒我的犧牲的精神に富むことや、實行を主とすることや人情の濃やかなことや、一致團結力の鞏固なことや、進取の氣象や負けず魂を有つてゐること等、其の他種々計へ上げることが出來るであらうが、一言にして之を蔽へば終始一貫皇道の精神に生きることである。皇道の精神とは云ふまでもなく天地の公道に基づく神意隨順の道德意識である。皇道の精神こそは我々の先驗的意識であり、自己規定の準繩であり、現代並に將來に對する生活への指導原理であり、生々發展して止まぬ努力創造の根本原動力である。

惡魔の巢窟の如き現代社會はどうしても此の皇道の精神を以て改めねばならない。それは政黨政治であれ、資本主義的經濟機構であれ、非國家的財閥であれ、混亂せる思想狀態であれ、醜い現代世相であれ、國際上の危機であれ、凡そ人間に關はる問題は悉く皇道の精神に基づいて改廢し統制せねばならない。其の爲には國民全體が一日も早く皇道の精神に目覺めねばならない。全國民をして皇道の精神に目覺めさせる爲には我が教育機關を完備し偉大なる教育

に依り皇道教育の徹底を期せねばならない。

後編　日本精神論

一　日本精神の目覺め

人間の問題殊に人間の魂の問題、生命の問題は、反省に始つて反省に終るものである。人間は他の動物と異つて考へることをする。この考へるといふことは人間としての本質を反省することによつて見出さうとすることである。この反省といふことは人間にとつて、あらゆる精神活動の出發點をなすものである。

明治維新以來七十年、この間に於ける日本は急速なる進歩、歐米の文物の輸入とこれが模倣に寧日なく、先ばかりを見て走りに走つて來た。勿論時には、日本それ自體の姿に反省を加へたことがないではなかつたが、何時も彼の長所のみが目につき、一方には我の短所のみがあまりにも見苦しきものとして映じ、彼は我に優るものである。我は彼に劣つてゐるものであるといふ思想が國民に深く泌み渡り、歐米のものとし言へば一も二もなく我に優れてゐるものである。我の有するものは彼と比較にならぬものであるといふ、卑下觀念を生じ、物質文明に於て劣つて居つたことは直ちに精神文化に於ても然りであるといふ論理と、歐米崇拜的な根底には、我の優つてゐるものが映じないで、生命の問題、魂の問題にまで、我は彼を見倣ふべきものであるかの如く、日本生命までもこれを歐米風に解釋し、歐米になづまんとする傾向が濃厚であつた。

然るに歐洲大戰後の日本は殊に世界主義的色彩を强調して來たに對して、歐米諸國は國民主義的色調を年々に濃化し、國家主義的方向に急速度の展開を示して來たのである。我が國に於ても近時頓に西洋文化に心醉して、我が國在來の精神文化を顧みなかつたことの大いに誤つてゐたことに氣付き、あはたゞしく「祖國に歸れ」とか「日本精神に目覺めよ」とかいふ叫聲があげられるやうになつた。このことは云ふまでもなく、在來の思想界が甚しく西洋精神によつて支配せられてゐたために、日本精神といふものが忘れられてゐた。これが近時の世界思潮であるところの國民主義の風潮からして、日本にも日本國民主義を奉じて、祖國日本の姿をまともに見直さう、祖國の本質を把握して、そこに國民生活の國民思想の根本規範を定めようとする態度傾向が强くなつて來たのである。然しこの世界思潮としての日本主義とか日本精神の高潮とか、日本國民主義といふものは、どうも眞に日本的になりきつてゐない。それはイタリーのファッショであるとか、ドイツのナチスであるとかいふものから刺戟されて、日本國民主義といふものを唱へる人々であつて、十分に日本的になつてはゐないのである。名は日本國民主義といつても、その事未だ翻譯的な嗅ひが强いのである。

思想的に世界的潮流としての國民主義は、抽象的な世界主義の弊害にこりてゐる日本にとつて、眞の日本精神への復歸に好個の楔を與へたことは否まれないが、より以上に、日本精神への目覺めに警鐘を打ちならしたものは滿洲上海事變であり、一九三五・六年にかけての國際場裡に處すべき日本の姿であつた。滿洲事變が必ずしも日本を孤立に導いたのではない。むしろ明治以後日本が自己に目覺めて、國際的に歩み出した時に、すでに將來の孤立といふことは約束されてゐたものと見ることが出來よう。日本が今日の發展をつゞけて行く限り孤立狀態から脱脚することは出來ない。そこでこの孤立日本をして、より高きものにまで且つは獨自の文化を再認識せしむるために、まづ日本人それ自體が自己に目覺めねばならぬ。自己に目覺めることは、自己の生命を見つめることである。日本的生命を反省することである。日本人はあまりにも西洋文化に心醉し、西洋文化の存在を知つて、我の文化の眞骨頂を知らず、西洋精神に陶醉して日本精神は癱瘓してゐたのである。かゝる奴隷にこそかつて本居宣長が儒者を難じた次の言葉が、當て嵌められるであらう。

「儒者に皇國の事を問ふに「知らず」といひて恥ぢとせず、漢學の事を問ふに「知らず」といふをばいたく恥ぢと思ひて、知らぬ事をも知り顏に言ひ紛らす、こは萬を漢めかさんとする餘りに、その身をも漢人めかして、皇國をばその國の如くもてなさんとするなるべし。されど、なほ漢人にはあらず、御國人なるに儒者となちん者の、己が國の事知らであるべきわざかは。たゞし、皇國の人に向ひては、さあらんも、漢人めきて善かんめれど、もし漢國人の問ひたらんには「われはそなたの國の事はよく知れども、わが國の事は知らず」とは、さすがに得云ひたらじをや、もしさ云ひたらんには「己が國の事をだに得知らぬ儒者の、いかで人の國の事をば知るべき」とて、手をうちていたく笑ひつべし云々」

方今の西洋心醉學者流にとつても頂門の一針である。

日本精神への目覺めは、正に流行語とまでなつてゐるが、日本人は何が故に日本精神に復歸せねばならぬか、それ

は內外の諸情勢が國民をして、自己に目覺めたる行動を要するからであることは勿論であるが、一體如何にしたならば自己に目覺めることが出來るか。又いかにせば日本精神に立歸ることが出來るかといふことが緊要なのである。單に祖國に返れとか、日本精神に復歸せよと大聲したところで、日本人の生命を祖國の聲でよびさまし、日本人の精神を西洋心醉の夢から呼びもどすにはいかにすべきか、眞に日本精神主義を理解することから出發せずば、感情的に一途に生半解に日本精神主義を奉じて、云爲行動して、結果するところ日本精神の根本と反するが如きことゝならば、日本精神の徹底でなくして、日本精神を毒するものとなる。これ大いに誡めねばならぬところである。

二　日本精神とは何ぞや

非常時局の打開は一に、日本精神によらねばならぬといふが、日本精神の意義は種々に解されて居り、極めて漠然としてゐるのが現在の狀態である。同じく日本精神といふ語を用ひてもその內容は文化を主とするもの、我が國體に重心を置くもの、國民道德を意味するもの、國民性を示すもの等色とり〴〵である。

日本精神を說明するに、日本精神を一つの統一的の精神と見做し、國民として有する或る理念であるとする場合と日本國民の有する或る特別の美點長所を日本精神であるといふ二つの場合があるやうである。第一の場合は、日本精神とは建國以來の惟神の道を體得して、これを實踐し發揚する精神であるとなし、第二の場合は、日本精神とは明く淸き心、崇祖の精神、實行的精神等を指すものであるとなし、或は武士道を日本精神であるといふものもある。

日本精神といふ言葉は最近頓に用ひられるのであるが、これとほゞ同義に使用せられて來た言葉に大和魂といふ語がある。本居宣長は大和心を詠じて、

敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花

といつた。この歌によつて直覺的に日本精神、大和心、大和魂とは何であるかを會得することが出來るやうなものであるが、これを明確に說明することは至難である。鹿子木員信氏はその著「日本精神の哲學」に於て、凡そ出來事をその性質から分けて、無機界の出來事と生命界の出來事とに分け、更に生命界の出來事を植物界の出來事、動物界の出來事、人間界の出來事との三種に區別し、その中で人間界の出來事は、一切諸他の出來事と異るところの出來事である。人間界の出來事は人間の行ひであつて、人間の精神、魂、心によつて「出かされるもの」である。人間が道德的、藝術的、宗敎的、經濟的な行ひをするといふことは、新らしい價値を生み出す行ひで、それが人間の「出かしごと」である。動物には「振舞」といふことはあるが、かゝる意味での「行ひ」といふものはない。實に「行ひ」は人間特有なる精神の「出かしごと」に他ならない。歷史は何であるかといへば、人間の「出かしごと」であつて、歷史の主體となるものは人間の精神である。而して日本歷史といふ特有の「出かしごと」を生み出す主體は何であるか、この主體は日本精神である。

以上は鹿子木博士の所說を大つかみに見たのであるが、更に博士の言葉を少しく引用して見るであらう。「古へより此の土地、人生若しくは世界に關して、根本に於て相違する二通りの解釋があります。その一つの解釋は、此の世界

と此の存在との意義を常住なる實在に求めんとする考へ方であります。……バルメンデスは、感覺の世界を迷ひと觀じ、眼を以て觀ることの出來ない、手を以て觸れることの出來ない世界を常住の世界と觀たのであります」とてバルメンデスの思想を代表的のものとしてあげてゐる。「而して、之に對して、ヘラクレイトスは、之と全然面目を異にして、世界人生の意義は流轉にあると觀たのであります」とて世界觀の二端をあげ、更に博士の見解として「此の世界は嚴密なる意味に於てあるものではない。寧ろ常に出で來つゝあるところの出來事である。……即ち世界人生の根本義は、決して、あるものでない。否な、常に湧き立ち、湧き返るところの一つの出來事である。……此の意味に於て、我が鴨長伯の言葉は、洵に千古の眞理を道破したものと言つて宜い。方丈記の劈頭に、彼は「行く川の流れは絶えずして、また本の水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、暫らくも止まることなし」と。又「一般的精神は、如何にして、或は日本の精神、或は亞米利加の精神、或は支那の精神と言ふ如く、自らを特殊化することが出來るか、……人間の精神といふものは、決して單一・單純なものでなく、寧ろ複雜せる構造を持つて居るものであります。然もその構造の要素を形作るものが、幾多の要素であります。然るに幾多の要素が、一つの建築を構成するには、その方法に幾通りもあることは申すまでもないことであります。具體的に申しますと、或る精神は著るしく經濟的志が優つて居り、或る精神に於ては美と言ふものが無上の價値を持つて居ります。我々はかくの如き精神を、等しく、特殊なる國民のみならず、また色々な個性の上にも認めることが出來ます。……特殊なる精神が、如何にして自からを實現し得るのであるか、……時間と空間の裡に現れるのである。」「時間及空間の裡に現はるゝてだては唯一つしかないのであります。それは即ち力と稱するところのものであります。」「此の力とは何であるかと言ふ問ひは、實は、非常に困難なる問題であります。何故困難であるかと申しますと、力とは凡ての我々の思索・研究・學問の根本の手段である思考、即ち論理の世界に對立して居るところの或るものであるからであります。……凡ての實現は力に據ります。假令その理想、その主義が全然力を否定せる主義・理想であらうとも、苟もその主義・理想が實現を求めんが爲めには、最も强力なる力に據つて初めて世界の上に自らを確立して行くことが出來るのであります。而して翻れの國家に於ても然る如くに、此の日本國家——幾多の尊貴と價値とを有する此の日本國家——之を實現して行くが爲めには、最後の手段は力に據らなければなりませぬ。無論此の力は單に武力のみに止らず、凡ての意味に於ける力、即ち現實に於ける物質の力、之を支配するところの力であります。」「然らば、日本歴史即ち日本出かし事は如何なる出かし事であるか。私は此の問に對して二樣に考へなければなりませぬ。と言ひますのは、大和心は大和出かし事の主體であります。大和心が大和出かし事の主體であるならば、その凡ての出かし事は終始一貫して同一に止まらなければなりませぬ。即ち同一なる反面を持つて居なければなりませぬ。然もその同一なる大和心は、時の裡に、時と共に、常に新たなる出かし事を生み出し、打ち出しつゝ進歩し、發展して行くものであります。」「私共は上代日本國民の持つて居た一定の考へ方、即ち世界人生觀を日本國民の言葉に見出し、その大和心の姿に對する考へ方の表現を純粹なる日本の言葉、即ちやまとことばに瞥見することが出來ます。かくの如き前提の下に、抑々日本國民は、私が心と呼び、精神と言ふところのものを如何なるものとして考へて居たかと申しますと、彼等は我々の

心を圓滿無量なる玉に譬へてゐたと思はるゝ節があります。即ち彼等はまた心のことをたましひと言ふてゐます。「たましひ」の「しい」といふことは如何なる意味を持つてゐるか我々はまだ之が定論に達しませぬが、然もその上の二字「たま」の圓滿無量の「玉」であることは明かであります。」と。

日本精神の定義としてあげられてゐるところは大體次の三樣に類別せられるのであらう。

第一　日本精神とは、日本の國體に就いての十分なる理解を有し、其の國に生を托して居る事を誇とし、此の國家を愛護する事を以て生命とする精神である。

第二　日本精神とは、日本國民の大宗たる天皇に歸一する事に依つて更に一致團結し、以て此の祖國日本を愈々興隆せしむる事を生命とする精神である。

第三　日本精神とは、忠君愛國の精神である。

以上三つの定義は、その表現形式に於ては違つてゐるところがあるが、之が內容は全然同一であるといへる。

凡そ日本精神は、我が國の歷史的事實に基づいて、これに國民的理想を加味したものである。從つて日本精神は日本國民として生きんとする精神である。日本國民として生きるといふことは、日本國民であるといふ自覺を有することゝ、日本國民であるから、日本國家を尊敬し、愛護するといふ要素が包含せられてゐる。日本國家を尊敬し、愛護することは祖國を愛することであり、其の國の其の國たる所以を理解し、自覺することゝなるのである。

日本精神の定義を見るに國體といふ觀念が第一に注意される。國體とはその國の特色であり、その國たる所以である。その國の根本生命をいふのである。從つてその國が他の國と異るところであり、その國の存在價値もそこにあるといふべきところで、あだかも人に於ける人格の如きものである。人は人格あることによつて他人と區別せられるのである。これと同樣にして、國にしてその國體を失はんか、國としての存立を失ふことゝなるのである。故に國體の變革は國家としての本質を失ふのであるから、國體の變革といふことは容易ならざることである。

我が國の根本義は、國民が皇室を奉戴し、その統率の下に於て團結して國をなしてゐるところにある。このことは上下三千年の歷史に徵して明らかである。故に日本の國體について明確なる理解をもつことは國民が天皇に歸一することであるから、以上にあげた第一と第二の定義に於ける前件は、その表現に於て異るとはいへ、その精神に於ては同一である。又、第三の定義に於ける忠君といふ言葉も、國體觀念を簡明に表現せるものに他ならないのである。第一の定義に於て、その國に生を托することをもつて誇りとし、此の國家を愛護することを以つて生命とすることは、第二の定義に於ける祖國日本を益々興隆せしめんとすることを主一とする生命感であり、第三の定義に於ける愛國といふも同一の精神を言表はせるものである。

日本精神は國民主義であり、日本の祖國に還る精神であり、失はれたる祖國を取返す精神であると、いふところから稍々もすれば排他的保守的となる恐れがある。

荻生徂徠曰く「上古の事、異國も本朝も書傳の記せる處を見るに、其の人は神聖なれども、宮室衣服飲食の道さへ開けねば、まして禮儀と云ふこともなく、人倫定だかならず、今時の遠夷の俗に異ならず。堯、舜、禹、禮樂を作り

人倫を明にし、治國の法を定め給ひしより、萬世の規矩となりぬ。世に隨ひて小變はあれども、堯舜の仕方を變ゆること能はず、是れ至極の道なる故也。本朝にては、天智天武の帝、淡海公父子、當時の賢臣だち、令を作り、式を作り、格式を作り、唐の禮儀を移して、吾が國人倫の法を定め治國の道を立て給ふ。今に至て其の規範に從ふ。大經大法は云ふにや及ぶべき。宮室衣冠、日用の諸物、風俗、言語に至るまで、悉く中華の式なり。漢土と我が國と異なりと云へるは、小異を見て大同を知らざる也。國史を讀で來由を極め、異國の史とつき合せて見れば、其の實を知るべし。本朝、中華、朝鮮等は一氣の國なる故、堯舜の規矩に從へば、能く治り、其の實に違へば必ず亂る。古今一轍なり。」と、又太宰春臺曰く「凡、今の人、神道を我が國の道と思ひ、儒佛道と並べて、是を一つの道と心得候事大なる謬にて候。神道は本聖人の道の中に有レ之候。」「畢竟諸子百家も、佛道も神道も堯舜の道を戴かざれば、世に立つこと能はず候されば中華の古代も、日本の今の世も、天下は何時も、堯舜の道にて治まり候」とあるに對して、本居宣長は

「古への大御代には、道といふ言葉もさらになかりき。其はたゞ物に行く道こそ有りけれ。物もことわりあるべきすべ、萬の教ごとをしも、何の道くれの道といふことは、異國のさだめなり。……されば聖人の道は、國を治めむために作りて、かへりて國を亂すたねともなる物ぞ。すべて何わざも、大らかにして事足りぬることは、さてあるこそよけれ、故皇國の古へは、さる言痛き教も何もなかりしかど、天が下までみだるゝことなく、天の下は穩に治まりて天津日嗣いや遠長に傳はり來坐せり。さればかの異國の名にならひていはゞ、是そ上もなき優れたる大き道にして實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり。そをことゞ〳〵しくいひあぐると、然らぬとのけぢめを思へ。言擧せずとは、あだし國のごと、こちたく言立つることなきをいふなり。」と、又「もろこしの古書、ひたすら教誡をのみこちたく云へるは、いと〳〵うるさし、人は教によりて善くなる者にあらず。もとより教をまつものにはあらぬを、あまりこちたくいましめ教るから、中々姦曲詐僞のみまさる事を知らず、「周公且、あまりにこちたく定めたる故に、周の末の亂を起せり。戰國の頃の人の邪智ふかきはみな周公が教へたることなり。皇國の古書には露ばかりも教がましき事見えず。此けぢめをよく考ふべし。教誡の嚴なるをよきことゝ心得たるは愚なり。」と反駁してゐる。

北畠親房は「神皇正統記」に於て、

「我神大日の靈にましませば、明德を以て照覽し給ふ事、陰陽におきて測り難し、冥顯につきて賴あり。君も臣も神明の光胤を稟け、或は正しく勅を受けし神達の苗裔なり。誰かこれを仰ぎ奉らざるべき。この理を悟り、その道を違はずば、內外典の學問も、こゝに極まるべきにこそ、道の弘まるべき事は、內外典信布の力なりと云ひつべし。魚を得る事は網の一目によるなれど、衆目の力なければ、これを得る事難きが如し。應仁天皇の御代より儒書を弘められ、聖德太子の御時より釋教を盛んにし給ひし。これ皆、權化の神聖にましませば、天照大神の御心を受けて、我が國の道を弘め、深くし給ふなるべし。」「大方天地の間、ありとある人、陰陽の氣を稟けたり。不正にして立つべからず。殊更にこの國は神國なれば、神道に違ひては、一日も日月を戴くまじき謂なり。……誠に君に仕へ、神に仕へ、國を治め、人を教へん事も、斯るべしとぞ覺え侍る。少しの事も心許す所あれば。大きに誤る本となる。周易に霜を

履みて堅氷に至ると云ふ事を、孔子釋して宜はく「積善の家に餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。君を殺し、父を殺すこと、一朝一夕の故にあらず。」といへり。毫釐も君を忽にする心を萌すものは、必ず亂臣となる。芥蔕も親を粗略にする形有る者は、果して賊子となる。この故に古の聖人「道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず。」と說けり。但しその末を學びて源を明めざれば、事に臨みて覺えざる誤あり。その源と云ふは、心に一物を貯へざるをいふ。而も虛無の中に留まるべからず。天地あり、君臣あり、善惡の報影響の如し。己が欲を捨て、人を利するを先として、境々に對する事、鏡の物を照すが如く、明々として迷はざらんを、眞の正道と云ふべきにや。代下れりとて自ら卑むべからず。天地の初は、今日を初めとする理あり。しかのみならず君も臣も神を去ること遠からず。常に其の知見を顧み、神の本誓を悟りて、正に居せん事を志し、邪なからん事を思ふべし。」と、更に「君としては、いづれの宗をも大概しろしめして、捨てられざらん事ぞ、國家擴災の御計なるべき。菩薩大士も掌る宗あり。わが朝の神明も取り分き擁護し給ふ敎もあり。一宗に志ある人、餘宗を譏り賤しむ、大なる誤りなり。人の根機品々なれば、敎法も無盡なり。況やわが信ずる宗をだに明めずして、未だ知らざる敎を譏らんは、極めたる罪業にや。我はこの宗に歸すれども、人は又彼の宗に志す、共に隨分の益有るべし。これ皆、今生一世の値遇にあらず。國の主ともなり、輔政の人ともなりなば、諸敎を捨てず機を漏らさずして、得益の廣からん事を思ひ給ふべきなり。且は佛敎に限らず、儒道の二敎の至り、諸々の道賤しき藝までも、具し用ふるを、聖代と云ふべきなり。」と、これによつて見るに、日本精神は國粹を保存し、日本特有の文化創造の源動力をなすべきものであることを知るべきものである。

日本精神の意義をより明明ならしむるために、現今の諸學者の見解を更に吟味することとする。谷本富博士は「國民精神とは何乎」といふ論文に於て「國民精神とは何乎といふことが、分つた樣で、はつきり分らないのは、どうしたことだらう？　我が國小學校令には、夙に劈頭第一に、國民敎育の基礎などと業々しく書いて置きながら、さりとは變だと云ひたくなる。尤もそれは或は我等が學者風に、漫に穿鑿するから、却て愈々迷路に彷徨する樣に成るので、只素直に平たく考へたならば、自明の理で、格別面倒な事ではないかも知らない。（中略）國民精神は國民精神だ、大和魂だといつて仕舞へば、全くそれで事は足りるので、稍々詳に言へば、例へば藤田東湖の正氣歌の如きは、よく國民精神活躍の事實を範示して餘りありと云へよう。人若し誠に此の東湖のものを以て彼の文天祥のそれと相比較したならば、日本人と支那人と、國民精神の必ず一でないことも亦、明瞭と成るだらう。」と述べてゐる。谷本博士は國民精神と大和魂を殆ど同內容に解してゐられるから、日本精神と國民精神は矢張り同內容と解し、何れも大和魂だといふことにならうと思ふ。井上哲次郎博士は「我が國民精神の特色」てふ論文に於て「一、正直廉潔の本具的性向　我が大和民族には本具的性向として、正直、廉潔の德が顯著に發展して來てゐるやうに考へられる。其の本具的性向を「神代卷」には「アカキココロ」と歌つてある。是れに反して良くない心を「クロキココロ」と稱するのである。時にはそれを「キタナキココロ」とも云つてある。大和民族は其の「アカキココロ」を非常に尊んで、其の心で以て萬事を遂行してゆくのが本來の精神である。それが大和心である。（中略）天武帝十四年に至つて八ッの位をお定めになつて初めの四ッの位を明位、淨位、正位、直位、と稱せられた。（中略）我が大和民族固有の精神の現はれとしては神道な

るものがある。神道を差し措いて國民精神を理會しようとしても、それは出來るものでない。國體神道に於いては、「アカキココロ」が其の基礎根本となつてをる。皇室を中心として行はるゝ凡ゆる國家的儀式は「アカキココロ」の顯現でないものはない。(中略)神社も眞心の現はれと見て差支無い。ところが、此の誠卽ち眞心は矢張り「アカキココロ」である。此の明き心を以て國民的に活動するところに大和心又は大和魂が存する。(中略)二、綜合統一の精神的作用　大和民族は比較的綜合統一の精神に富んでをるといつてよからう。我が日本は己を空うして支那文明、印度文明、西洋文明、總て外來の文明を輸入して、これを綜合統一して一層の發展を遂げようといふ態度である。之れを綜合統一するところの其の精神は卽ち大和民族の精神である。日本固有の精神である、苟も取つて以て我を稗補すべきものがあらば、如何なる文明をも輸入することを憚らないといふやうな態度である。若しも支那文明、印度文明、西洋文明といふやうなものを矢鱈に取り入れるだけで、綜合統一といふことをしなかつたならば、それは無定見、無比判乃至不見識の甚だしきものであるけれども、大和民族は決してさうでないと思ふ。さういふ諸種の要素をとり入れて綜合統一を計るべき天職を有してをるものと見てよからう。何處の國でもさういふ凡ゆる文明の諸要素を取り入れてをるわけではない。ところが大和民族は比較的虛心擔懷といふか、襟度宏量といふか、凡ゆる文明の諸要素を取り入れて之を咀嚼し、之を消化し、遂に總てを綜合統一して一層の發展を遂げんとするの傾向を有してをるものと思ふ(中略)三、淳化超上の思想的傾向　我が大和民族は文明の諸要素を取り入れて綜合統一するばかりではなく、淳化超上の思想的傾向を有してをることは歷史の事實に徵すれば餘程顯著であると思はれる。先づ佛敎の例に就いて考へて

みると佛敎は欽明天皇十三年に入つたのであるけれども、本當に佛敎が我が日本に扶植されたのは推古天皇の時からであらう。而して佛敎を始めてよく理解された方は聖德太子であつたに相違ない。太子の時には已に幾多大小乘の經文が入つて居たものと見えるが、其の中から太子は法華經と維摩經と勝鬘經とを撰出せられて、是れが義疏を書かれたといふことは實に太子の達見である。小乘の經文などは一も御撰びにならないで、大乘の經文中で殊に優れた經文である法華經を御擇びになつた。而して居士の經文として維摩經を御撰びになり又女人の經文として勝鬘經を御撰びになつた。而して三部の經文として御傳へになつたといふことは、餘程淳化超上の意義を示してゐる。(中略)四、陽性樂觀の精神的態度　我が日本民族は陽性樂觀の精神的態度を取つて來たことは歷史の證明するところである。先づ神話傳說に於いて考へてみるに、何等厭世悲觀の痕跡が無い。これに反し陽性樂觀といふ方面の事實は度々あるのである。第一　天照大神を最大の神として尊崇することも其の顯著なる一例である。之れに反して月讀命は惡しき神なりと稱してある。それから天孫降臨の際に眞先に御征伐されたのは天津甕星である。天津甕星も惡しき神と稱せられてゐる。つまり月だの星だのといふ夜の現象は喜ばれないで、眞晝の太陽を最も尊ぶといふ精神は陽性樂觀の徵候として看過すべからざる點である。それから以後の歷代の時代を遂觀して見ると、如何にも大和民族は陽性の民族で、何等厭世悲觀の痕跡は無い。若し厭世悲觀の民族であつたならば、疾くに滅びてをつたであらう。太陽を以て象徵とし、國名も日本と稱するのみならず、遂に國旗も日章旗となすに至つた次第である。どこまでも太陽が世界を照すやうな氣分を以つて起つて來る興國の民族である。(中略)五、仁惠愛憐の對外的發露　皇室は代々德政を行はせられた

結果、國民が益々皇室を神明の如くに尊崇敬慕するやうになつて來たのである。斯ういふ國體の下に活躍してをる大和民族は矢張り大體に於て仁惠愛憐の情を餘程よく對外的に發露して居るのである。我が日本に於いて何事も無いのに自ら外國に對して侵略的の意義を以て戰爭を起したやうなことはない。若しも外國が我に對して堪ゆべからざる侮辱を加へ我が國運を危くするやうな恐のある場合には斷然立つて之れを擊退し討滅するといふ態度を取つて來たのであるけれども、それは不正不義を膺懲するといふ意味で其度に至るので、全體からいふと、仁惠愛憐の對外的發露の事實は蔽ふべからざるものであると思ふ。(中略) 六、大勇威力の正義的敢行　我から進んで無意味の侵略戰などは遣らないけれども、外國が我に對して甚しき侮辱を加へたり、又國運を危くするやうなことをしたりすれば、決して容赦しない。乃ち驟然として起つて之れを擊退し、場合によつては之を殲滅するといふやうな態度に出で、大いに武勇を揮かすと云ふのが是れが我が國古來取る所の態度である。蒙古であらうが、露國であらうが、支那であらうが何ういふ外敵でも不正不義を敢てする場合には必ず之れを討伐し、十分に其の目的を達するやうに努力して來たもので、過去數千年の歴史が餘程よく之を證明してをるのである。それで我が國は古來名無きの戰を起したことはない。戰を起せば必ず義戰でなければならぬ。武勇も徒らに之れを表はすのではつまらないけれども、道義に協つた戰爭などに表す場合には何物も敵抗することの出來ないといふのが通例である。武士道といふものの起つて來たのは矢張り君國の爲めに道義的の精神を以て武勇を表はすが爲である。それで我が國に武士道の發達して來たといふことは決して偶然でない。(後略)」　井上博士は日本精神を分析的に研究して其の特色を闡明にしてゐる。これによつて日本精神の屬性

とか內容といふものがかなり判然して來たことと思ふ。最後に小西重直博士の日本精神についての見解を近著「思想千秋」によつて瞥見しよう。「日本國民には日本精神がなくてはならない。獨逸人には獨逸精神があり、佛國人には佛蘭西精神があるであらう。永い歴史を有する國民は大抵それ〴〵の特殊な個性を有するのである。而も私は日本精神といふものは決して孤立的な特殊性ではなく、人間性一般にも通じ又普遍界に根ざし普遍性を具體的に顯現しつゝある所の大精神であると思ふのである。斯くあつてこそ眞の個性としての日本精神であると思ふ。……人間に於ける眞實性が具體的に作用する時には敬愛信の三つの作用として表はれて來るのである。……此の眞實性敬愛信といふ精神は人間界に於ける一切の價値を生む力であり、一切の文化を生み出だす所の母である——此の點は世界の何れの國民にも同樣であり、人間一般に共通であるのである。日本は此の樣な一般的な基本精神に立ち、而も日本獨特の歴史的個性としての義は君臣にして情は父子といふ美しい精神をもつて居る。親心と子心の融合、分明な義と情との融合を根本精神としてゐる所の大家族の生活が日本人の生活であり、またあるべきである。而も此の義といひ、此の情と言ひ、公明な親心と言ひ、子心と言ひ、皆これ人間の眞實性を基本としてゐるものである。絶對者の完全なる眞實の具體的顯現としての人間の眞實性こそ斯樣な義と情との中心生命である。親心子心の中心生命である。……要するに日本精神の特質とする所のものゝ中に、義と情との調和、物と心との調和といふ樣に、凡べてのものゝ間の調和の姿が見られるやうに思はれる。從つて日本精神には無理がなく、明らかさがあり、純潔明澄にして而も大調和の崇高さが感ぜられ、天地自然の道としての貴さが味はれる。……日本精神は大きな意味に於て文化を生みて之を育て上

けゐ母性のやうなものである。この故に佛教でも基督教でも儒教でも、日本の精神によりて同化されたのみでなく、夫れ〳〵また新しい生命を吹き込まれてゐる。日本精神は實に苟くも眞實なるものに對してはこれを粗末にせずに敬愛信の態度を以て、眞實の精神を以て愛育して居るのである。吾々が廣く智識を世界に求むるのもこれが爲である。而も廣大にして、慈愛に充ちてゐる親心といふものは世界に於て眞實ならざるものは之を敎化し、世界に於て醜惡なるものは之を淨化し美化して、眞實な人間となし、立派な國民となさんとする純な熱情をもつて居るものである。斯樣な母性的な態度、親心的な努力に對して妨害を試むるものはこれ實に文化の敵である。こゝにこれを防ぐ所の勇武の精神が起らざるを得ないのである。母親が身を犧牲にして愛兒を保護する樣な決死的奉仕の精神も湧いて來るのである。」と、小西博士によれば、日本精神は孤立的な特殊的なものでなく、人間性一般、殊に眞實性が基本精神となりこれが特殊の歷史的個性によつて彩られたものであるといふのである。

以上によつて、日本精神の定義及概念がほゞ明瞭になつたであらうから、更に進んで、日本精神の顯現を國史に就いて論ずることにする。

三　國史を彩る日本精神

（一）上代に於ける日本精神

日本歷史は日本の出來事であり、日本精神を主體として形造られたものである。されば日本精神を他にして、眞の日本歷史を闡明することは至難であり、日本歷史といふ事實を他にして、抽象的なる日本精神といふものを考へることは出來ない。されば建國の當初卽ち國家として十分の發達をとげず、國民の知力も極めて幼稚にして、その國家觀といふようなものは哲學的に理論的に認識が完全であつたかといふことは一言に斷ずることは出來ないが、尙ほ日本精神は十分に顯現せられてゐたのである。

一、神の觀念　日本精神を闡明せんとせば、先づ上代に於ける神の觀念から出發せねばならぬ。我が國の神は、我が國特有の觀念に基づくものである。「かみ」といふ言葉について、忌部正通は「かみ」を嘉牟嘉美の略語なりとし、「かゞみ」といふのもここから出てゐる。而してその意味はといへば、神慮は明鏡の萬物を照すが如く、一法を捨てず、一塵を受けないといふやうに釋してゐる。新井白石は、「神とは人也。我國の俗、凡ての尊ぶ所の人を稱して加美と云ふ古今の語相同じ。これ尊稱の義と聞えたり。今字を假り用ふるに至つて、神としるし、上としるす等の別は出來れり」と說き、伊勢貞丈は「神をかみと云は上也、貴ぶべき物なる故、上におはします名にて、かみと云也」と。

然らば神の內容は如何といふに、宣長が「鳥獸木草のたぐひ、海山など、其餘何にまれ、尋常ならず、すぐれたる德のありて、可畏きものを迦微とは云ふ也。」又「すぐれたるとは、尊きこと、善きこと、功しきことなどの勝れたるのみを云に非ず、惡きもの、奇しきものなども、世にすぐれて可畏きをば、神と云なり。」と、

かゝる觀念の間に於て、伊弉諾、伊弉冉の二神をはじめ、多くの神々は、人格を有せられる點からすれば靑人草と異るところはなかつたが、思想、感情、性格に於て拔群であられたので、靑人草の上となつてこれを支配し、統御な

さつたのである。これが日本特有の神の觀念を生むに至つたのである。我が日本精神の根本神は造化之神に始まり、伊弉諾、伊弉冉、天照大神と進んで、現代の現人神たる天皇にまで及んで來てゐるのである。

二、皇室の尊嚴　我が國に於ける皇室の尊嚴についての觀念は、上代に於ける神話を一貫してゐるところの國民理想である。此の日本は之を建設せられたところの皇祖天つ神直系の子孫によつて永遠に統治せらるべきものであるといふことである。上代にあつては、畏くも天照大神は、當時の生活の中心として仰がれたまひ、國民のあらゆるものは崇敬し奉り、誰一人としてその高大なる光威を認識し奉らぬ者はなかつた。されば高天原に君臨あそばされて統治せられたのである。故に素盞嗚尊の如き神があつて、その尊嚴を侵し奉ると、八百萬の神々は天照大神の御ために奉仕して不祥神を排斥せられたのである。かくして皇祖神であられた天照大神の御尊嚴は、如何なる偏僻遠隔の地方にも早くから弘化を及ぼして居られたのである。

日本國の理想の明確なる表現は實に皇祖の神勅である。

豐葦原千五百秋瑞穗國は之れ吾皇孫の王たるべき地なり爾皇孫就て治せ行矣寶祚の隆天壤と窮なかるべし。

萬邦に冠絶する日本の精華は何處にあるかといへば、三千年來萬世一系の皇室を奉戴し、我々の生命を營んで來たことである。萬世一系の皇室をいたゞいて我々の生命の發展をつとめて來たといふことは、或る一點を中心として我々の生命の營みが組織的に今日に及んでゐるといふことである。

古代の神聖なる云爲行動を活規範として、歴代の天皇は、深く人民を慈しませ給ふたのである。元明天皇御即位の大詔に、

「遠皇祖の御世の始めに、天皇が御世御世、天つ日嗣と高御座に坐して、此の良國天下を、撫で賜ひ慈み賜ふ事は辭立つに在らず、人の祖のおのが弱兒を養ひ治す事の如く、治め賜ひ慈み賜ひ來る業となも、隨神念ほしめす」と仰せられてゐる。而して國民たるものはこの御高恩に浴しつゝ生命を營んでゐるのであるから、皇室に對し奉つては最後まで全我を捧げて奉仕するのである。この皇室中心の觀念に苟も反する者に對しては、國民は自ら之れに制裁を加へ寸毫も假借せぬのである。

「是に猨田毘古神を送りて還り到りて、乃ち悉に鰭の廣物・鰭の狹物を追ひ聚めて、「汝は天神の御子に仕へ奉らむ耶」と問言ふ時に、諸の魚ども「皆仕へ奉らむ」と白す中に、海鼠白さず。爾天宇受賣命、海鼠に謂ひけらく、「此の口や答せぬ口」と云ひて、紐小刀以ちて其の口を拆きき。故に今に海鼠の口開けたり」(古事記上卷)

と、古來皇室中心の思想に反する時は、大罪と認めて徹底的に懲戒したと同時に、皇室に對しての奉仕の念は、歌人大伴家持の「海行かば」の歌に實によく現はされてゐる。

海行かば水つく屍、山行かば草むす屍、
大君の邊にこそ、死なめ顧みはせじ

これ大君を眞唯中に擁し奉つて、その周圍に生き且つは戰ひ且つ死なう、決して顧みはしないといふ意味で、この永遠不滅の一點を中心として、これを取圍んで生も死も、我々の生命を營んで行かうとするので、上代日本國民の精

神を如實に表現したものである。

三、國民精神の發展　上代にあつては、朝廷に於かせられては、天孫に下したまはつた神勅に隨はれて、神鏡を宮中に奉安し、天照大神の御神靈を御祭りになつたのである。このことは天孫降臨の際に、天照大神は、天孫に神鏡を授けさせ給ふて「此の鏡は、專ら我が御魂として、吾が前を拜くが如く、いつき奉れ」と宣たまへるによるものである。北畠親房は當時の宮中の事について、

「神武天皇都を大和國橿原に奠められしとき、天照大神の御寶八咫鏡及び草薙劍を以つて、大殿に安置し、床を同じうして座し給ふ。蓋し往古の神勅の如し。此れによつて皇居神宮差別なし宮中に庫藏を立て此を齋藏といふ。官物神物分たるなし。云々。此の時天兒屋根命の孫天種子命、專ら祭祀の事を主るこれ卽ち朝政を執するの義なり。」と述べ、更に齋部廣成は卽位四年の祭祀について「乃ち寶時を鳥見の山中に立て、天ノ富命、幣を陳ね祝詞まをして、皇天を禮祀し、偏く群望を秩いで、以つて神祇の恩に答へき。是を以つて、中臣、齋部の二氏、俱に祠祀の職を掌り、猨女君氏、神樂の事に供し、自餘の諸氏も各々其職有る也。」

と、當時の氏族制度について記してゐる。

天業を愈々弘通せられ、神祇を崇敬せられ、惟神の精神によつて天下を治められしは、崇神天皇の御宇になつて、一層著るしくなつたのである。かの四道將軍の派遣のことは、我國固有の精神を以て各地の人民を敎化し、廣く日本精神の普及徹底をはかられたのが根本義である。帝の詔勅に、

「民を導くの本は、敎化に在り。今旣に神祇を紹して、災害皆耗きぬ。然れども淳荒の人ども、猶ほ正朔を受けず是れ未だ王化に習はざるのみ、其れ群卿を選びて四方に遣はし朕が憲を知らしめよ」

とある。又、垂仁天皇は、

「今朕が世に當つて神祇を祭祀すること、豈に怠ること有るを得んや」

と仰せられて、伊勢に神宮を設けて、倭姫命をして、天照大神に奉仕せしめられた。これ日本精神上に於ける重大なる事件である。伊勢に奉安せられて以來、萬世永に變ることなく、其の礎の堅固なる、天下の神社の中心と仰がれ給ふと共に、日本精神の中心とも考へられ、實に、日本國民の政治上、信仰上、道德上に於ける統一の中心ともなられたのである。

（二）外來文化と日本精神

凡て文化の發達は、自國の有する文化と違つたものと接することが必要である。違つた文化に接し、自國の文化の足らざるところを、彼より取り入れるといふことが自國文化の發達を催進する所以である。されば我が國文化の發達上支那及印度の文化が影響してゐることを否むことは出來ない。この點について外來文化萬能論者は我が國には固有の文化といふものはなく、我が國に於て獨自の文化であるが如く思つてゐるものも事實は外來の要素から成つてゐるといふ極端な意見をもつものがあるが、之は他を見ることのみに過ぎての、我獨自性を閑却したものである。又、一方には、日本には日本獨自の文化があつて、外來の文化はむしろ效果なくして、獨自の文化を不純ならしめたに過ぎない

と說くものもある。これも偏頗の所說である。外來文化が日本精神文化の形式や內容を刺戟して、之が發達徹底に寄與したことは認めねばならぬ。勿論一面には外來文化の弊害もあつたには相違ないが、日本精神文化は、外來文化の影響によつて躍進をこそ致したが少しの萎縮をもしてはゐないのである。それは外來文化の影響の跡を攻究する時此の間の消息を明らかにすることが出來るからである。

抑々文化の發達には如何なる要素を要するであらうかといふに、それは日本精神の特質に由來するものである。然らば日本精神の特質如何といふに、第一は受容性に富んで居り、第二は自主的であるといふことである。前者は進發性であり、前進性であり、發展性であり、向上性であり、文化性である、後者は守保性であり、懷古性であり、同化性である。この二性質のうち一に傾き過ぎる時は、必ず國家生活、國民精神が歪曲されるのである。試みに包容性にのみ富んでゐる國民であるならば、自國といふものについて明確なる認識なく、他國の文化に陶醉してしまふに至るのである。我が國の歷史に徵するに時に外來文化に眩惑して、日本の文化的存在を忘れたる者がないではなかつたが一方には、外來文化を同化することにつとめたのが大勢であつた。又、外來文化の罪業に恐れをなして、あだかも門戸を閉ぢるかの形をなして、外來文化には目をそむけ、それの正當なる認識をも敢てせずして、素朴的なる過去の自家文化にのみあこがれるといふ者もあつた。我在るを知つて他あるを知らざると、他あるを知つて我の存在を無視するが如きは共にとらざるところである。我が日本精神の特質なる進步と保守との調和こそ實に、日本文化を今日にまで推進せしめた動力である。

進步と保守とは共に文化を發達せしむる上の動力であるとはいへ、これが指導原理は何んであるかによつて、その進步乃至保守が健全であるか、不健全であるかの分岐點である。進步が發達の要件であるとはいへ、その進步の方向如何によつては進惡を招來するのである。進步は進善でなければならぬ、無暗矢鱈に進むのみでは、それが國家にとつて、如何なる影響があるかを考案し批判する原理がなければならぬ。保守にしても然りである。古くから在るといふことは單なる存在で、それが價値的存在であるか否かは、その存在を價値化するに必要なる判斷の證據がなければならない。保守にしても價値的存在を保守せねばならぬし、進步にしてもそれが價値ある方向に向けられねばならぬ。日本文化の精神であり、日本文化發展の唯一中心は萬邦無比の我が國體である。外國の文化にして、如何ばかり善美であり、又善美に見えても、それが我が國體を危からしむるが如き性質を有するものであるならば、斷々乎として去斥せねばならぬ。これ一に自主的精神に待つてのみ可能である。そこで日本國民が偉大であるか否かは、かゝつて日本國民が日本精神を確把し且つ之に徹してゐるか否かによつて決せられる問題である。

我が國に對する外來文化として最も國民の精神生活に甚大なる影響をもたらしたものは、何といつても儒敎と佛敎とである。兩者は共に我が國の文化の發達上重大なる關係をなしてゐるのである。我が國は古來神の道で、道德も儒敎をとり入れることによつて、その形式をとゝのへ、內容を豐富ならしめたのである。又、佛敎の影響によつて、國民の思想生活が深化し、道德は高揚され、神道もその內容を更改せるところは何人も認めざるを得ないのである。殊

に我が國の美術に對する佛教藝術の影響は極めて著大なるものがあつたのである。

一、儒教と日本精神　儒教の影響の第一としてあげられる例は、應神天皇の崩御せられし時、菟道稚郎子は、皇太子でありながら、皇位を皇兄大鷦鷯尊に讓られた事である。我が國上代の相續は、必ずしも長子が繼ぐとは限られて居なかつたのである。菟道雅郎子は、

「夫れ天下に君として以つて萬民を治むるは、蓋ふこと天の如く、容るゝこと地の如く、上に驩心有りて以つて百姓を使はしむれば、百姓欣然として天下安らかなり。今我は弟なり、且つ文献足らず、何ぞ敢て嗣の位を繼いで、天業に登らむ。大王は風姿岐嶷、仁孝遠く聆え、齒また長ぜり。天下の君たるに足らむ。先帝の我を立てゝ太子と爲す豈に能才あるがためならんや。唯々之を愛すればなり。亦宗廟社稷に奉ずるは重事なり。僕は不佞なり、以つて移るに足らず、夫れ昆は上にして季は下に、聖は君にして、愚は臣なるは、古今の常典なり。」

とて、帝位に登らず、又、大鷦鷯尊も、

「先皇謂はく、皇位は一日も空しかる可からず。故に豫め明德を選んで、王を立てゝ貳と爲し、祚へたまふに嗣を以てし、授けたまふに民を以てせり。其の寵章を崇めて國に聞えしむ。我れ不賢なりと雖も、豈先帝の命を棄てゝ輙く弟王の願に從はんや。」

と固辭した、この史實は實に儒教の影響によるといはれてゐる。

其の他、文武天皇の詔に

「道德仁義は禮に因つて乃ち弘まる、教訓俗を正すは、禮を待ちて成る」

と、元明天皇の詔に、

「凡そ政を爲るの道は、禮を以つて先と爲す。禮无くんば言亂れん。言亂るれば旨を失せん」

と宣はれてゐる。天武天皇は、

「天下兩分の祥なり、然も朕遂に天下を得ん歟」と仰せられてゐるのは、陰陽道に基づく思想である。

儒教の影響は其の例を擧げ來らば枚擧に遑なきまでであるが、我が國體と相容れぬ思想も儒教にもかなりあつたのである。其の第一は、革命についての思想である。革命とは命を革むといふので天がその命を革めるといふ意味である。支那に於ては、君主は天の命によつて民を治めるのである。君は臣の中から德の高きものを選んで民を治めしめるのであるから、即ち天命である。天子たるべき條件は德を備へてゐるといふことであるから、天子にして其の德を失へば天は其の命を革めて他のものをしてこれに代はらしめるのである。之が易姓革命である、天子にして其の子が君たるの德を備へて居らぬときは天命を待つことなくして他姓のものに位を讓るのである。之を禪讓といふのである天子にして德なき場合又は、天子が德なき子に位を讓る如き場合には、諸侯又は民間から出て之を放つて自ら代つてよいこととなつてゐる。これを放伐といふのである。而してこの場合の放伐は天が命じたものであると見るのであるされば支那にありては天命も革命も禪讓も放伐も同一の精神によるものとせられてゐるのである。

即ち支那にありては君主としての資格は一に君德といふ事のみであつた。然し事實としては必ずしも有德者のみが

君主となつたのではなくして、實力をもつて放伐を行ひ、而かも天命なりとするに至つたのである。

然るに我が國に於てはかゝる思想は之を認めることを許されない。我が國の君主は、天祖の神勅に昭乎として示されてある如く、皇祖天つ神の直系の御子孫であらせられるといふことが信念となつてゐる。卽ち血統主義である。天皇の位は天皇の御血統の中に本來的に固有のものである。皇室に生れたまふて、其の血統の相續者であらせられるといふことは實に我が國體の根本義である。

儒教が如何に甚大なる影響をもたらしても、それが我が國體觀念と相容れぬ思想は、全然排斥して、毫も取り入れるが如きところのなかつたのは實に日本精神の特色たる自主的精神の然らしむるところであり、根本的に儒教にかぶれるか如きことのなかつた所以であり、日本國民の優秀性を發揮するものといふべきである。

儒教にあつては君主の唯一資格として德をもつてした。我が皇室に於かれては、儒教がとり入れられて以來といふものは、儒教の長所たる德治主義の精神をおとり入れになつてゐる。蒐道雅郎子と大鷦鷯尊との皇位の讓り合ひは實に德治を以つて民に臨まるべきことを物語るものである。歷代の詔勅などにも此の德治主義が高く强く拜されるのである。

二、佛教と日本精神　儒教は現世主義で、我が國民の思想と相容るゝところが多かつたが、それに次いで渡來した佛教は未來主義であり、且つ根本に於て我が國の思想と相容れぬ者が多かつた。佛教が我が國に傳來したのは、繼體天皇の御宇に司馬達等が佛像をもつて渡つて禮拜したのにはじまるといはれてゐるが、正式には欽明天皇十三年といふ

ことになつてゐる。百濟の聖明王の上表によれば、

「是の法は諸法の中に於いて最も殊に勝れたり。解し難く入り難し。周公孔子も、なほ知ること能はず。此の法能く無量無邊の福德果報を生じ、乃至無上の菩提を成辨す。譬へば人の意に隨ふ寶を懷いて、用ふべき所に逐ひて、盡く情のまゝなるが如し。此の妙法の寶も亦復然り。祈め願つて情に依ひ、乏しき所無し云々」

と、天皇はこれを聞こしめされて、

「朕昔より來、未だ曾て是の如き微妙の法を聞くことを得ず。」

と詔らせたまふて、「然れども朕自ら決せず。」とのたまふて、群臣に

「西蕃の献れる佛の相貌端嚴、余未だ曾て看ず、禮すべきや否や。」

と、この御言葉に對して、蘇我稻目は

「西蕃諸國一に皆禮す。豐秋日本豈獨り背かむや。」

と、お答へ申し上げたのである。而してこれに反對論も起り、佛教を中心として奉佛、排佛黨の爭となり、これが益々激化したのである。

佛教の思想が若しも進步主義の一方に偏し、自主的精神が乏しかつたならば、而して佛教が日本に於て徹底的に行はれたならば日本固有の精神を消滅せしめざるを得ないのであつた。然るに日本精神は神代に於て鞏固な根深き發展をとげて來たのである。故に佛教が如何に絕大な魅力を以つてしても、日本精神の根柢をゆるかすといふことは出來

ないのである。されば、聖德太子の如き深く佛敎を信ぜられたお方にあつても、尙且つ其の精神內には日本思想の不拔の存したものを認むるのである。

太子の十七條憲法の第二條に、

「篤く三寶を敎へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法を貴ばざる。人尤だ惡しきもの鮮し。能く敎ふれば之れに從ふ。其れ三寶に歸せざれば、何を以つてか枉を直うせむ。」

同第三條に、

「詔を承けては必ず謹め。君は則ち天とし、臣は則ち地とす。天覆ひ地載す。四時順行して、萬氣通ふことを得。地天を覆さんとするときは則ち壞るゝことを致さんのみ。是を以つて君言たまふときは臣承る。上行ひたまふときは下靡く。故に詔を承けては必ず愼め。謹まざれば自ら敗れなん。」

同第十二條に、

「國に二君非く、民に兩主無し。率土の兆民王を以つて主と爲す。」

同第十五條に、

「私を背いて公に向くは、是れ臣の道なり。」

とある。

聖德太子の當時には、一方には崇佛が行はれたとはいへ、それは上流社會にとどまつて、一般國民は國神を崇敬してゐたのである。この事は元正天皇の詔にも、

『諸國の寺家、多く法の如くならず、或は草堂始めて、闕て額題を爭ひ求む、幢幡僅に施して卽ち田畝を訴ふ。或は房舍修めず、馬牛群聚し、門庭荒廢して、荆棘彌々生ず。遂に無上の尊像をして塵穢ならしめ、甚深の法藏をして風雨を免れざらしめ、多く年代を歷て絕えて構へ成すこと無し。事に於いて斟量するに、極めて崇敬に乖けり。』

と仰せられてゐるにても察知される。

孝德天皇は佛法を尊ばれたまひしかども、一方には、國家統治の大本としては、日本國有の思想を發揮なされてゐる。その卽位の詔に、

「天は覆ひ地は載す。帝道は唯一なり、而るに末代澆薄、君臣席を失へり。皇天手を我に假して暴逆を誅殄す。今共に心の血を瀝ぐ。今より以後、君に二政なく、臣に貳朝無し。若し此の盟に貳かば、天災ひし地妖ひし、鬼誅し人伐たむ。皎しきこと日月の如し」

と仰せられてゐる。

大化二年の詔に、

「朕聞く、明哲の民を御するは、鐘を門に懸けて百姓の憂を觀、屋を衢に作つて路行の謗を聽く。芻蕘の說と雖も親ら問うて師とし給ふ。是れに由つて朕前に詔を下して曰く、古の天下を治むる、朝に善を進むるの旌、誹謗の木有り。治道を通して諫者を來す所以なり。皆廣く下に詢ふ所以なり。」

と仰せられ、大化三年の詔に、

「朕聞く、西土の君其民を戒めて曰く、古の葬は高きに因つて墓と爲し、封かず。樹うゑず、棺槨は以つて骨を朽せしむるに足り、衣衾は以つて實を朽せしむるに足る而已」

とあるは日本古來の美風を革められてゐるので外來思想の影響である。

聖武天皇の天平十三年の詔に、

「頃者、年穀豐ならず、疫癘頻りに至る。慙懼交々集りて、唯々勞して己れを罪す。これを以て廣く蒼生の爲に遍く景福を求む。故に前年驛を走せて、天下の神宮を增飾す。去歳普く天下をして、釋迦牟尼佛の尊金像、高さ一丈六尺なるもの各々一鋪を造り、並に大般若經各々一部を宗さしめたり。今春より已來秋稼に至るまで、風雨順序、五穀豐に穰れり。此れ乃ち誠を徹はし、願を啓くこと靈貺答ふるが如し。載ち惶れ載ち恐れて以つて自ら審くすることなし。云々。宜しく天下の諸國をして各々敬みて七重の塔一區を造り、並に「金光明最勝王經」「妙法蓮華經」各々十部を宗さしむべし。朕又別に擬して金宗の「金光明最勝王經」を宗して塔毎に各々一部を置かしむ。」

と、それは佛教によつて、國利民福をはかられ給ふたのである。

神佛の習合は大佛造營の完成の頃に愈々盛んにとなへられるに至つた。

稱德天皇の詔に、

「復勅りたまはく、神だちをば、三寶よりさけて觸れぬものぞとなも人の念ひてある。然れども經を見まつれば、佛の御法を護りまつり、尊みまつるは、諸々の神だちにいましけり。かれ是れもて出家人も、白衣も、相雜はりて、供奉るに、豈に障はる事はあらじと念してなも、本忌みしがごとく忌まずして、この大嘗はきてしめすと宣り給ふ御命を諸聞合さへと宣る」

この詔によれば、我が國の天神地祇を印度の善佛と同視せられてゐることが首肯される。

平田篤胤は

「元來、佛法と云ふことは、釋迦の始て考へ作りし事にて、一通りのことにては、その國人も會得いたさぬ故に、先づ過去の七佛と云ふを立て、又已れからして久遠劫と申て限りもなく遠き前から成佛なし、都率天と云ふ天に居つたる善賢菩薩と云へる佛なるが、衆生濟度の爲に今の身卽ち釋迦と垂跡して、此の世に出たる由を僞つて、その道を弘めける處が、其の後の僧どもが、夫を受け、益々本地垂跡の姦說が委く相成り、夫より佛法漢土へ渡たる所が、云々。漢土にはより儒者と道士とがありて、とかく佛法を拒み賤る故、佛者どもが思ひつきて、儒者の本尊とする孔子も、また孔子第一の弟子の、後の世にも尊ぶ所の顏回、又、道士の尊ぶ所の老子を其の本地は天竺の菩薩、則ち釋迦の弟子なるが、唐へ生れて、その地相應の道を說きたるものじやと云て、其事が、天竺より渡りたる佛經に釋迦が己に言ひ置いたる「淸淨法行經」また「冢墓因緣經」など云、梵經を翻譯する時、そのいひくさとすべき語を書き加へて、世にひろめ、大きに儒者と道士の鼻をひしいだもので御座る。是れにたまけて儒者も、道士も佛法に歸依したるもの少からず、又その以下のものは、猶これに驚いて佛信者になつたと申すことで御座る。」

と述べてゐる。

佛教のもつ特色と我が國のそれを比較して見るに、佛教は超國家的である、言ひかへれば佛教は人類的であり、國際的であるといふことが出來るから、世界教である。從つて國家といふものを佛教は認めてゐない。勿論佛教の中にも國王の恩を四恩に數へ、經典中にも國といふ言葉が出て來るから、國家を否定してゐるのではないが、大局からするときは世界教であるといふべきである。然るに我が國民思想は國家主義である。日本精神の基調としての神道は國祖を崇拜し、國祖の靈に賴つて、日本の隆勝を圖らうとするのであるから國家主義である。此の點佛教は日本の國民精神と調和するために儒教とは比べものにならぬ長年月を經て居るのである。

第二に佛教は未來主義である。從つて日本精神の特色たる現在主義と相容れないものであつた。佛教は現在を否定した人間の現世に於ける生活といふものは假の相であり、幻影である。故に人間は一切空の理を知らねばならぬと說くのである。この幻の世界、夢の世界として現世を觀じ、死後の樂土を求むることに努めねばならぬ。然るに我が神道は現世の生活に價値を發見し、國家生活を重視し現實としての自己を尊び、更に此の國家を統治せられる天皇を絕對尊貴の方として尊崇し奉るのである。

佛教に於ては未來の生活、死後の生活を欣喜するのであるが、我にありては生活としては現世に重點を置き、死者に對しては現世生活を立派になし遂げしものとして、現世生活を價値的に向上進展せしむることに貢獻のあつたこと現實としての我の源としての祖先尊崇の觀念、敎本反始の至情から出發するものである。然しこの死者に對する祭忌

の如きを懇にするについては佛教の良き影響によることは言ふまでもない。

佛教は平等を說くものである。階級を認めず一切の人間は平等であると主張する。然るに我が國に於ては、天皇を絕對尊貴と仰ぎ奉ることが、國家の根本主義であり、國家肇造の國祖の御子孫たる天皇はゆるぎなき我が國體の絕對中心であらせられる。故に平等を主張する宗教はそのまゝ我が國性に入ることは出來ないのである。

(三) 武士道と日本精神

日本精神について論ずるものは、武士道こそ眞に日本精神の實現形式であるとする者が多い。武士道は武士てふ特殊の階級にのみ特有のものではなく、すでに太古より日本民族の特有とする武勇忠義の觀念が、武士の發生によりて組織化せられて、日本精神の特色をその本領としたために、日本精神卽武士道といふ觀念を生み、今日に至つては武士階級なくすべての國民が皆兵たるに及んで、日本精神卽武士道といつた觀念は國民全體の體得するところとなつたのである。「武士道は神代より傳來したる御法の道なり」と大原幽學が言へりし如く、武士道の萠芽は實に我が國上代より國民の具有せる性情であつた。夙に日本民族の精神的特色を形成したところの國民性たる大和魂が特殊の社會狀態の下に於て鍛錬せられて成れる遵法的觀念である。

大伴家持が、

「海ゆかば水づく屍山行かば草むす屍
大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」

と祖訓を歌ひ、また

「鄭太刀いよ〳〵研ぐべし、古へゆさやけく負ひて來にしその名ぞ」

と詠ぜる如き、又、一武夫が

「丈夫は名をし立つべし、後の世に、

聞繼ぐ人も語りつぐがね」

と歌ひしによつても、武士道の起源の遠きを知るに足るであらう。

然し一般的には、平安朝に於て逆臣の榮華に耽りしため、地方政治の弛頽を來し、必然的に武士の發生乃至興起の氣運を造つたのである。殊に東國の武人は、その團結力强く、弓矢の家と稱するものは何れも、數多の家の子郎黨を養ひ、農民の信賴を得、漸次にその勢力を擴張したのである。その中にあつても源平二氏は最も强大にして、相對立して實力の增殖をはかつたものである。彼等は戰場に於ては武功を奬勵し、日常は部下に對する武士的教養につとめ、規律は嚴正にして、勇氣を振作し、弓馬の藝を勵まし、克己の德を重んじ、名譽を尊重し、主從關係は世襲的にして主君のためには何者をも犧牲として省みざるところの信念を養つたのである。武士道の發達上に於て鎌倉時代の二大人物としては頼朝と泰時とを擧げねばならぬ。頼朝は敬神崇佛の念深く、質素儉約を重び、部下に對しては廉潔を主として武藝を勵ましめ、節義を尚ばしめた。又、泰時も、敬神崇佛の念厚く、民情に留意し、儉素を尚び、禮儀を厚くし、名譽を尚び、常に冷靜沈着を持してゐた。

鎌倉時代の武士は、身體を鍛錬し、躬行を尚び、恩義觀念深く、信仰心厚く、廉恥を重んじ、尾籠の行爲を戒め、武勇を勵まし、儉素を尚び、然諾を重んずることを方針とした。

次いで戰國時代の武士道は、

(イ) 奉公の誠を致し、忠節を盡すべし。

(ロ) 神佛を信仰し、天道を畏るべし。

(ハ) 平生よく武藝を練磨し、武具を嗜むべし。

(ニ) 文を左にし、武を右にして、歌道の心得もあるべし。

(ホ) 質素儉約を守りて、己れに克つべし。

(ヘ) 正直を旨とし、廉潔を尚ぶべし。

(ト) 家名を貴びて恥を知るべし。

(チ) 協心同力して家運を扶け又戰捷を期すべし。

(リ) 禮儀作法を重んじて、尾籠なるべからず。

(ヌ) 常に間隙用心に身を固めて、聊も油斷あるべからず。

の十種を武士に共通なる道德的精神として敎訓したのであつた。

然るに德川時代となるに及んで、武士の道德はいつとはなしに、不文の士法士規となつて、武士道の精神が大成する

にいたつたのである。德川時代の武士の道德思想は、

（イ）主家に對して專心御奉公を勵むべし。
（ロ）忠孝兩全を期すべし。
（ハ）義を重んずべし。
（ニ）武勇を尙び、武藝を鍛錬すべし。
（ホ）武士たるの職分を自覺して、己れの分限を守るべし。
（ヘ）學問を怠るべからず。
（ト）質素儉約を守るべし。
（チ）克己忍耐して、心身を修練すべし。
（リ）名譽を重んじ、恥を知るべし。
（ヌ）正直淸廉なるべし。
（ル）禮儀作法を重んじ、法度を畏るべし。
（ヲ）祖先を崇むべし。
（ワ）尊皇愛國の精神を重んずべし。
（カ）神佛を尊信すべし。

（ヨ）仁愛の情深かるべし。

の十五項が數へられてゐる。

武士道の特質を論ずるに當つて、古來武士道の內容としてあげられてゐるものを見るに、まづ力丸東山が武學啓蒙に於て述ぶるところによれば、

武士の心得べきもの二十一箇條

一、弓馬の道は武士の常なれば、片時も怠るべからざる事。
一、神佛を崇むべきこと。
一、君恩を重んずべきこと。
一、先祖を思ふべきこと。
一、朝はいかにも早く起くべし。遲く起きぬれば、召つかふ者までも、油斷多く、自身にも公私の用を缺き、不勝手なること多しと知るべし。
一、夜大抵は早く寢るべし。是深夜の用心になることなり。前夜、よしなき雜談に費ゆる薪、燈を、明朝早起の用とし、ゆあび、くしけづりまでの行儀を整へ、其日の用むきを妻子けらひ等に、しかゞといひ付、一途には非ざれども、凡そは六つ前に出仕するものと心得べし。
一、朝、早く起きたらば先厩より庭、門前までも見まはり、掃除すべき所は、似合の者にそれゞ言付くべし。尤

も慣みはいつも同じけれどもわけて早朝など、己が内なればとて、高く聲ばらひするより、萬の物音、少しく遠慮すべし。

一、刀、衣裳の類、人にすぐれて、結構にあるべしと貧るべからず、見苦しからざればよしと心得べし。

一、出仕の時はいふに及ばず、或は少しくわずらひ、又は所用あつて宿所にあるべしと思ふ時も、髪を早く結ふべし。はふけたる體にて人に見ゆることは、慮外にも又拙き心ざまなり。是も武士身もちの一つと心得べし。

一、出仕の時、まづは直にお前へ參らず、次に伺候し、諸朋輩の躰をも見繕ひ、辭儀、挨拶を爲し、それより、お目通へ出づるものと心得べし。

一、仰せ出さるゝことあらば、お側へはひより、いかにも謹で承り、さて急ぎ罷出でその旨を申し整へ、おへんじ有りのまゝに言上し、私の口才を交ふべからず、但し事により此お返事は何と申しよからんやと思ふことあらば、宿老朋輩にも問謀りて後に申上ぐべき儀、品と事とによりて差異あるものと心得べし。

一、お通りにて、物語などする人のほとりに居るは宜しからず、先は、かやうの場は、外へさくるやうにすべし。まして我身、雜談戯笑などしては、上々のことは申すも更なり。朋輩にても、心ある人には、之らのすぢより見限らるゝことあるものと心得べし。

一、あまたにつきあひて、事なかれといふ言あり。何事にも通例には、己を出さず、人にしたがふをよしとすべしわけて若きものは此心得忘るべからず。

一、少しのひまにも、家業の吟味に心をよせ、むだに月日を費すまじきは農工商みな然ることなり。まして士なるものきつと心得べし。

一、宿老のかた〴〵のおゐんは勿論、通らざれば能はざる用あらば腰を折り、或は手をつき通るべし。憚らぬ躰にてあたりを踏鳴らし通るは以の外の無禮なり。諸侍いづれも、禮儀ていねいにいたすべきこと。

一、上へはいふに及はず、下へ對しても、戯言をきいて愼むべし。もし人にたゞされて、一言半句の戯も、一期の恥、すゝぎがたしと心得べし。

一、奉公のすきまあらば、武藝はいふまでもなし。大凡、物の本をもよみ、歌の道なども少しく學ぶべし。無手にいやしくしては、一言にて胸手のあさまなるを人に知られて用を缺くことあるものに心得べし。

一、よき友、大かたは學文、武藝にあり。よからざる友、大かたは碁、將棋、尺八、笛、亂舞の類にあり。人は善惡の友によるなれば、善者を選びて之に從ひ、惡者は除き改むべし。大抵知らずしても、格別の恥とならざることを止めて、要用なる、知らでは必ず恥となることを吟味し、早く習ふべし。

一、手すきにて、宿にあらば、表より裏破損の所は、修理の心がけあるべし。下々の者は後の考へなく、損ぜんとするかたちあれば、はや打破り、ぬきも、たるきも引放ち、物あぶる薪とするに至るあり。是も心を用ふべきの一事なり。其の他もなぞらへ知らるべし。

一、夕べには六つ限に門をはたとさし、人の出入によりてあけさすべし。此等のことは、いらざることのやうなれ